

**Oracle® Application Server Metadata Repository
Creation Assistant**

ユーザーズ・ガイド

10g (10.1.4.0.1) for UNIX Systems

部品番号 : B31485-01

2006 年 10 月

Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant ユーザーズ・ガイド, 10g (10.1.4.0.1) for UNIX Systems

部品番号 : B31485-01

原本名 : Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant User's Guide 10g (10.1.4.0.1) for UNIX

原本部品番号 : B28214-01

原本著者 : Megan Ginter

Copyright © 2006 Oracle. All rights reserved.

制限付権利の説明

このプログラム（ソフトウェアおよびドキュメントを含む）には、オラクル社およびその関連会社に所有権のある情報が含まれています。このプログラムの使用または開示は、オラクル社およびその関連会社との契約に記された制約条件に従うものとします。著作権、特許権およびその他の知的財産権と工業所有権に関する法律により保護されています。

独立して作成された他のソフトウェアとの互換性を得るために必要な場合、もしくは法律によって規定される場合を除き、このプログラムのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイル等は禁止されています。

このドキュメントの情報は、予告なしに変更される場合があります。オラクル社およびその関連会社は、このドキュメントに誤りが無いことの保証は致し兼ねます。これらのプログラムのライセンス契約で許諾されている場合を除き、プログラムを形式、手段（電子的または機械的）、目的に関係なく、複製または転用することはできません。

このプログラムが米国政府機関、もしくは米国政府機関に代わってこのプログラムをライセンスまたは使用する者に提供される場合は、次の注意が適用されます。

U.S. GOVERNMENT RIGHTS

Programs, software, databases, and related documentation and technical data delivered to U.S. Government customers are "commercial computer software" or "commercial technical data" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, use, duplication, disclosure, modification, and adaptation of the Programs, including documentation and technical data, shall be subject to the licensing restrictions set forth in the applicable Oracle license agreement, and, to the extent applicable, the additional rights set forth in FAR 52.227-19, Commercial Computer Software--Restricted Rights (June 1987). Oracle USA, Inc., 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065.

このプログラムは、核、航空産業、大量輸送、医療あるいはその他の危険が伴うアプリケーションへの用途を目的としておりません。このプログラムをかける目的で使用する際、上述のアプリケーションを安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性（**redundancy**）、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。万一かかるプログラムの使用に起因して損害が発生いたしましても、オラクル社およびその関連会社は一切責任を負いかねます。

Oracle、JD Edwards、PeopleSoft、Siebel は米国 Oracle Corporation およびその子会社、関連会社の登録商標です。その他の名称は、他社の商標の可能性がありえます。

このプログラムは、第三者の Web サイトへリンクし、第三者のコンテンツ、製品、サービスへアクセスすることがあります。オラクル社およびその関連会社は第三者の Web サイトで提供されるコンテンツについては、一切の責任を負いかねます。当該コンテンツの利用は、お客様の責任になります。第三者の製品またはサービスを購入する場合は、第三者と直接の取引となります。オラクル社およびその関連会社は、第三者の製品およびサービスの品質、契約の履行（製品またはサービスの提供、保証義務を含む）に関しては責任を負いかねます。また、第三者との取引により損失や損害が発生いたしましても、オラクル社およびその関連会社は一切の責任を負いかねます。

目次

はじめに	v
対象読者	vi
ドキュメントのアクセシビリティについて	vi
関連ドキュメント	vi
表記規則	vi
サポートおよびサービス	vii

1 OracleAS RepCA の概要と要件

1.1	OracleAS RepCA の概要	1-2
1.1.1	様々な種類のデータベース記憶域のサポート	1-2
1.1.2	ローカル・データベースおよびリモート・データベースのサポート	1-2
1.2	OracleAS RepCA を実行する手順	1-2
1.3	OracleAS RepCA を実行するコンピュータの要件	1-3
1.4	OracleAS RepCA のインストール	1-3
1.5	データベースの要件	1-4
1.5.1	前提条件チェック・ツールの実行	1-5
1.5.2	データベースのリリース	1-6
1.5.2.1	Oracle9i リリース 2 (9.2.x) データベース	1-7
1.5.2.2	Oracle Database 10g (10.1.x) データベース	1-7
1.5.2.3	Oracle Database 10g リリース 2 (10.2.x) データベース	1-7
1.5.3	Standard Edition データベース : 注意	1-8
1.5.4	スワップ領域の要件	1-8
1.5.5	SYSTEM 表領域および UNDO 表領域に必要なディスク領域	1-8
1.5.6	OracleAS Metadata Repository の表領域に必要なディスク領域	1-8
1.5.7	初期化パラメータ	1-9
1.5.8	データベース・オプション	1-12
1.5.9	PL/SQL パッケージ	1-13
1.5.10	DBMS_LDAP パッケージ	1-13
1.5.11	ナレッジ・ベース (Oracle Database 10g のみ必要)	1-15
1.5.12	Oracle Ultra Search が必要 (Oracle Database 10g リリース 2 (10.2.x) のみ)	1-16
1.5.13	パスワード・ファイル認証	1-17
1.5.14	スキーマおよび表領域	1-18
1.5.14.1	スキーマおよび表領域のリスト	1-18
1.5.14.2	すでに使用されているスキーマ名	1-19
1.5.14.3	すでに使用されている表領域名	1-20
1.5.14.4	表領域のサイズ	1-21

1.5.15	Oracle Internet Directory への登録	1-23
1.6	Oracle Internet Directory の要件	1-24
1.7	OracleAS RepCA の起動	1-24
1.8	次に読むべき項	1-25

2 既存のデータベースへの OracleAS Metadata Repository のロード

2.1	ファイル・システムを使用するデータベースへのインストール	2-2
2.2	RAW デバイスを使用するデータベースへのインストール	2-4
2.3	Real Application Clusters データベースへのインストール	2-7
2.3.1	インストールの概要	2-8
2.3.2	クラスタ・ファイル・システムまたはボリューム・マネージャを使用する Real Application Clusters データベースのインストール手順	2-9
2.3.3	RAW デバイスを使用する Real Application Clusters データベースの インストール手順	2-11
2.4	自動ストレージ管理を使用するデータベースへのインストール	2-14
2.4.1	ディスク・グループへのインストール	2-15
2.4.2	標準のファイルへのインストール	2-17
2.5	Oracle Managed Files を使用するデータベースへのインストール	2-17
2.6	ログ・ファイル内の問題のないエラー	2-20
2.6.1	SP2-0332 エラー	2-20
2.6.2	SP2-0606 エラー	2-20
2.6.3	Oracle Internet Directory のスキーマのロード中に発生したエラー	2-20
2.7	インストール後の手順	2-21
2.7.1	sqlnet.ora ファイルの更新	2-21
2.7.2	データベースの Oracle ホームへの ldap.ora ファイルのコピー	2-21
2.7.3	DCM スキーマのロック解除とパスワードの設定	2-22
2.7.4	Oracle Ultra Search 用のインスタンスの作成	2-22
2.8	ロードに失敗した場合	2-22
2.9	登録に失敗した場合	2-23
2.10	同じデータベースへの OracleAS Metadata Repository の再インストール	2-23

3 Oracle Internet Directory への OracleAS Metadata Repository の登録

3.1	Oracle Internet Directory への登録	3-2
3.2	登録後の手順	3-4
3.3	登録が完了する前に終了する場合、または登録が失敗した場合	3-4

4 OracleAS Metadata Repository の登録解除および削除

4.1	削除されない Oracle Internet Directory オブジェクト	4-2
4.2	データベースが Oracle Internet Directory データベースの場合	4-2
4.3	中間層で OracleAS Metadata Repository を使用している場合	4-2
4.4	ウィザードを使用した OracleAS Metadata Repository の登録解除および削除	4-2
4.5	OracleAS Metadata Repository の削除	4-5
4.6	OracleAS Metadata Repository の登録解除	4-7
4.7	cleanMR スクリプトを使用した OracleAS Metadata Repository の削除	4-10
4.8	ログ・ファイル内の問題のないエラー	4-11
4.9	Oracle Internet Directory オブジェクトの削除	4-12
4.10	登録解除の操作を取り消した場合のデータベースのクリーンアップ	4-12

A OracleAS RepCA の削除

B サイレント・インストール

B.1	サイレント・インストール	B-2
B.2	レスポンス・ファイルとマップ・ファイルの作成	B-2
B.2.1	テンプレートからのレスポンス・ファイルとマップ・ファイルの作成	B-2
B.2.2	レスポンス・ファイルの例	B-2
B.2.2.1	ファイル・システムを使用するデータベースに OracleAS Metadata Repository を ロードする場合のファイルの例	B-3
B.2.2.2	Oracle Internet Directory に登録する場合のレスポンス・ファイルの例	B-4
B.3	インストールの開始	B-5
B.4	インストール後	B-5
B.5	サイレント・インストールのセキュリティに関するヒント	B-6

C OracleAS RepCA のトラブルシューティング

C.1	データベースに接続できない	C-2
C.2	sys ユーザーで接続できない	C-2
C.3	領域不足	C-3
C.4	複数ノードの指定後、Real Application Clusters データベースでロードが失敗する	C-3
C.5	手動の手順: 失敗した登録のクリーンアップまたは OracleAS Metadata Repository の 登録解除	C-3
C.6	ORA-01403: データが見つかりません。	C-5
C.7	ORA-06510: PL/SQL: ユーザー定義の例外が発生しましたが、処理されませんでした	C-6
C.8	ORA-01031: 権限の不足	C-6
C.9	OracleAS Metadata Repository のロード後に、DSGATEWAY スキーマに 無効なオブジェクトが作成される	C-6
C.10	その他の情報	C-6

索引

はじめに

このマニュアルでは、Oracle Application Server Repository Creation Assistant ツール (OracleAS RepCA) を実行して、OracleAS Metadata Repository を既存のデータベースにロードする方法について説明します。また、OracleAS RepCA は、OracleAS Metadata Repository を Oracle Internet Directory に登録する際にも使用できます。

対象読者

このマニュアルは、データベース管理者を対象としています。データベースに SYS ユーザーとしてログインする必要があります。データベースの初期化パラメータ値の変更、スキーマおよび表領域のバックアップ、データベースの再起動などの手順を実行します。

ドキュメントのアクセシビリティについて

オラクル社は、障害のあるお客様にもオラクル社の製品、サービスおよびサポート・ドキュメントを簡単にご利用いただけることを目標としています。オラクル社のドキュメントには、ユーザーが障害支援技術を使用して情報を利用できる機能が組み込まれています。HTML 形式のドキュメントで用意されており、障害のあるお客様が簡単にアクセスできるようにマークアップされています。標準規格は改善されつつあります。オラクル社はドキュメントをすべてのお客様がご利用できるように、市場をリードする他の技術ベンダーと積極的に連携して技術的な問題に対応しています。オラクル社のアクセシビリティについての詳細情報は、Oracle Accessibility Program の Web サイト <http://www.oracle.com/accessibility/> を参照してください。

ドキュメント内のサンプル・コードのアクセシビリティについて

スクリーン・リーダーは、ドキュメント内のサンプル・コードを正確に読めない場合があります。コード表記規則では閉じ括弧だけを行に記述する必要があります。しかし JAWS は括弧だけの行を読まない場合があります。

外部 Web サイトのドキュメントのアクセシビリティについて

このドキュメントにはオラクル社およびその関連会社が所有または管理しない Web サイトへのリンクが含まれている場合があります。オラクル社およびその関連会社は、それらの Web サイトのアクセシビリティに関しての評価や言及は行っておりません。

Oracle サポート・サービスへの TTY アクセス

アメリカ国内では、Oracle サポート・サービスへ 24 時間年中無休でテキスト電話 (TTY) アクセスが提供されています。TTY サポートについては、(800)446-2398 にお電話ください。

関連ドキュメント

詳細は、次のマニュアルを参照してください。

- Oracle Application Server のインストール・ガイド
- 『Oracle Application Server 管理者ガイド』
- 『Oracle Application Server 概要』

表記規則

本文では、次の表記規則を使用します。

規則	意味
太字	太字は、操作に関連するグラフィカル・ユーザー・インタフェース要素、または本文中で定義されている用語および用語集に記載されている用語を示します。
イタリック	イタリックは、特定の値を指定するプレースホルダ変数を示します。
固定幅フォント	固定幅フォントは、パラグラフ内のコマンド、URL、例に記載されているコード、画面に表示されるテキスト、または入力するテキストを示します。

サポートおよびサービス

次の各項に、各サービスに接続するための URL を記載します。

Oracle サポート・サービス

オラクル製品サポートの購入方法、および Oracle サポート・サービスへの連絡方法の詳細は、次の URL を参照してください。

<http://www.oracle.co.jp/support/>

製品マニュアル

製品のマニュアルは、次の URL にあります。

<http://otn.oracle.co.jp/document/>

研修およびトレーニング

研修に関する情報とスケジュールは、次の URL で入手できます。

<http://www.oracle.co.jp/education/>

その他の情報

オラクル製品やサービスに関するその他の情報については、次の URL から参照してください。

<http://www.oracle.co.jp>

<http://otn.oracle.co.jp>

注意： ドキュメント内に記載されている URL や参照ドキュメントには、Oracle Corporation が提供する英語の情報も含まれています。日本語版の情報については、前述の URL を参照してください。

OracleAS RepCA の概要と要件

OracleAS Metadata Repository は、OracleAS Metadata Repository 用に新しくデータベースを作成しなくても、既存のデータベースにインストールできます。この章では、Oracle Application Server Repository Creation Assistant (OracleAS RepCA) の使用方法について説明します。このツールは、インストールに使用します。また、OracleAS RepCA は、OracleAS Metadata Repository を Oracle Internet Directory に登録する際にも使用できます。

注意：

- このマニュアルでは、既存の OracleAS Metadata Repository をアップグレードする方法については説明しません。アップグレードの手順については、『Oracle Application Server アップグレードおよび互換性ガイド』を参照してください。
 - OracleAS RepCA では、リリース 2 (9.0.2) の Metadata Repository を、10g (9.0.4) の Oracle Internet Directory に登録できません。
 - OracleAS Metadata Repository は、サポートされているバージョンの Oracle Internet Directory にのみ登録できます。詳細は、[第 1.6 項「Oracle Internet Directory の要件」](#)を参照してください。
 - OracleAS Metadata Repository は、Oracle E-Business Suite インスタンスを含むデータベースにロードできません。現在のところ、サポートされていません。
-

この章の構成：

- [第 1.1 項「OracleAS RepCA の概要」](#)
- [第 1.2 項「OracleAS RepCA を実行する手順」](#)
- [第 1.3 項「OracleAS RepCA を実行するコンピュータの要件」](#)
- [第 1.4 項「OracleAS RepCA のインストール」](#)
- [第 1.5 項「データベースの要件」](#)
- [第 1.6 項「Oracle Internet Directory の要件」](#)
- [第 1.7 項「OracleAS RepCA の起動」](#)
- [第 1.8 項「次に読むべき項」](#)

1.1 OracleAS RepCA の概要

OracleAS RepCA を使用して、次の操作を実行できます。

- 既存のデータベースへの OracleAS Metadata Repository のロード
- Oracle Internet Directory への OracleAS Metadata Repository の登録
- データベースからの OracleAS Metadata Repository スキーマおよび表領域の削除
- Oracle Internet Directory からの OracleAS Metadata Repository の登録解除

1.1.1 様々な種類のデータベース記憶域のサポート

OracleAS RepCA は、単一ノードのデータベースおよび Real Application Clusters データベースに OracleAS Metadata Repository をロードできます。OracleAS RepCA は、次の記憶域管理オプションを使用して OracleAS Metadata Repository をロードできます。

- オペレーティング・システムの標準ファイルとして作成されたデータ・ファイル
- クラスタ・ファイル・システムのデータ・ファイル
- 自動ストレージ管理 (ASM) インスタンス
- Oracle Managed Files
- RAW デバイス

1.1.2 ローカル・データベースおよびリモート・データベースのサポート

OracleAS RepCA を実行する際に、ターゲット・データベースを指定する必要があります。ターゲット・データベースは、操作 (OracleAS Metadata Repository のロード、登録、削除または登録解除) の実行先となるデータベースです。このデータベースには、OracleAS RepCA と同じコンピュータ (ローカル・データベース) または異なるコンピュータ (リモート・データベース) で実行しているデータベースを指定できます。

リモート・データベースの場合は、データベースを実行しているコンピュータのオペレーティング・システムとは別のオペレーティング・システムのコンピュータで OracleAS RepCA を実行することができます。たとえば、OracleAS RepCA を Windows コンピュータで実行し、Linux コンピュータで実行しているデータベースに OracleAS Metadata Repository をロードすることができます。

1.2 OracleAS RepCA を実行する手順

OracleAS RepCA を実行するには、インストールから始める必要があります。

1. OracleAS RepCA をインストールします。

OracleAS Metadata Repository Creation Assistant の CD-ROM から、インストーラを実行する必要があります。Oracle Application Server の DVD-ROM を使用する場合、インストーラは repca ディレクトリにあります。

インストール時に、OracleAS RepCA のインストール先ディレクトリを指定します。

2. インストール先ディレクトリから、OracleAS RepCA を実行します。

1.3 OracleAS RepCA を実行するコンピュータの要件

OracleAS RepCA を実行するコンピュータは、次の要件を満たしている必要があります。

注意： このマニュアルに含まれる Oracle Application Server Repository Creation Assistant 10g (10.1.4.0.1) のハードウェアとソフトウェア要件は、このマニュアルの作成された時点での情報です。ハードウェアとソフトウェア要件の最新情報については、Oracle Application Server Certification Information 10g (10.1.4.0.1) を参照してください。

表 1-1 OracleAS RepCA を実行するコンピュータの要件

項目	要件
オペレーティング・システム	Solaris 8 Solaris 9 HP-UX 11i (11.11) PA-RISC HP-UX 11i (11.23) PA-RISC Red Hat Enterprise Linux AS/ES 2.1、Update 5 Red Hat Enterprise Linux AS/ES 3.0、Update 3 SUSE Linux Enterprise Server 8、SP3 SUSE Linux Enterprise Server 9 ハードウェアの要件については、Oracle Application Server のインストール・ガイドを参照してください。
ディスク領域	OracleAS RepCA ソフトウェアをインストールするには、695MB 以上必要です。 注意： OracleAS RepCA を実行してロード操作を行うたびに、ログ・ファイル用に約 10MB 必要です。 データベースに必要なディスク領域については、第 1.5.5 項「SYSTEM 表領域および UNDO 表領域に必要なディスク領域」および第 1.5.6 項「OracleAS Metadata Repository の表領域に必要なディスク領域」を参照してください。
メモリー	512MB
仮想メモリー	1535MB
ディスプレイ	256 色

1.4 OracleAS RepCA のインストール

OracleAS RepCA をインストールするには、次の手順を実行します。

1. OracleAS Metadata Repository Creation Assistant の CD-ROM または Oracle Application Server の DVD-ROM を挿入します。
2. コンピュータが CD-ROM または DVD-ROM を自動的にマウントしない場合は、マウント・ポイントを手動で設定します。
3. インストーラを起動します。
 CD-ROM: runInstaller を実行してインストーラを起動します。
 DVD-ROM: repca ディレクトリに移動し、runInstaller を実行してインストーラを起動します。
4. 「ようこそ」画面：「次へ」をクリックします。

5. 「ファイルの場所の指定」画面：「名前」フィールドで、この OracleAS RepCA 環境の名前を指定します。「Oracle ホームの名前」は 128 文字以下にする必要があります、英数字およびアンダースコアのみ使用できます。たとえば、repca10_1_2 です。

「インストール先パス」フィールドに、OracleAS RepCA のインストール先ディレクトリをフルパスで指定します。このマニュアルでは、このディレクトリを OracleAS RepCA の Oracle ホームと呼びます。

「次へ」をクリックします。

6. 「言語の選択」画面：デフォルトでは、インストーラによって、英語およびオペレーティング・システム言語のテキストで OracleAS RepCA がインストールされます。言語を追加する必要がある場合は、「選択された言語」ボックスに必要な言語を移動します。

「次へ」をクリックします。

7. 「Repository Creation Assistant の起動」画面：インストール後、すぐに OracleAS RepCA を実行する場合は、「はい」を選択します。それ以外の場合は、「いいえ」を選択します。いずれの場合も、インストール後はいつでも OracleAS RepCA を実行できます。

「次へ」をクリックします。

8. 「サマリー」画面：「インストール」をクリックして、インストールを開始します。

9. 「コンフィギュレーション・アシスタント」画面：インストーラによってコンフィギュレーション・アシスタントが実行され、OracleAS RepCA がインストールされます。

注意：「Repository Creation Assistant の起動」画面で「はい」を選択した場合は、インストーラによって、OracleAS RepCA がコンフィギュレーション・アシスタントとして起動されます。OracleAS RepCA の実行中、「コンフィギュレーション・アシスタント」画面では、「OracleAS Repository Creation Assistant」行のステータスに「処理中です」が表示されます。OracleAS RepCA を終了すると、インストーラによって「インストールの終了」画面が表示されます。

インストーラは、OracleAS RepCA を終了するまで実行中のままです。

10. 「インストールの終了」画面：「終了」をクリックして、インストーラを終了します。

1.5 データベースの要件

OracleAS Metadata Repository をインストールするデータベースは、表 1-2 に示す各項目について一定の要件を満たす必要があります。

ヒント： OracleAS RepCA を実行する前に、前提条件チェック・ツール（第 1.5.1 項「前提条件チェック・ツールの実行」を参照）を実行します。このツールによって、様々なデータベース要件が確認されます。OracleAS RepCA でも要件は確認されますが、前提条件チェック・ツールは、1 つ目の満たされていない要件で停止することなく要件を確認するため、より簡単に使用できます。つまり、満たされていない要件を 1 つ解決した後、OracleAS RepCA を再実行して次の要件を解決するという手順を繰り返すのではなく、すべての要件を一度に解決することができます。

要件を満たすために、データベースを再起動する必要がある場合があります。

その後で OracleAS RepCA を実行して要件を確認すると、OracleAS Metadata Repository は、ほぼ正常にインストールされます。

表 1-2 に、前提条件チェック・ツールで確認される項目を示します。

表 1-2 データベースの要件

項目	確認
第 1.5.2 項「データベースのリリース」	自動
第 1.5.3 項「Standard Edition データベース : 注意」	-
第 1.5.4 項「スワップ領域の要件」	-
第 1.5.5 項「SYSTEM 表領域および UNDO 表領域に必要なディスク領域」	これらの表領域が AUTOEXTEND に設定されていない場合に確認されます。
第 1.5.6 項「OracleAS Metadata Repository の表領域に必要なディスク領域」	-
第 1.5.7 項「初期化パラメータ」	一部自動ではない
第 1.5.8 項「データベース・オプション」	自動
第 1.5.9 項「PL/SQL パッケージ」	自動
第 1.5.10 項「DBMS_LDAP パッケージ」	自動
第 1.5.11 項「ナレッジ・ベース (Oracle Database 10g のみ必要)」	自動
第 1.5.12 項「Oracle Ultra Search が必要 (Oracle Database 10g リリース 2 (10.2.x) のみ)」	自動
第 1.5.13 項「パスワード・ファイル認証」	-
第 1.5.14 項「スキーマおよび表領域」	自動
第 1.5.15 項「Oracle Internet Directory への登録」	-

1.5.1 前提条件チェック・ツールの実行

OracleAS RepCA には、前提条件チェック・ツールが含まれ、このツールは、ORACLE_HOME/repca/prereq ディレクトリに格納されています (ORACLE_HOME は、OracleAS RepCA のインストール先です)。このツールによって、ほぼすべてのデータベース要件が確認されます。表 1-2 に、ツールで確認される項目を示します。

このツールは、OracleAS RepCA を実行する前に実行する必要があります。

ヒント： このツールは、データベースがすべての要件を満たすまで、繰返し実行できます。

使用方法：

```
DBPrereqChecker -DBHOST dbhost -DBPORT dbport -DBNAME dbname
                 -SYSPWD syspassword [-LOGDIR logdir] [-HELP]
```

表 1-3 DBPrereqChecker のパラメータ

パラメータ	説明
-DBHOST dbhost	データベースを実行しているコンピュータの名前を指定します。
-DBPORT dbport	データベース・リスナーがリスニングしているポートを指定します。
-DBNAME dbname	データベースのサービス名を指定します。
-SYSPWD syspassword	SYS ユーザーのパスワードを指定します。

表 1-3 DBPrereqChecker のパラメータ（続き）

パラメータ	説明
-LOGDIR <i>logdir</i>	ログ・ファイルの書き込み先ディレクトリを指定します。ディレクトリに対する書き込み権限を持っている必要があります。 ログ・ファイルの名前は、RepcaPrerequisiteCheck.log です。ログ・ファイルには、満たされている要件および満たされていない要件の情報が格納されます。 このパラメータを指定しない場合、書き込み先はコンソールになります。
-HELP	ツールのヘルプを表示します。

例：

```
prompt> DBPrereqChecker -DBHOST mydb.mydomain.com -DBPORT 1521
          -DBNAME orcl1.mydomain.com -SYSPWD topsecret -LOGDIR /tmp
```

1.5.2 データベースのリリース

OracleAS Metadata Repository は、次のデータベース・リリースにインストールできます。

注意： このマニュアルに含まれる Oracle Application Server Repository Creation Assistant 10g (10.1.4.0.1) のハードウェアとソフトウェア要件は、このマニュアルの作成された時点での情報です。ハードウェアとソフトウェア要件の最新情報については、Oracle Application Server Certification Information 10g (10.1.4.0.1) を参照してください。

表 1-4 サポートされるデータベース・リリース

データベースのシリーズ	サポートされるリリース	詳細情報
Oracle9i リリース 2 (9.2.x)	9.2.0.7 以上	第 1.5.2.1 項「Oracle9i リリース 2 (9.2.x) データベース」
Oracle Database 10g リリース 1 (10.1.x)	10.1.0.5 以上	第 1.5.2.2 項「Oracle Database 10g (10.1.x) データベース」
Oracle Database 10g リリース 2 (10.2.x)	10.2.0.2 以上	第 1.5.2.3 項「Oracle Database 10g リリース 2 (10.2.x) データベース」

データベースのリリースを確認するには、次のように PRODUCT_COMPONENT_VERSION ビューを問い合わせます。

```
prompt> sqlplus "sys/password as sysdba"
SQL> select version from product_component_version where product like 'Oracle%9i%'
      or product like 'Oracle%Database%';
```

password は、SYS ユーザーのパスワードを指定します。

1.5.2.1 Oracle9i リリース 2 (9.2.x) データベース

Oracle9i リリース 2 (9.2.x) データベースで Oracle Application Server Repository Creation Assistant を実行する前に、9.2.0.7 パッチ・セット（パッチ・セット番号 4163445）をインストールする必要があります。このパッチ・セットは、[OracleMetaLink](http://metalink.oracle.com) (<http://metalink.oracle.com>) からダウンロードできます。

データベースを 9.2.0.7 にアップグレードするには、次の手順を確実に実行してください。これらの手順は、9.2.0.7 パッチ・セットの README ファイルに記載されています。

- 初期化パラメータ (init.ora) がパッチ・セットの README ファイルに記載されているとおりに指定され、SYSTEM 表領域および XDB 表領域に十分な空き領域があり、CLUSTER_DATABASE 初期化パラメータが README ファイルに記載されているとおりに指定されていることを確認します。
- catpatch.sql スクリプトを実行します (README ファイルの手順 6)。
- utlrlp.sql を実行します (パッチ・セットの README ファイルの手順 10)。
- Oracle Internet Directory リリース 9.2.0.x を使用していた場合のみ、Oracle Internet Directory の手順を実行します。データベースで Oracle Internet Directory を使用していなかった場合は、この手順を実行する必要はありません。

catpatch.sql スクリプトが実行されているかどうかを確認するには、SQL*Plus で次のコマンドを実行します。

```
prompt> sqlplus "sys/password as sysdba"
SQL> select comp_name, version, status from dba_registry
       where comp_id = 'CATPROC';
```

結果は次のとおりです。

COMP_NAME	VERSION	STATUS
-----	-----	-----
Oracle9i Packages and Types	9.2.0.7.0	Valid

注意： catpatch.sql スクリプトが、データベースに対して実行済であることを確認してください。データベースの Oracle ホームにパッチを適用して 9.2.0.7 にアップグレードしている場合でも、Database Configuration Assistant (DBCA) を使用して作成した新しいデータベースでは、catpatch.sql スクリプトが実行されていない場合があります。これは、catpatch.sql スクリプトが実行されていないシード・テンプレートまたはカスタム・テンプレートから、DBCA を使用してデータベースを作成した場合に生じます。

このようなデータベースの場合、最初にデータベースに対して catpatch.sql を実行してから OracleAS RepCA を実行します。

1.5.2.2 Oracle Database 10g (10.1.x) データベース

Oracle Database 10g (10.1.x) データベースで Oracle Application Server Repository Creation Assistant を実行する前に、10.1.0.5 パッチ・セット（パッチ・セット番号 4505133）をインストールする必要があります。このパッチ・セットは、[OracleMetaLink](http://metalink.oracle.com) (<http://metalink.oracle.com>) からダウンロードできます。

1.5.2.3 Oracle Database 10g リリース 2 (10.2.x) データベース

Oracle Database 10g (10.2.x) データベースで Oracle Application Server Repository Creation Assistant を実行する前に、10.2.0.2 パッチ・セット（パッチ・セット番号 4547817）をインストールする必要があります。このパッチ・セットは、[OracleMetaLink](http://metalink.oracle.com) (<http://metalink.oracle.com>) からダウンロードできます。

1.5.3 Standard Edition データベース : 注意

サポートされているデータベースの Standard Edition を使用する場合は、Oracle Application Server Metadata Repository Creation Assistant を実行する前に、データベースのインストール後の手順の一環として、sdopatch.sql スクリプトを実行する必要があります。sdopatch.sql スクリプトは次の場所にあります。

`Oracle_Home/md/admin/sdopatch.sql`

`Oracle_Home` は、データベースの Oracle ホームです。

サポートされているデータベースの Standard Edition を使用する場合、Oracle Internet Directory のマルチマスター・レプリケーション機能が使用できないことに注意してください（この機能は、Enterprise Edition データベースのみで使用可能な ASR に依存するためです）。

かわりにファンアウト・レプリケーション機能を使用できます。詳細は、『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』を参照してください。

1.5.4 スワップ領域の要件

データベースを実行するコンピュータには、512MB 以上の使用可能なスワップ領域が必要です。確認および必要に応じて増やす方法については、Oracle Application Server のインストール・ガイドを参照してください。

1.5.5 SYSTEM 表領域および UNDO 表領域に必要なディスク領域

SYSTEM 表領域および UNDO 表領域には、次の空き領域が必要です。

表 1-5 SYSTEM 表領域および UNDO 表領域に必要な空き領域

表領域	必要な空き領域
SYSTEM	367,001,600 バイト
UNDO	367,001,600 バイト

これらの表領域が AUTOEXTEND に設定されている場合は、ファイル・システム内の使用可能なすべての領域が表領域に使用される可能性があるため、OracleAS RepCA で領域の確認はできません。そのため、OracleAS RepCA で、ファイル・システムの空き領域は確認できません。管理者が確認する必要があります。

これらの表領域が AUTOEXTEND に設定されていない場合は、OracleAS RepCA で表領域に使用可能な領域をデータベースに問い合わせることができるため、OracleAS RepCA で空き領域を確認できます。

AUTOEXTEND の有効化および無効化の手順については、『Oracle Database 管理者ガイド』を参照してください。

1.5.6 OracleAS Metadata Repository の表領域に必要なディスク領域

自動ストレージ管理（ASM）を使用しているデータベースに OracleAS Metadata Repository をインストールする場合、そのディスク・グループで OracleAS Metadata Repository の表領域用に、最低 2GB のディスク領域が割り当てられていることを確認してください。それ以外の場合は、OracleAS Metadata Repository の表領域用に、1.3GB 以上のディスク領域があることを確認してください。

このディスク領域の要件は、SYSTEM 表領域および UNDO 表領域（前述の項を参照）に追加で必要な領域です。

1.5.7 初期化パラメータ

インストール時に、データベースの初期化パラメータが表 1-6 および表 1-7 に示す値に設定されている必要があります。

- 表 1-6 に、OracleAS RepCA では確認されないパラメータを示します。これらのパラメータは、管理者が確認する必要があります。
- 表 1-7 に、OracleAS RepCA で確認されるパラメータを示します。要件を満たさないパラメータが検出された場合は、OracleAS RepCA によってアラートが表示されます。OracleAS RepCA を続行するには、パラメータの値を変更する必要があります。

インストール後、これらのパラメータの大部分はパフォーマンスを最適化するために必要に応じて変更できます。

注意： db_block_size パラメータの値は 8192 以上である必要があります。このパラメータは、データベースが作成されたときに設定され、変更できません。このパラメータの値が 8192 より小さいデータベースは、Metadata Repository に使用できません。

表 1-6 手動で確認する必要がある初期化パラメータ

パラメータ	必要な値	パラメータ・クラス	注意
nls_length_semantics	BYTE	動的	注意： OracleAS RepCA では、このパラメータは確認されません。手動で確認する必要があります。 このパラメータには、CHAR はサポートされていません。
max_commit_propagation_delay	0	静的	注意： OracleAS RepCA では、このパラメータは確認されません。手動で確認する必要があります。 このパラメータは、Real Application Clusters データベースに OracleAS Metadata Repository をロードする場合にのみ必要です。

表 1-7 初期化パラメータ：必要な値（OracleAS RepCA で確認される）

パラメータ	必要な値	パラメータ・クラス	注意
db_block_size	8192 以上	変更不可。「注意」列を参照。	データベースの作成後にこのパラメータ値を変更することはできません。
aq_tm_processes	1 以上	動的	このパラメータの値はインストール後に変更できます。
open_cursors	300 以上	動的	このパラメータの値はインストール後に変更できます。
job_queue_processes	1 以上	動的	このパラメータの値はインストール後に変更できます。
db_cache_size	144MB より大きい値	動的	このパラメータの値はインストール後に変更できます。
shared_pool_size	175MB より大きい値	動的	このパラメータの値はインストール後に変更できます。
java_pool_size	120MB より大きい値	静的	このパラメータの値はインストール後に変更できます。

表 1-7 初期化パラメータ：必要な値（OracleAS RepCA で確認される）（続き）

パラメータ	必要な値	パラメータ・クラス	注意
pga_aggregate_target	96MB より大きい値	動的	このパラメータの値はインストール後に変更できます。
query_rewrite_enabled	TRUE	動的	OracleAS Wireless がこの値を必要とするため、インストール後はこのパラメータを変更できません。
query_rewrite_integrity	trusted または enforced	動的	OracleAS Wireless がこの値を必要とするため、インストール後はこのパラメータを変更できません。
sessions	400 以上	静的	このパラメータの値はインストール後に変更できます。
undo_management	AUTO	静的	このパラメータの値はインストール後に変更できます。
_system_trig_enabled	true	動的	これは、Oracle の内部パラメータです。システムのトリガーを使用可能にするには、true を設定します。
db_create_file_dest	OracleAS RepCA が OracleAS Metadata Repository 用のデータ・ファイルを作成するディレクトリ	動的	この初期化パラメータは、Oracle Managed Files を使用するデータベースに OracleAS Metadata Repository をインストールする場合のみ必要です。
max_enabled_roles	100 以上	静的	この初期化パラメータは、Oracle9i リリース 2 (9.2.x) データベースを使用する場合にのみ必要です。
compatible	Oracle9i リリース 2 (9.2.x) データベースを使用している場合： 9.2.0.0.0 以上 Oracle Database 10g を使用している場合： 10.1.0.2.0 以上	静的	このパラメータは、9.2.0.0.0 より低い値に設定しないでください。
sga_target	600MB 以上	動的	この初期化パラメータは、Oracle Database 10g を使用する場合にのみ必要です。

パラメータ値の確認

SQL*Plus を使用して初期化パラメータの値を確認するには、次のように show parameters コマンドを使用します。

```
prompt> sqlplus "sys/password as sysdba"
SQL> show parameters parameter_name
```

password は、SYS ユーザーのパスワードを指定します。

または、次のように V\$PARAMETER ビューを問い合わせることで値を確認することもできます。

```
prompt> sqlplus "sys/password as sysdba"
SQL> select name,value from v$parameter;
```

パラメータ値の変更

パラメータの値を変更する方法は、そのパラメータが静的または動的のどちらであるか、あるいはデータベースがパラメータ・ファイルとサーバー・パラメータ・ファイルのどちらを使用するかによって決まります。

パラメータ・ファイル、サーバー・パラメータ・ファイルおよびパラメータ値の変更方法については、使用するデータベースの『Oracle Database 管理者ガイド』を参照してください。

データベースでパラメータ・ファイルを使用する場合、次のいずれかの方法でパラメータ値を変更できます。

- パラメータ・ファイルを編集してからデータベースを再起動します。この方法は、静的なパラメータと動的なパラメータのどちらにも使用できます。
- 動的なパラメータの値は、`alter system` コマンドで変更できますが、この方法で設定した新しい値は、データベースを停止するまでの間のみ有効になります。たとえば、次のようになります。

```
prompt> sqlplus "sys/password as sysdba"
SQL> alter system set aq_tm_processes=9;
```

データベースがサーバー・パラメータ・ファイルを使用する場合は、`alter system` コマンドでパラメータ値を変更します。静的なパラメータの場合は、`scope` を `spfile` に設定します。新しい値を有効にするには、データベースを再起動する必要があります。動的なパラメータの場合は、`scope` を `spfile`、`memory` または `both` に設定します。値を永続させるには、`scope` を `spfile` または `both` に設定します。たとえば、次のようになります。

```
prompt> sqlplus "sys/password as sysdba"
SQL> alter system set aq_tm_processes=9 scope=both;
```

内部パラメータ値の変更

Oracle の内部パラメータ (`_system_trig_enabled` など) を変更するには、パラメータ名を二重引用符で囲む必要があります。

```
prompt> sqlplus "sys/password as sysdba"
SQL> alter system set "_system_trig_enabled"=true;
```

パラメータ名が二重引用符で囲まれていない場合は、エラーが表示されます。

```
prompt> sqlplus "sys/password as sysdba"
SQL> alter system set _system_trig_enabled=true;
*
ERROR at line 1: ORA-00911: invalid character
```

1.5.8 データベース・オプション

データベースでは、次のデータベース・オプションが有効になっている必要があります。

表 1-8 必要なデータベース・オプション

必要なオプション	データベースにインストールされているオプションの確認方法								
OLAP ウィンドウ・ファンクション パラレル・ロード	これらのオプションがデータベースで有効になっているかどうかを確認するには、次のように V\$OPTION ビューを問い合わせます (<i>password</i> は SYS ユーザーのパスワードを指定します)。 <pre>prompt> sqlplus "sys/password as sysdba" SQL> select * from v\$option;</pre> 問合せ結果の中に、次の 2 行が表示されます。 <table><tr><td>PARAMETER</td><td>VALUE</td></tr><tr><td>-----</td><td>-----</td></tr><tr><td>OLAP Window Functions</td><td>TRUE</td></tr><tr><td>Parallel load</td><td>TRUE</td></tr></table>	PARAMETER	VALUE	-----	-----	OLAP Window Functions	TRUE	Parallel load	TRUE
PARAMETER	VALUE								
-----	-----								
OLAP Window Functions	TRUE								
Parallel load	TRUE								
Java	<pre>prompt> sqlplus "sys/password as sysdba" SQL> select count(*) from dba_objects where object_type like 'JAVA%' and owner = 'SYS' and status = 'VALID';</pre> 返される数は 0 より大きい値です。								
Intermedia	<pre>prompt> sqlplus "sys/password as sysdba" SQL> select count(name) from sys.props\$ where name = 'EXPORT_VIEWS_VERSION';</pre> 返される数は 0 より大きい値です。								
Oracle Text	<pre>prompt> sqlplus "sys/password as sysdba" SQL> select count(*) from dba_views where owner = 'CTXSYS' and view_name = 'CTX_VERSION';</pre> 返される数は 0 より大きい値です。								
Oracle Spatial	<pre>prompt> sqlplus "sys/password as sysdba" SQL> select value from v\$option where parameter = 'Spatial'</pre> 返される値は true です。								

1.5.9 PL/SQL パッケージ

データベースには、次の PL/SQL パッケージがインストールされている必要があります。

```
DBMS_DDL
DBMS_LOCK
DBMS_OUTPUT
DBMS_REPUTIL
DBMS_SQL
DBMS_STATS
DBMS_UTILITY
UTL_FILE
UTL_RAW
```

データベースにパッケージがインストールされているかどうかを確認するには、ALL_OBJECTS ビューを問い合わせます。次の例は、DBMS_DDL パッケージを確認しています。

```
prompt> sqlplus "sys/password as sysdba"
SQL> select count(object_name) from all_objects
      where object_name like 'DBMS_DDL%' and
      status = 'VALID';
```

パッケージごとに問合せを実行します。DBMS_DDL をそれぞれのパッケージの名前で置き換えます。返される数は 0 より大きい値です。

1.5.10 DBMS_LDAP パッケージ

データベースに DBMS_LDAP パッケージが含まれていて、そのパッケージが有効であることを確認します。有効でない場合、パッケージを再インストールする必要があります。

1. DBMS_LDAP パッケージのリリースが 2 であることを確認します。次の SQL コマンドにより 0 が返されます。

```
prompt> sqlplus "sys/password as sysdba"
SQL> select dbms_ldap_util.check_interface_version('2') from dual;

DBMS_LDAP_UTIL.CHECK_INTERFACE_VERSION('2')
-----
0
```

このコマンドによって、0 以外の値が返される場合、または次のようなエラーが返される場合、

```
The DBMS_LDAP package supplied with this database doesn't support the
version 2 interface used by 904 components.
```

パッケージを再ロードする必要があります。この項の最後の「[DBMS_LDAP パッケージの再ロード](#)」に進んでください。

2. DBMS_LDAP パッケージが有効であることを確認します。次の SQL コマンドにより 9 が返されます。
 - a. 次の行を含むファイルを作成します。ファイル名には、たとえば test_ldap.sql など、任意の名前を付けることができます。

```
select count(*) from dba_objects where
( object_name = 'DBMS_LDAP' and
  object_type = 'PACKAGE' and
  status = 'VALID' and owner = 'SYS'
) OR
( object_name = 'DBMS_LDAP' and
```

```

object_type = 'PACKAGE BODY' and
status = 'VALID' and owner = 'SYS'
) OR
( object_name = 'DBMS_LDAP_UTL' and
object_type = 'PACKAGE' and
status = 'VALID' and owner = 'SYS'
) OR
( object_name = 'DBMS_LDAP_UTL' and
object_type = 'PACKAGE BODY' and
status = 'VALID' and owner = 'SYS'
) OR
( object_name = 'DBMS_LDAP' and
object_type = 'SYNONYM' and
status = 'VALID' and owner = 'PUBLIC'
) OR
( object_name = 'DBMS_LDAP_UTL' and
object_type = 'SYNONYM' and
status = 'VALID' and owner = 'PUBLIC'
) OR
( object_name = 'DBMS_LDAP_API_FFI' and
object_type = 'PACKAGE' and
status = 'VALID' and owner = 'SYS'
) OR
( object_name = 'DBMS_LDAP_API_FFI' and
object_type = 'PACKAGE BODY' and
status = 'VALID' and owner = 'SYS'
) OR
( object_name = 'DBMS_LDAP_API_LIB' and
object_type = 'LIBRARY' and
status = 'VALID' and owner = 'SYS'
);

```

- b. SQL*Plus でファイルを実行します。たとえば、ファイル名が `test_ldap.sql` の場合、コマンドは次のとおりです。

```

prompt> sqlplus "sys/password as sysdba"
SQL> @test_ldap.sql

COUNT(*)
-----
          9

```

このコマンドによって 9 以外の値が返される場合、パッケージを再ロードする必要があります。

DBMS_LDAP パッケージの再ロード

1. 次のファイルが `ORACLE_HOME/rdbms/admin` ディレクトリに存在することを確認します。

- `catldap.sql`
- `dbmsldap.sql`
- `prvtldap.plb`
- `prvtldh.plb`

2. SQL*Plus を使用して、SYS ユーザーとして `catldap.sql` を実行します。

```

prompt> cd $ORACLE_HOME/rdbms/admin
prompt> sqlplus "sys/password as sysdba"
SQL> @catldap.sql

```


1.5.11 ナレッジ・ベース（Oracle Database 10g のみ必要）

Oracle Database 10g に OracleAS Metadata Repository をインストールし、OracleAS Portal を使用する場合は、データベースに、Oracle Text で提供されたナレッジ・ベースが必要です。ナレッジ・ベースは、テーマの索引付けおよび ABOUT 問合せに使用する概念の階層ツリーです。

OracleAS RepCA によって、データベースにナレッジ・ベースがインストールされているかどうか確認されます。インストールされていない場合は、OracleAS RepCA によって次の警告が表示されます。

```
"Knowledge base not found.
```

```
OracleAS RepCA was not able to find the Oracle Text Supplied Knowledge
Base in the database specified.
```

```
If you are planning to use this repository for installing OracleAS
Portal, you have to install Oracle Text Supplied Knowledge Base.Oracle
Text Supplied Knowledge Base can be installed in the database using
Oracle Database 10g Companion CD.
```

```
If you are not planning to use this repository for installing OracleAS
Portal, you may continue further.
```

```
Do you want to continue?"
```

OracleAS Portal を使用しない場合は、「**Y**」と入力して続行します。それ以外の場合は、「**N**」と入力します。

ナレッジ・ベースがデータベースにインストールされているかどうかを自分で確認する場合は、次の問合せを実行します。

```
create or replace procedure Check_KB (l_return_value OUT varchar) is
ORA20000_TEXT_EXCEPTION exception;
pragma exception_init (ORA20000_TEXT_EXCEPTION, -20000);
l_test_table constant varchar2(30) := 'WWSRC_INSO_TEST';
l_test_table_index constant varchar2(30) := 'WWSRC_INSO_TEST_INDEX';

procedure drop_test_table ( p_test_table in varchar2 ) is
begin
  for c1 in ( select table_name from user_tables
              where table_name = p_test_table )
  loop
    execute immediate 'drop table '||c1.table_name;
  end loop;
end drop_test_table;

begin
  l_return_value := 'TRUE';
  drop_test_table(l_test_table);
  execute immediate 'create table '||l_test_table||'( id number, content blob,
    query_id number, theme varchar2(2000), weight number,
    CONSTRAINT wwsrc inso_test_pk PRIMARY KEY(id) )';
  execute immediate 'insert into '||l_test_table||'(id, content)
    values(1, empty_blob())';
begin
  execute immediate 'create index '||l_test_table_index||' on '||
    l_test_table||'(content) indextype is ctxsys.context
    PARAMETERS(''filter CTXSYS.INSO_FILTER'')';
  ctx_doc.themes( index_name => l_test_table_index, textkey => '1',
    restab => l_test_table );
  exception when ORA20000_TEXT_EXCEPTION then
  if (instr(sqlerrm,'DRG-11446') > 0) then
    l_return_value := 'FALSE';
  else
    l_return_value := 'FALSE';
```

```
        end if;
    end;

    drop_test_table(l_test_table);
    exception when others then
        drop_test_table(l_test_table);
        l_return_value := 'FALSE';
    end;
/
```

ナレッジ・ベースがインストールされていないと、Oracle Text の「テーマと要旨を使用可能にする」オプションを選択して OracleAS Portal で検索を実行した場合、次のエラーが表示されます。

```
Error: The Oracle Text Installation is not complete. Knowledge base file or files
are missing. (WWWS-32026)
```

データベースにナレッジ・ベースがインストールされていない場合は、Oracle Database 10g Companion CD-ROM から、ナレッジ・ベースをインストールできます。詳細は、Oracle Database Companion CD のインストール・ガイドを参照してください。

1.5.12 Oracle Ultra Search が必要（Oracle Database 10g リリース 2（10.2.x）のみ）

Oracle Database 10g リリース 2（10.2.x）に OracleAS Metadata Repository をインストールする場合は、同じデータベースに Oracle Ultra Search をインストールする必要があります。

OracleAS RepCA によって、データベースに WKSYS および WKPROXY のスキーマがインストールされているかどうか確認されます。インストールされていない場合は、OracleAS RepCA によって次の警告が表示されます。

「データベースに、Ultra Search スキーマ WKSYS または WKPROXY（あるいはその両方）が含まれていません。これらのスキーマをインストールして再試行してください。詳細は、『Oracle Database インストール・ガイド』および『Oracle Ultra Search ユーザーズ・ガイド』を参照してください。」

データベースに Oracle Ultra Search がインストールされていない場合は、Oracle Database 10g Companion CD-ROM から、Oracle Ultra Search をインストールできます。詳細は、Oracle Database Companion CD のインストール・ガイドを参照してください。

Oracle Ultra Search をインストールしたら、Database Configuration Assistant (DBCA) を使用して、これらのスキーマをデータベースにロードする必要があります。Oracle Ultra Search のスキーマのロードについては、Oracle MetaLink (<http://www.metalink.oracle.com>) の Note 337992.1 を参照してください。

1.5.13 パスワード・ファイル認証

データベースは、パスワード・ファイル認証を使用するように設定されている必要があります。パスワード・ファイル認証の詳細は、『Oracle Database 管理者ガイド』を参照してください。

パスワード・ファイル認証は、OracleAS RepCA を実行する場合にのみ必要です。Metadata Repository がインストールされている場合、パスワード・ファイル認証は必要ありません。

データベースがパスワード・ファイル認証を使用するように設定されているかどうかは、次の2つの方法のうちのいずれかで確認できます。

- SQL*Plus で次のコマンドを実行して、remote_login_passwordfile 初期化パラメータの値を検索します。

```
prompt> sqlplus "sys/password as sysdba"
SQL> show parameters remote_login_passwordfile
NAME                                TYPE                                VALUE
-----
remote_login_passwordfile           string                             EXCLUSIVE
```

remote_login_passwordfile 初期化パラメータの値は、EXCLUSIVE または SHARED のいずれかである必要があります。このパラメータが別の値である場合、または定義されていない場合、データベースはパスワード・ファイル認証を使用するように設定されていません。

- SQL*Net 接続によって sysdba としてデータベースへの接続を試みます。

```
prompt> sqlplus "sys/password@sqlnet_dbname as sysdba"
```

sqlnet_dbname は、tnsnames.ora ファイルでのデータベースのエントリを表します。データベースでパスワード認証が設定されていない場合、ユーザーは接続できません。

データベースにパスワード・ファイル認証を設定しているにもかかわらず、ORA-01017 エラー「ユーザー名 / パスワードが無効です。ログオンは拒否されました。」を受け取る場合、パスワード・ファイルの設定時に SYS パスワードを変更したことが原因である可能性があります (password パラメータで指定する値によって、SYS ユーザーのパスワードが設定されます)。その場合、元の SYS パスワードに戻します。

sysdba のオペレーティング・システム権限があれば、SYS としてログインできます。その場合、任意のパスワードを指定できます。sysdba のオペレーティング・システム権限によって、パスワードが変更されます。

```
prompt> sqlplus "sys/badPassword as sysdba"
SQL> alter user sys identified by newPassword;
SQL> exit
```

これで、"sys/newPassword@sqlnet_dbname as sysdba" によってデータベースに接続できます。

パスワード・ファイル認証を使用するようにデータベースを設定する手順は、次のとおりです。

1. orapwd コマンド (すべて1行) を使用して、パスワード・ファイルを作成します。

```
prompt> $ORACLE_HOME/bin/orapwd file=fullpath_to_pwfile password=password
entries=maxUsers
```

指定する必要がある値:

fullpath_to_pwfile: パスワード情報が記述されるファイルのフルパスを指定します。ファイル名は orapwsid です。通常、パスワード・ファイルは ORACLE_HOME/dbs ディレクトリに格納されます。

password: SYS ユーザーのパスワードを設定します。

注意： `password` パラメータに指定する値は、SYS ユーザーのパスワードを設定します。現在の SYS パスワードと異なる値を指定すると、SYS パスワードは変更されます。

`maxUsers`: ファイルに含まれるユーザーの最大数を指定します。

次の例は、"mydb" という名前のデータベースにパスワード・ファイルを設定しています。

```
prompt> $ORACLE_HOME/bin/orapwd
        file=/opt/oracle/db92/OraHome1/dbs/orapwmydb
        password=topsecret entries=9
```

2. `remote_login_passwordfile` 初期化パラメータを EXCLUSIVE に設定します。同じパスワード・ファイルを複数のデータベースで使用する場合、SHARED に設定します。Real Application Clusters データベースの場合、このパラメータは EXCLUSIVE に設定する必要があります。
3. データベースを再起動します。

1.5.14 スキーマおよび表領域

OracleAS RepCA は、表 1-9 に示すスキーマおよび表領域を既存のデータベースにインストールします。同じ名前のスキーマおよび表領域がデータベースに含まれていないことを確認してください。

1.5.14.1 スキーマおよび表領域のリスト

表 1-9 に、OracleAS RepCA によってデータベースに作成される、OracleAS Metadata Repository のスキーマおよび表領域を示します。

表 1-9 スキーマおよび表領域

コンポーネント	スキーマ	表領域	デフォルト・データベース・ファイル
OracleAS Portal	PORTAL	PORTAL	portal.dbf
OracleAS Portal	PORTAL	PORTAL_DOC	ptldoc.dbf
OracleAS Portal	PORTAL	PORTAL_IDX	ptlidx.dbf
OracleAS Portal	PORTAL	PORTAL_LOG	ptllog.dbf
OracleAS Portal	PORTAL_APP	PORTAL	portal.dbf
OracleAS Portal	PORTAL_DEMO	PORTAL	portal.dbf
OracleAS Portal	PORTAL_PUBLIC	PORTAL	portal.dbf
OracleAS Single Sign-On	ORASSO	IAS_META	ias_meta01.dbf
OracleAS Single Sign-On	ORASSO_PA	IAS_META	ias_meta01.dbf
OracleAS Single Sign-On	ORASSO_DS	IAS_META	ias_meta01.dbf
OracleAS Single Sign-On	ORASSO_PS	IAS_META	ias_meta01.dbf
OracleAS Single Sign-On	ORASSO_PUBLIC	IAS_META	ias_meta01.dbf
OracleAS Wireless	WIRELESS	IAS_META	ias_meta01.dbf
Oracle Workflow	OWF_MGR	IAS_META	ias_meta01.dbf
OracleBI Discoverer	DISCOVERER5	DISCO_PTM5_META	discopltml1.dbf
OracleBI Discoverer	DISCOVERER5	DISCO_PTM5_CACHE	discoplctc1.dbf

表 1-9 スキーマおよび表領域（続き）

コンポーネント	スキーマ	表領域	デフォルト・データベース・ファイル
OracleAS Distributed Configuration Management (DCM)	DCM	DCM	dcm.dbf
Oracle Enterprise Manager 10g	OEM_REPOSITORY	SYS_AUX	sysaux01.dbf
Oracle Application Server Web Clipping	WCRSYS	WCRSYS_TS	wcrsys01.dbf
OracleAS Integration B2B	IP ¹	該当なし	該当なし
OracleAS Integration B2B	B2B	B2B_RT	b2b_rt.dbf
OracleAS Integration B2B	B2B	B2B_DT	b2b_dt.dbf
OracleAS Integration B2B	B2B	B2B_IDX	b2b_idx.dbf
OracleAS Integration B2B	B2B	B2B_LOB	b2b_lob.dbf
Oracle BPEL Process Analytics	BAM	BAM	bam.dbf
Oracle BPEL Process Manager	ORABPEL	ORABPEL	orabpel.dbf
OCA	OCA	OCATS	oca.dbf
OCA	ORAOCA_PUBLIC	OCATS	oca.dbf
OracleAS UDDI	UDDISYS	UDDISYS_TS	uddisys01.dbf
Oracle Internet Directory	ODS	OLTS_ATTRSTORE	attrs1_oid.dbf
Oracle Internet Directory	ODS	OLTS_BATTRSTORE	battrs1_oid.dbf
Oracle Internet Directory	ODS	OLTS_CT_STORE	gcats1_oid.dbf
Oracle Internet Directory	ODS	OLTS_DEFAULT	gdefault1_oid.dbf
Oracle Internet Directory	ODSSM	OLTS_SVRMGSTORE	svrmg1_oid.dbf
Oracle Ultra Search	WK_TEST	SYS_AUX	sysaux01.dbf
該当なし	DSGATEWAY ²	DSGATEWAY_TAB	oss_sys01.dbf
Metadata Repository Version	INTERNET_APPSERVER_REGISTRY	IAS_META	ias_meta01.dbf

¹ Oracle Application Server 10g (10.1.4.0.1) では、IP スキーマにはデータが含まれません。これは B2B スキーマに置き換えられ、下位互換性のために提供されています。

² Oracle Application Server 10g (10.1.4.0.1) では、DSGATEWAY スキーマは使用されなくなりました。これは、下位互換性のためにのみ提供されています。

1.5.14.2 すでに使用されているスキーマ名

OracleAS RepCA は、既存のデータベースで同じ名前のスキーマを 1 つでも検出すると、削除する前にユーザーに確認を求め、新しいデータでスキーマを再作成します。

そのスキーマのデータを保存するときは、続行しないでください。保存するデータをバックアップし、別のスキーマでリストアして OracleAS RepCA を再実行します。その後、スキーマを削除して再作成します。

データベースの既存のスキーマ名をリスト表示するには、次のように ALL_USERS ビューを問い合わせます。

```
prompt> sqlplus "sys/password as sysdba"
SQL> select username from all_users;
```

password は、SYS ユーザーのパスワードを指定します。

OracleAS RepCA を実行して、OracleAS Metadata Repository で使用したスキーマおよび表領域を削除するには、[第 4 章「OracleAS Metadata Repository の登録解除および削除」](#)を参照してください。

1.5.14.3 すでに使用されている表領域名

OracleAS RepCA によって既存のデータベースで同じ名前の表領域が 1 つでも検出されると、続行できません。エラー・ダイアログが表示されます。その場合、次の手順に従います。

1. エラー・ダイアログを閉じ、OracleAS RepCA を終了します。
2. 必要に応じて表領域のデータをバックアップします。
3. 表領域を削除します。
4. OracleAS RepCA を再実行します。

データベースの既存の表領域名をリスト表示するには、次のように V\$TABLESPACE ビューを問い合わせます。

```
prompt> sqlplus "sys/password as sysdba"
SQL> select name from v$tablespace;
```

password は、SYS ユーザーのパスワードを指定します。

注意： OracleAS RepCA を実行して完了する前に取り消すと、[表 1-9](#) に示すいくつかの表領域がデータベースに作成されることがあります。その表領域は、OracleAS RepCA を再実行する前に削除してください。

OracleAS RepCA を実行して、OracleAS Metadata Repository で使用したスキーマおよび表領域を削除するには、[第 4 章「OracleAS Metadata Repository の登録解除および削除」](#)を参照してください。

表領域を削除するには、手動で SQL 文を実行します。また、OracleAS RepCA を実行して、OracleAS Metadata Repository の表領域およびスキーマを削除することもできます。[第 4 章「OracleAS Metadata Repository の登録解除および削除」](#)を参照してください。

手動で SQL 文を実行するには、次の手順に従います。タスクの順序は重要です。最初にデータ・ファイルを削除すると、表領域を削除できなくなります。表領域が存在する場合、OracleAS RepCA を再実行できません。

1. SQL*Plus を使用して、SYS ユーザーとしてデータベースにログインします。

```
prompt> sqlplus "sys/password as sysdba"
```

2. 表領域のスキーマを削除します。

```
SQL> drop user schema_name cascade;
```

3. 表領域を削除します。

```
SQL> drop tablespace tablespace_name including contents cascade constraints;
SQL> exit;
```

4. 表領域に関連付けられていたデータ・ファイル（.dbf ファイル）を削除します。

1.5.14.4 表領域のサイズ

表領域に RAW デバイスではなくファイルを使用する場合、OracleAS RepCA が作成する各表領域に対してサイズを選択します。

OracleAS RepCA で各表領域に対して選択できるサイズは 3 種類あります (表 1-10 を参照)。これらのサイズは、コンポーネントの使用レベルの軽度、中度、重度に対応します。コンポーネントを大量に使用するアプリケーションがある場合、そのコンポーネントの表領域には最大サイズを選択します。リポジトリとともにコンポーネントを使用しない場合には、最小サイズを選択します。

表領域のサイズは初期サイズです。表領域は AUTOEXTEND にプリファレンスされているので、コンポーネントが大量に使用されると表領域のサイズが増加します。

表 1-10 表領域の初期サイズ

コンポーネント	表領域	初期サイズ (MB)		
		小	中	大
OracleAS Portal	PORTAL	75	100	150
OracleAS Portal	PORTAL_DOC	25	40	50
OracleAS Portal	PORTAL_IDX	30	50	60
OracleAS Portal	PORTAL_LOG	30	50	60
OracleAS Single Sign-On	IAS_META	200	300	500
OracleAS Wireless				
Oracle Workflow				
INTERNET_APPSERVER_REGISTRY (OracleAS Metadata Repository のバージョンに関する情報を格納するスキーマ)				
Oracle Ultra Search	SYS_AUX	200	300	500
OracleBI Discoverer	DISCO_PTM5_META	5	10	15
OracleBI Discoverer	DISCO_PTM5_CACHE	5	10	15
OracleAS Distributed Configuration Management (DCM)	DCM	50	100	200
OracleAS Web Clipping Support	WCRSYS_TS	35	45	55
OracleAS Integration B2B	B2B_RT	50	75	90
OracleAS Integration B2B	B2B_DT	60	75	90
OracleAS Integration B2B	B2B_IDX	20	40	60
OracleAS Integration B2B	B2B_LOB	20	40	60
Oracle BPEL Process Analytics	BAM	175	200	250
Oracle BPEL Process Manager	ORABPEL	80	100	120
OracleAS Certificate Authority	OCATS	15	35	55
OracleAS UDDI	UDDISYS_TS	35	50	65
Oracle Internet Directory	OLTS_ATTRSTORE	10	15	20
Oracle Internet Directory	OLTS_BATTRSTORE	10	15	20

表 1-10 表領域の初期サイズ（続き）

コンポーネント	表領域	初期サイズ（MB）		
		小	中	大
Oracle Internet Directory	OLTS_CT_STORE	10	15	20
Oracle Internet Directory	OLTS_DEFAULT	10	15	20
Oracle Internet Directory	OLTS_SVRMGSTORE	10	15	20
該当なし	DSGATEWAY_TAB	25	35	45

既存データベースが ASM、Oracle Managed Files または RAW デバイスを使用する場合、表領域のサイズを選択する必要はありません。ただし、記憶域のデバイスのサイズがコンポーネントに対して十分であることを確認してください（表 1-11 および表 1-12 を参照）。コンポーネントを大量に使用する予定がある場合は、表領域用の記憶域デバイスで、十分な領域が使用できることを確認します。

表 1-11 システムの表領域の最小サイズ

表領域	最小サイズ
SYSTEM 表領域	1024MB
TEMP 表領域	128MB
UNDOTBS1 表領域	256MB
UNDOTBS2 表領域	256MB
ORSYS 表領域	64MB

表 1-12 OracleAS Metadata Repository 用の RAW デバイス

RAW デバイスの対象	最小サイズ	推奨される名前
PORTAL 表領域	128MB	dbname_raw_portal_128m
PORTAL_DOC 表領域	64MB	dbname_raw_portal_128m
PORTAL_IDX 表領域	64MB	dbname_raw_portal_128m
PORTAL_LOG 表領域	64MB	dbname_raw_portal_128m
DCM 表領域	256MB	dbname_raw_dcm_256m
OCATS 表領域	64MB	dbname_raw_ocats_64m
DISCO_PTM5_CACHE 表領域	64MB	dbname_raw_discoptm5cache_64m
DISCO_PTM5_META 表領域	64MB	dbname_raw_discoptm5meta_64m
WCRSYS_TS 表領域	64MB	dbname_raw_wcrsys_64m
UDDISYS_TS 表領域	64MB	dbname_raw_uddisys_64m
OLTS_ATTRSTORE 表領域	128MB	dbname_raw_oltsattrstore_128m
OLTS_BTTRSTORE 表領域	64MB	dbname_raw_oltsbttrstore_64m
OLTS_CT_STORE 表領域	256MB	dbname_raw_oltsctstore_256m
OLTS_DEFAULT 表領域	128MB	dbname_raw_oltsdefault_128m
OLTS_SVRMGSTORE 表領域	64MB	dbname_raw_oltssvrmgstore_64m
SYS_AUX 表領域	500MB	dbname_raw_sysaux_500m
B2B_RT 表領域	256MB	dbname_raw_b2brt_256m

表 1-12 OracleAS Metadata Repository 用の RAW デバイス (続き)

RAW デバイスの対象	最小サイズ	推奨される名前
B2B_DT 表領域	256MB	<i>dbname_raw_b2bdt_256m</i>
B2B_IDX 表領域	256MB	<i>dbname_raw_b2bidx_256m</i>
B2B_LOB 表領域	256MB	<i>dbname_raw_b2blob_256m</i>
BAM 表領域	175MB	<i>dbname_raw_bam_175m</i>
ORABPEL 表領域	80MB	<i>dbname_raw_orabpel_80m</i>
IAS_META 表領域	256MB	<i>dbname_raw_iasmeta1_256m</i>
DSGATEWAY_TAB 表領域	64MB	<i>dbname_raw_dsgatewaytab_64m</i>

RAW デバイスの使用方法については、データベースのマニュアルを参照してください。

1.5.15 Oracle Internet Directory への登録

正常に登録するには、次の点を確認します。

- 既存のデータベースが Oracle Internet Directory にまだ登録されていないことを確認します。Oracle Internet Directory に登録済のデータベースは、登録できません。
- Oracle Internet Directory に、同じ SID を持つ別のデータベースが登録されていないことを確認します。

データベースが Oracle Internet Directory に登録済かどうかを確認するには、Oracle Internet Directory で次のように確認します。

1. Oracle Directory Manager を使用して、Oracle Internet Directory に接続します。

- a. Oracle Directory Manager を起動します。

```
prompt> $ORACLE_HOME/bin/oidadmin
```

- b. 「接続」画面で、接続情報を入力します。Oracle Internet Directory スーパーユーザー (cn=orcladmin) としてログインします。

2. データベースが Oracle Internet Directory に登録済かどうかを確認します。「エントリ管理」→「cn=OracleContext」の順にエントリを開きます。

データベースが Oracle Internet Directory に登録済の場合は、「cn=*your_database_name*」というエントリが表示されます。

登録を削除する方法は、[第 C.5 項「手動の手順: 失敗した登録のクリーンアップまたは OracleAS Metadata Repository の登録解除」](#)の手順 2 を参照してください。

3. Oracle Internet Directory に登録済の Metadata Repository がデータベースにあるかどうかを確認します。次のようにエントリを開きます。

「エントリ管理」→「cn=OracleContext」→「cn=Products」→「cn=IAS」→「cn=IAS Infrastructure Databases」

Oracle Internet Directory に登録済の Metadata Repository がデータベースにある場合は、「orclReferenceName=*your_database_name*」というエントリが表示されます。

登録を削除する方法は、[第 C.5 項「手動の手順: 失敗した登録のクリーンアップまたは OracleAS Metadata Repository の登録解除」](#)の手順 3 を参照してください。

1.6 Oracle Internet Directory の要件

OracleAS Metadata Repository を Oracle Internet Directory に登録するには、Oracle Internet Directory のリリースが 9.0.4 以上である必要があります。リリース 9.2.x の Oracle Internet Directory はサポートされていないことに注意してください。

Oracle Internet Directory のリリースを確認するには、次のコマンドを実行します。

```
prompt> oidldapd -version
```

oidldapd コマンドは `ORACLE_HOME/bin` ディレクトリにあります。`ORACLE_HOME` は、Oracle Internet Directory のインストール先ディレクトリです。

1.7 OracleAS RepCA の起動

OracleAS RepCA を起動するには、次の手順を実行します。

1. OracleAS RepCA がインストール済であることを確認します。詳細は、[第 1.4 項「OracleAS RepCA のインストール」](#) を参照してください。
2. 既存データベースのリスナーおよびデータベース自体が起動され、実行中であることを確認します。
3. 環境変数 `NLS_LANG` に英語以外のロケールが設定されている場合は、設定を解除するか、または `american_america.us7ascii` を設定します。

```
prompt> unsetenv NLS_LANG
- or -
prompt> setenv NLS_LANG american_america.us7ascii
```

`NLS_LANG` に英語以外のロケールが設定されていると、OracleAS RepCA で、Workflow スキーマのロードが失敗します。

`NLS_LANG` の設定は、OracleAS RepCA を実行した後で元の値に戻すことができます。

4. OracleAS RepCA の Oracle ホーム（OracleAS RepCA のインストール先ディレクトリ）から OracleAS RepCA を起動します。

```
prompt> cd ORACLE_HOME_RepCA
prompt> runRepca
```

注意： `runRepca` スクリプトを実行する前に、`REPCA_HOME/JRE` が既存の JRE の場所を指していることを確認します。

1.8 次に読むべき項

以降の項では、OracleAS RepCA を使用する手順について説明しています。

ロード操作

ロード操作では、Oracle Internet Directory に登録されているかどうかに関係なく、データベース・タイプと格納タイプに応じて読むべき項を選択します。

表 1-13 次に読むべき項

データベース・タイプ	格納タイプ	読むべき項
Real Application Clusters 以外	ファイル・システム	第 2.1 項「ファイル・システムを使用するデータベースへのインストール」
Real Application Clusters 以外	RAW デバイス	第 2.2 項「RAW デバイスを使用するデータベースへのインストール」
Real Application Clusters	クラスタ・ファイル・システムまたはボリューム・マネージャ	第 2.3 項「Real Application Clusters データベースへのインストール」
Real Application Clusters	RAW デバイス	第 2.3 項「Real Application Clusters データベースへのインストール」
自動ストレージ管理 (ASM)	ディスク・グループ	第 2.4 項「自動ストレージ管理を使用するデータベースへのインストール」
自動ストレージ管理 (ASM)	ファイル・システム	第 2.4 項「自動ストレージ管理を使用するデータベースへのインストール」
Oracle Managed Files	ファイル・システム	第 2.5 項「Oracle Managed Files を使用するデータベースへのインストール」

登録操作のみ

OracleAS Metadata Repository を Oracle Internet Directory に登録するのみの場合は、[第 3 章「Oracle Internet Directory への OracleAS Metadata Repository の登録」](#)を参照してください。

削除または登録解除の操作

[第 4 章「OracleAS Metadata Repository の登録解除および削除」](#)を参照してください。

既存のデータベースへの OracleAS Metadata Repository のロード

この章では、既存のデータベースに OracleAS Metadata Repository をインストールまたはロードする方法について説明します。インストールする際、OracleAS Metadata Repository のロードのみを行うか、OracleAS Metadata Repository をロードして Oracle Internet Directory に登録するかを選択します。

この章の構成：

- 第 2.1 項「ファイル・システムを使用するデータベースへのインストール」
- 第 2.2 項「RAW デバイスを使用するデータベースへのインストール」
- 第 2.3 項「Real Application Clusters データベースへのインストール」
- 第 2.4 項「自動ストレージ管理を使用するデータベースへのインストール」
- 第 2.5 項「Oracle Managed Files を使用するデータベースへのインストール」
- 第 2.6 項「ログ・ファイル内の問題のないエラー」
- 第 2.7 項「インストール後の手順」
- 第 2.8 項「ロードに失敗した場合」
- 第 2.9 項「登録に失敗した場合」
- 第 2.10 項「同じデータベースへの OracleAS Metadata Repository の再インストール」

2.1 ファイル・システムを使用するデータベースへのインストール

データ・ファイルにファイル・システムを使用する既存のデータベースに OracleAS Metadata Repository をインストールするには、次の手順を実行します。

1. データベースが第 1.5 項「データベースの要件」に示す要件を満たしていることを確認します。
2. OracleAS RepCA を起動します。詳細は、第 1.7 項「OracleAS RepCA の起動」を参照してください。
3. 次の各画面で指示に従います。

表 2-1 標準のファイル・システムを使用するデータベースへの OracleAS Metadata Repository のインストール

画面	アクション
1. ようこそ	「次へ」をクリックします。
2. Oracle ホームのパスを指定	Oracle ホーム: データベースの Oracle ホーム・ディレクトリへのフルパスを指定します。データベースを実行しているコンピュータの規則（適切なスラッシュなど）を使用してください。 ログ・ファイル・ディレクトリ: OracleAS RepCA のログ・ファイルの書き込み先ディレクトリをフルパスで指定します。このパスは、OracleAS RepCA を実行しているコンピュータ上のパスです。 いったん「次へ」をクリックして次の画面に移動すると、ログ・ファイル・ディレクトリを変更することはできません。「戻る」をクリックしてこの画面に戻っても、「ログ・ファイル・ディレクトリ」フィールドは読取り専用になります。これは、OracleAS RepCA によって異なるディレクトリのログ・ファイルに書き込みが行われないようにするためです。 「次へ」をクリックします。
3. 操作を選択	OracleAS Metadata Repository をデータベースにロードして Oracle Internet Directory には登録しない場合は、「ロード」を選択します。このオプションは、Oracle Internet Directory をインストールしていない場合に選択します。 OracleAS Metadata Repository をデータベースにロードして Oracle Internet Directory に登録する場合は、「ロードして登録」を選択します。 「次へ」をクリックします。
4. データベース接続情報を指定	既存データベースの接続情報を入力します。 SYS パスワード: SYS ユーザーのパスワードを指定します。 シングル・ノード・インスタンス: このオプションを選択し、その下に表示されるフィールドを指定します。 ■ ホスト名: データベースを実行しているコンピュータの名前を指定します。中間層インスタンスが別のドメインにある場合は、ホスト名の後ろにそのドメイン名を追加する必要があります。 ■ ポート: データベースのポート番号を指定します。 ■ サービス名: データベースのサービス名を指定します。サービス名には、データベース・ドメイン名を含める必要があります。 例: orcl.mydomain.com 「次へ」をクリックします。
5. 記憶域オプションを指定	「標準のファイルシステムまたは Cluster File System」を選択します。

表 2-1 標準のファイル・システムを使用するデータベースへの OracleAS Metadata Repository のインストール (続き)

画面	アクション
6. 表領域情報の指定	OracleAS RepCA による表領域用ファイルの作成先および表領域のサイズを指定します。指定するディレクトリは、次の基準を満たしている必要があります。 ■ ディレクトリは、データベースを実行しているコンピュータ (OracleAS RepCA を実行しているコンピュータである必要はない) にすでに存在している。 ■ ディレクトリは書き込み可能である。 ■ ディレクトリに十分な空き領域がある。 ■ ディレクトリへのパスが正しく指定され、データベースを実行しているオペレーティング・システムで一貫性がある。 すべての表領域に同じディレクトリを使用: すべての表領域のすべてのファイルを同じディレクトリに配置する場合に、このオプションを選択します。このオプションの下フィールドでディレクトリを指定します。 表領域ごとに別個のディレクトリを使用: 表領域のファイルを別々のディレクトリに配置する場合に、このオプションを選択します。 表領域: ツリーを開いて各コンポーネントの表領域を表示します。関連するデータ・ファイルまたはサイズを表示 / 編集するには、表領域を選択します。 サイズ: コンポーネントを大量に使用するアプリケーションがある場合、表領域に最大サイズを選択します。そうでない場合、最小サイズを選択します。 ファイル名: データベース・ファイルのファイル名を指定します。例: portal.dbf ディレクトリ: 表領域のデータベース・ファイルを配置するディレクトリを入力します。ディレクトリへのパスが正しく指定され、データベースを実行しているオペレーティング・システムで一貫性があることを確認します。 例 (UNIX) : /opt/oracle/dbfiles/ 例 (Windows) : C:\oracle\%dbfiles% 「次へ」をクリックします。
7. 警告: ディスク領域を確認してください	この警告ダイアログ・ボックスは、SYSTEM 表領域および UNDO 表領域に AUTOEXTEND が設定されている場合に表示されます。警告ダイアログ・ボックスに示されるとおり、SYSTEM 表領域および UNDO 表領域が含まれているファイル・システムに十分なディスク領域があることを確認してください。
8. Oracle Internet Directory 接続の指定	この画面と次の 2 つの画面は、前述の手順で「ロードして登録」を選択した場合のみ表示されます。 Internet Directory ホスト名: Oracle Internet Directory を実行しているコンピュータの名前を指定します。中間層インスタンスが別のドメインにある場合は、ホスト名の後ろにそのドメイン名を追加する必要があります。 Internet Directory ポート: Oracle Internet Directory のポート番号を指定します。 登録 (または登録解除) を目的として Oracle Internet Directory に接続するために SSL を使用: 登録の際に、SSL を使用して OracleAS RepCA を Oracle Internet Directory に接続する場合に、このオプションを選択します。 「次へ」をクリックします。
9. Oracle Internet Directory へのログインの指定	Oracle Internet Directory にログインするためのユーザー名およびパスワードを入力します。ユーザーは iAS Admins グループに属している必要があります。ユーザーの単純な名前 (jdoe など) またはユーザーの DN (cn=orcladmin など) を使用できます。 Oracle Internet Directory に複数のレルムが含まれる場合、指定したユーザーが含まれるレルムを入力する必要があります。 注意: Oracle Internet Directory のスーパーユーザー (cn=orcladmin) としてログインする場合、スーパーユーザーはいずれのレルムにも属していないため、レルム値は使用されません。レルム値は、単純な名前を使用してログインする場合のみ使用されます。 「次へ」をクリックします。

表 2-1 標準のファイル・システムを使用するデータベースへの OracleAS Metadata Repository のインストール (続き)

画面	アクション
10. Oracle コンテキストを指定	OracleAS Metadata Repository を登録する Oracle Internet Directory 内の場所を指定します。 ルート Oracle コンテキスト (cn=OracleContext): ルート Oracle コンテキストに OracleAS Metadata Repository を登録する場合に選択します。 カスタム Oracle コンテキスト: Oracle Internet Directory 内の特定のレルムに OracleAS Metadata Repository を登録する場合に選択します。表示されるフィールドに、レルムの DN を指定します。 「次へ」をクリックします。
11. リポジトリをロードします	OracleAS RepCA が表領域およびスキーマを作成および移入します。
12. 成功しました	「OK」をクリックして OracleAS RepCA を終了します。

4. インストール後の手順を実行します。第 2.7 項「インストール後の手順」を参照してください。

2.2 RAW デバイスを使用するデータベースへのインストール

この項では、Real Application Clusters 以外で RAW デバイスを使用するデータベースに OracleAS Metadata Repository をインストールする方法について説明します。RAW デバイスを使用する Real Application Clusters データベースがある場合は、第 2.3 項「Real Application Clusters データベースへのインストール」を参照してください。

RAW デバイスを使用する、Real Application Clusters 以外のデータベースに OracleAS Metadata Repository をインストールするには、次の手順を実行します。

1. データベースが第 1.5 項「データベースの要件」に示す要件を満たしていることを確認します。
2. OracleAS Metadata Repository 用の RAW デバイスを作成します。

RAW デバイスを作成する必要がある表領域とその最小サイズについては、表 1-12 を参照してください。

RAW デバイスを作成するコマンドは、使用するボリューム・マネージャ固有のコマンドです。たとえば、VERITAS Volume Manager を使用する場合は vxassist です。

3. 表領域を RAW デバイスにマップするためのファイルを作成し、このファイルを指すように環境変数 DBCA_RAW_CONFIG を設定します (オプション)。

OracleAS RepCA によってこのファイルが読み込まれ、そのデータが「表領域情報の指定」画面に反映されます。この画面でデータを確認します。

このファイルを作成しなくても、OracleAS RepCA を実行して、RAW デバイスを使用するデータベースに OracleAS Metadata Repository をインストールできます。この場合、「表領域情報の指定」画面のフィールドが空白のままになるため、データを手動で入力する必要があります。

次の手順を実行します。

- a. 表領域を RAW デバイスにマッピングするためのファイルを作成します。

ファイルの各行の形式は、次のとおりです。

```
tablespace_name=raw_device_file_path
```

次のサンプル・ファイルの RAW デバイスのファイル・パスを実際の値に置き換えると、そのまま使用できます。サンプル・ファイルに示すように、表領域名の後ろに "1" を追加します。


```

PORTAL1=/dev/vx/rdisk/oracle/mydb_raw_portal_128m
PORTAL_DOC1=/dev/vx/rdisk/oracle/mydb_raw_portal_doc_64m
PORTAL_IDX1=/dev/vx/rdisk/oracle/mydb_raw_portal_idx_64m
PORTAL_LOG1=/dev/vx/rdisk/oracle/mydb_raw_portal_log_64m
IAS_META1=/dev/vx/rdisk/oracle/mydb_raw_ias_meta_256m
DISCO_PIM5_META1=/dev/vx/rdisk/oracle/mydb_raw_disco_meta_64m
DISCO_PIM5_CACHE1=/dev/vx/rdisk/oracle/mydb_raw_disco_cache_64m
DCM1=/dev/vx/rdisk/oracle/mydb_raw_dcm_256m
DSGATEWAY_TAB1=/dev/vx/rdisk/oracle/mydb_raw_synd_64m
WCRSYS_TS1=/dev/vx/rdisk/oracle/mydb_raw_clip_64m
B2B_DT1=/dev/vx/rdisk/oracle/mydb_raw_b2b_dt_256m
B2B_RT1=/dev/vx/rdisk/oracle/mydb_raw_b2b_rt_256m
B2B_LOB1=/dev/vx/rdisk/oracle/mydb_raw_b2b_lob_256m
B2B_IDX1=/dev/vx/rdisk/oracle/mydb_raw_b2b_idx_256m
BAM1=/dev/vx/rdisk/oracle/mydb_raw_bam_175m
ORABPEL1=/dev/vx/rdisk/oracle/mydb_raw_orapbel_80m
OCATS1=/dev/vx/rdisk/oracle/mydb_raw_oca_64m
UDDISYS_TS1=/dev/vx/rdisk/oracle/mydb_raw_uddi_64m
OLTS_ATTRSTORE1=/dev/vx/rdisk/oracle/mydb_raw_olts_attr_128m
OLTS_BATTRSTORE1=/dev/vx/rdisk/oracle/mydb_raw_olts_battr_64m
OLTS_CT_STORE1=/dev/vx/rdisk/oracle/mydb_raw_olts_ct_store_256m
OLTS_DEFAULT1=/dev/vx/rdisk/oracle/mydb_raw_olts_default_128m
OLTS_SVRMGSTORE1=/dev/vx/rdisk/oracle/mydb_raw_olts_svrmgstore_64m

```

OracleAS Metadata Repository の表領域およびスキーマのリストについては、[第 1.5.14 項「スキーマおよび表領域」](#)を参照してください。

- b. 環境変数 DBCA_RAW_CONFIG に、ファイルのフルパスを設定します。

たとえば、このファイルを /opt/oracle/repca/tablespace_map.txt として保存した場合、次のように環境変数を設定します。

```
setenv DBCA_RAW_CONFIG /opt/oracle/repca/tablespace_map.txt
```

4. OracleAS RepCA を起動します。詳細は、[第 1.7 項「OracleAS RepCA の起動」](#)を参照してください。
5. 次の各画面で指示に従います。

表 2-2 RAW デバイスを使用するデータベースへの OracleAS Metadata Repository のインストール

画面	アクション
1. ようこそ	「次へ」をクリックします。
2. Oracle ホームのパスを指定	Oracle ホーム : データベースの Oracle ホーム・ディレクトリへのフルパスを指定します。データベースを実行しているコンピュータの規則（適切なスラッシュなど）を使用してください。 ログ・ファイル・ディレクトリ : OracleAS RepCA のログ・ファイルの書き込み先ディレクトリをフルパスで指定します。このパスは、OracleAS RepCA を実行しているコンピュータ上のパスです。 いったん「次へ」をクリックして次の画面に移動すると、ログ・ファイル・ディレクトリを変更することはできません。「戻る」をクリックしてこの画面に戻っても、「ログ・ファイル・ディレクトリ」フィールドは読取り専用になります。これは、OracleAS RepCA によって異なるディレクトリのログ・ファイルに書き込みが行われないようにするためです。 「次へ」をクリックします。
3. 操作を選択	OracleAS Metadata Repository をデータベースにロードして Oracle Internet Directory には登録しない場合は、「ロード」を選択します。このオプションは、Oracle Internet Directory をインストールしていない場合に選択します。 OracleAS Metadata Repository をデータベースにロードして Oracle Internet Directory に登録する場合は、「ロードして登録」を選択します。 「次へ」をクリックします。

表 2-2 RAW デバイスを使用するデータベースへの OracleAS Metadata Repository のインストール（続き）

画面	アクション
4. データベース接続情報を指定	既存データベースの接続情報を入力します。 SYS パスワード: SYS ユーザーのパスワードを指定します。 シングル・ノード・インスタンス: このオプションを選択し、その下に表示されるフィールドを指定します。 ■ ホスト名: データベースを実行しているコンピュータの名前を指定します。中間層インスタンスが別のドメインにある場合は、ホスト名の後ろにそのドメイン名を追加する必要があります。 ■ ポート: データベースのポート番号を指定します。 ■ サービス名: データベースのサービス名を指定します。サービス名には、データベース・ドメイン名を含める必要があります。 例: orcl.mydomain.com 「次へ」をクリックします。
5. 記憶域オプションを指定	「RAW ファイルシステム」を選択します。
6. 表領域情報の指定	マッピング・ファイルを作成し、このファイルを指すように環境変数 DBCA_RAW_CONFIG を設定すると、ファイルから読み取られた値がこの画面に表示されます。詳細は、2-4 ページの手順 3 を参照してください。必要に応じて値を修正し、「次へ」をクリックします。 マッピング・ファイルを作成していない場合、または環境変数 DBCA_RAW_CONFIG を設定していない場合は、この画面に手動で情報を入力する必要があります。「次へ」をクリックします。
7. 警告: ディスク領域を確認してください	この警告ダイアログ・ボックスは、SYSTEM 表領域および UNDO 表領域に AUTOEXTEND が設定されている場合に表示されます。警告ダイアログ・ボックスに示されるとおり、SYSTEM 表領域および UNDO 表領域が含まれているファイル・システムに十分なディスク領域があることを確認してください。
8. Oracle Internet Directory 接続の指定	この画面と次の 2 つの画面は、前述の手順で「ロードして登録」を選択した場合のみ表示されます。 Internet Directory ホスト名: Oracle Internet Directory を実行しているコンピュータの名前を指定します。中間層インスタンスが別のドメインにある場合は、ホスト名の後ろにそのドメイン名を追加する必要があります。 Internet Directory ポート: Oracle Internet Directory のポート番号を指定します。 登録 (または登録解除) を目的として Oracle Internet Directory に接続するために SSL を使用: 登録の際に、SSL を使用して OracleAS RepCA を Oracle Internet Directory に接続する場合に、このオプションを選択します。 「次へ」をクリックします。
9. Oracle Internet Directory へのログインの指定	Oracle Internet Directory にログインするためのユーザー名およびパスワードを入力します。ユーザーは iAS Admins グループに属している必要があります。ユーザーの単純な名前 (jdoe など) またはユーザーの DN (cn=orcladmin など) を使用できます。 Oracle Internet Directory に複数のレルムが含まれる場合、指定したユーザーが含まれるレルムを入力する必要があります。 注意: Oracle Internet Directory のスーパーユーザー (cn=orcladmin) としてログインする場合、スーパーユーザーはいずれのレルムにも属していないため、レルム値は使用されません。レルム値は、単純な名前を使用してログインする場合のみ使用されます。 「次へ」をクリックします。

表 2-2 RAW デバイスを使用するデータベースへの OracleAS Metadata Repository のインストール (続き)

画面	アクション
10. Oracle コンテキストを指定	OracleAS Metadata Repository を登録する Oracle Internet Directory 内の場所を指定します。 ルート Oracle コンテキスト (cn=OracleContext): ルート Oracle コンテキストに OracleAS Metadata Repository を登録する場合に選択します。 カスタム Oracle コンテキスト: Oracle Internet Directory 内の特定のレルムに OracleAS Metadata Repository を登録する場合に選択します。表示されるフィールドに、レルムの DN を指定します。 「次へ」をクリックします。
11. リポジトリをロードします	OracleAS RepCA が表領域およびスキーマを作成および移入します。
12. 成功しました	「OK」をクリックして OracleAS RepCA を終了します。

6. インストール後の手順を実行します。第 2.7 項「インストール後の手順」を参照してください。

2.3 Real Application Clusters データベースへのインストール

OracleAS RepCA を使用して、既存の Real Application Clusters データベースに OracleAS Metadata Repository をロードできます。図 2-1 に、Oracle Application Server でのこのデータベースの使用方法を示します。表 2-3 に示すとおり、この環境では、OracleAS Metadata Repository および Oracle Identity Management のコンポーネントを別々にインストールします。

図 2-1 Real Application Clusters データベースの OracleAS Infrastructure と OracleAS Metadata Repository

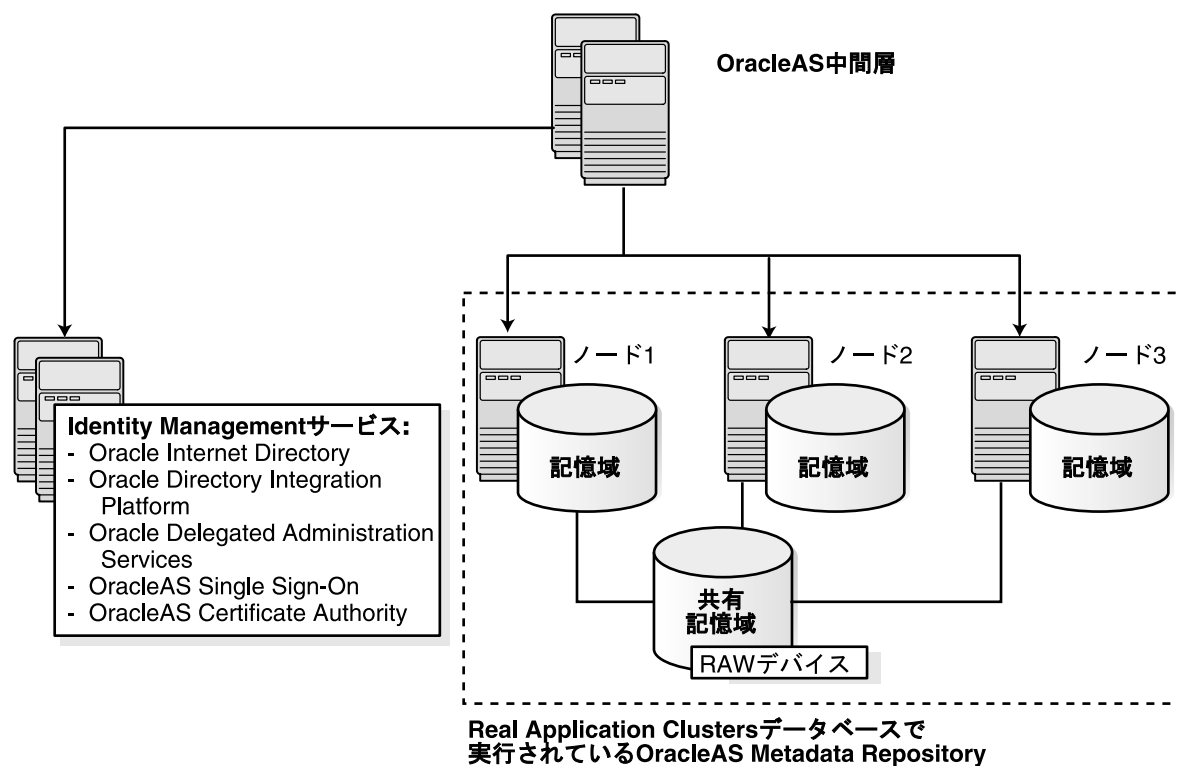


表 2-3 Real Application Clusters での OracleAS Infrastructure

コンポーネント	インストール場所
OracleAS Metadata Repository	既存の Real Application Clusters データベース
Oracle Identity Management コンポーネント	クラスタ以外のコンピュータ

2.3.1 インストールの概要

注意： この環境を構築するには、既存の Real Application Clusters データベースが必要です。

インストーラでは、OracleAS Metadata Repository を含む新規の Real Application Clusters データベースを作成できません。

この環境を構築するには、次のように Oracle Application Server をインストールします。

1. OracleAS Metadata Repository を既存の Real Application Clusters データベースにインストールします。

OracleAS RepCA を使用してこれを実行します。Real Application Clusters データベースが使用する格納タイプによって、手順が異なります。

- 第 2.3.2 項「クラスタ・ファイル・システムまたはボリューム・マネージャを使用する Real Application Clusters データベースのインストール手順」
- 第 2.3.3 項「RAW デバイスを使用する Real Application Clusters データベースのインストール手順」

注意： Oracle Internet Directory をまだインストールしていないため、OracleAS Metadata Repository を Oracle Internet Directory に登録しないでください。

2. Oracle Identity Management コンポーネントをクラスタ以外のコンピュータにインストールします。

すべての Oracle Identity Management コンポーネントを単一のコンピュータにインストールすることも、複数のコンピュータに分散することもできます。詳細は、Oracle Application Server のインストレーション・ガイドを参照してください。

インストーラの Metadata Repository のログインおよび接続情報を指定するための画面でデータベース・ホスト名の入力を要求されたら、Real Application Clusters のすべてのノード名および各ノードのポート番号を入力します。形式は、`node:port` です。各ペアはカンマ文字で区切ります。

たとえば、クラスタに 3 つのノード（名前は `node1`、`node2`、`node3`）があり、リスナーがすべてのノードをポート 1521 でリスニングする場合、次のように入力します。

```
node1:1521, node2:1521, node3:1521
```

3. Oracle Application Server 中間層をインストールします。

2.3.2 クラスタ・ファイル・システムまたはボリューム・マネージャを使用する Real Application Clusters データベースのインストール手順

クラスタ・ファイル・システム（Oracle Cluster File System など）またはボリューム・マネージャ（Veritas または EMC など）を使用する既存の Real Application Clusters データベースに OracleAS Metadata Repository をインストールするには、次の手順を実行します。

1. データベースが第 1.5 項「データベースの要件」に示す要件を満たしていることを確認します。
2. OracleAS RepCA を起動します。詳細は、第 1.7 項「OracleAS RepCA の起動」を参照してください。
3. 次の各画面で指示に従います。

注意：「データベース接続情報を指定」画面上の手順は、このマニュアルに示されている手順とは異なります。このマニュアルに、正しい手順が示されています。

表 2-4 クラスタ・ファイル・システムを使用する Real Application Clusters データベースへの OracleAS Metadata Repository のインストール

画面	アクション
1. ようこそ	「次へ」をクリックします。
2. Oracle ホームのパスを指定	Oracle ホーム：データベースの Oracle ホーム・ディレクトリへのフルパスを指定します。データベースを実行しているコンピュータの規則（適切なスラッシュなど）を使用してください。 ログ・ファイル・ディレクトリ：OracleAS RepCA のログ・ファイルの書き込み先ディレクトリをフルパスで指定します。このパスは、OracleAS RepCA を実行しているコンピュータ上のパスです。 いったん「次へ」をクリックして次の画面に移動すると、ログ・ファイル・ディレクトリを変更することはできません。「戻る」をクリックしてこの画面に戻っても、「ログ・ファイル・ディレクトリ」フィールドは読取り専用になります。これは、OracleAS RepCA によって異なるディレクトリのログ・ファイルに書き込みが行われないようにするためです。 「次へ」をクリックします。
3. 操作を選択	Oracle ホーム：データベースの Oracle ホーム・ディレクトリへのフルパスを指定します。 OracleAS Metadata Repository をデータベースにロードして Oracle Internet Directory には登録しない場合は、「ロード」を選択します。このオプションは、Oracle Internet Directory をインストールしていない場合に選択します。 OracleAS Metadata Repository をデータベースにロードして Oracle Internet Directory に登録する場合は、「ロードして登録」を選択します。 「次へ」をクリックします。

表 2-4 クラスタ・ファイル・システムを使用する Real Application Clusters データベースへの OracleAS Metadata Repository のインストール (続き)

画面	アクション
4. データベース接続情報を指定	既存データベースの接続情報を入力します。 SYS パスワード: SYS ユーザーのパスワードを指定します。 Real Application Clusters データベース: このオプションを選択し、その下に表示されるフィールドを指定します。 ■ ホスト名およびポート: Real Application Clusters データベースを実行する 1 台のコンピュータの名前とそのリスナーが使用するポート番号を指定します。OracleAS RepCA によってロードされるデータは、Real Application Clusters ソフトウェアによってすべてのノードに自動的にレプリケートされます。形式は、<i>host:port</i> です。 <i>hostname1:port1</i> ■ サービス名: データベースのサービス名を指定します。サービス名には、データベース・ドメイン名を含める必要があります。サービス名はクラスタ内のすべてのインスタンスで同じである必要があります。 例: <i>orcl.mydomain.com</i> 「次へ」をクリックします。
5. 記憶域オプションを指定	「標準のファイルシステムまたは Cluster File System」を選択します。
6. 表領域情報の指定	OracleAS RepCA によってデータベースに作成される表領域の情報を入力します。 すべての表領域に同じディレクトリを使用: すべての表領域のすべてのファイルと同じディレクトリに配置する場合に、このオプションを選択します。このオプションの下フィールドでディレクトリを指定します。次のことを確認します。 ■ ディレクトリがすでに存在し、書き込み可能である。 ■ ディレクトリに十分な空き領域がある。 ■ ディレクトリへのパスが正しく指定され、データベースを実行しているオペレーティング・システムで一貫性がある。 表領域ごとに別個のディレクトリを使用: 表領域のファイルを別々のディレクトリに配置する場合に、このオプションを選択します。 表領域: ツリーを開いて各コンポーネントの表領域を表示します。関連するデータ・ファイルまたはサイズを表示 / 編集するには、表領域を選択します。 サイズ: コンポーネントを大量に使用するアプリケーションがある場合、表領域に最大サイズを選択します。そうでない場合、最小サイズを選択します。 ファイル名: データベース・ファイルのファイル名を指定します。例: <i>portal.dbf</i> ディレクトリ: 表領域のデータベース・ファイルを配置するディレクトリを入力します。ディレクトリへのパスが正しく指定され、データベースを実行しているオペレーティング・システムで一貫性があることを確認します。 例 (UNIX) : <i>/opt/oracle/dbfiles/</i> 例 (Windows) : <i>C:\¥oracle¥dbfiles¥</i> 「次へ」をクリックします。
7. 警告: ディスク領域を確認してください	この警告ダイアログ・ボックスは、SYSTEM 表領域および UNDO 表領域に AUTOEXTEND が設定されている場合に表示されます。警告ダイアログ・ボックスに示されるとおり、SYSTEM 表領域および UNDO 表領域が含まれているファイル・システムに十分なディスク領域があることを確認してください。

表 2-4 クラスタ・ファイル・システムを使用する Real Application Clusters データベースへの OracleAS Metadata Repository のインストール (続き)

画面	アクション
8. Oracle Internet Directory 接続の指定	この画面と次の 2 つの画面は、前述の手順で「ロードして登録」を選択した場合のみ表示されます。 Internet Directory ホスト名 : Oracle Internet Directory を実行しているコンピュータの名前を指定します。中間層インスタンスが別のドメインにある場合は、ホスト名の後ろにそのドメイン名を追加する必要があります。 Internet Directory ポート : Oracle Internet Directory のポート番号を指定します。 登録 (または登録解除) を目的として Oracle Internet Directory に接続するために SSL を使用 : 登録の際に、SSL を使用して OracleAS RepCA を Oracle Internet Directory に接続する場合に、このオプションを選択します。 「次へ」をクリックします。
9. Oracle Internet Directory へのログインの指定	Oracle Internet Directory にログインするためのユーザー名およびパスワードを入力します。ユーザーは iAS Admins グループに属している必要があります。ユーザーの単純な名前 (jdoe など) またはユーザーの DN (cn=orcladmin など) を使用できます。 Oracle Internet Directory に複数のレルムが含まれる場合、指定したユーザーが含まれるレルムを入力する必要があります。 注意 : Oracle Internet Directory のスーパーユーザー (cn=orcladmin) としてログインする場合、スーパーユーザーはいずれのレルムにも属していないため、レルム値は使用されません。レルム値は、単純な名前を使用してログインする場合のみ使用されます。 「次へ」をクリックします。
10. Oracle コンテキストを指定	OracleAS Metadata Repository を登録する Oracle Internet Directory 内の場所を指定します。 ルート Oracle コンテキスト (cn=OracleContext) : ルート Oracle コンテキストに OracleAS Metadata Repository を登録する場合に選択します。 カスタム Oracle コンテキスト : Oracle Internet Directory 内の特定のレルムに OracleAS Metadata Repository を登録する場合に選択します。表示されるフィールドに、レルムの DN を指定します。 「次へ」をクリックします。
11. リポジトリをロードします	OracleAS RepCA が表領域およびスキーマを作成および移入します。
12. 成功しました	「OK」をクリックして OracleAS RepCA を終了します。

4. インストール後の手順を実行します。第 2.7 項「インストール後の手順」を参照してください。

2.3.3 RAW デバイスを使用する Real Application Clusters データベースのインストール手順

OracleAS Metadata Repository を Real Application Clusters データベースにインストールする手順は、次のとおりです。

1. データベースが第 1.5 項「データベースの要件」に示す要件を満たしていることを確認します。
2. OracleAS Metadata Repository 用の RAW デバイスを作成します。

RAW デバイスを作成する必要がある表領域とその最小サイズについては、表 1-12 を参照してください。

RAW デバイスを作成するコマンドは、使用するボリューム・マネージャ固有のコマンドです。たとえば、VERITAS Volume Manager を使用する場合は vxassist です。

3. 表領域を RAW デバイスにマップするためのファイルを作成し、このファイルを指すように環境変数 DBCA_RAW_CONFIG を設定します（オプション）。

OracleAS RepCA によってこのファイルが読み込まれ、そのデータが「表領域情報の指定」画面に反映されます。この画面でデータを確認します。

このファイルを作成しなくても、OracleAS RepCA を実行して、RAW デバイスを使用する Real Application Clusters データベースに OracleAS Metadata Repository をインストールできます。この場合、「表領域情報の指定」画面のフィールドが空白のままになるため、データを手動で入力する必要があります。

次の手順を実行します。

- a. 表領域を RAW デバイスにマッピングするためのファイルを作成します。

ファイルの各行の形式は、次のとおりです。

```
tablespace_name=raw_device_file_path
```

次のサンプル・ファイルの RAW デバイスのファイル・パスを実際の値に置き換えると、そのまま使用できます。次のサンプル・ファイルに示すように、表領域名の後ろに "1" を追加します。

```
PORTAL1=/dev/vx/rdisk/oracle/mydb_raw_portal_128m
PORTAL_DOC1=/dev/vx/rdisk/oracle/mydb_raw_portal_doc_64m
PORTAL_IDX1=/dev/vx/rdisk/oracle/mydb_raw_portal_idx_64m
PORTAL_LOG1=/dev/vx/rdisk/oracle/mydb_raw_portal_log_64m
IAS_META1=/dev/vx/rdisk/oracle/mydb_raw_ias_meta_256m
DISCO_PIM5_META1=/dev/vx/rdisk/oracle/mydb_raw_disco_meta_64m
DISCO_PIM5_CACHE1=/dev/vx/rdisk/oracle/mydb_raw_disco_cache_64m
DCM1=/dev/vx/rdisk/oracle/mydb_raw_dcm_256m
DSGATEWAY_TAB1=/dev/vx/rdisk/oracle/mydb_raw_synd_64m
WCRSYS_TS1=/dev/vx/rdisk/oracle/mydb_raw_clip_64m
B2B_DT1=/dev/vx/rdisk/oracle/mydb_raw_b2b_dt_256m
B2B_RT1=/dev/vx/rdisk/oracle/mydb_raw_b2b_rt_256m
B2B_LOB1=/dev/vx/rdisk/oracle/mydb_raw_b2b_lob_256m
B2B_IDX1=/dev/vx/rdisk/oracle/mydb_raw_b2b_idx_256m
BAM1=/dev/vx/rdisk/oracle/mydb_raw_bam_175m
ORABPEL1=/dev/vx/rdisk/oracle/mydb_raw_orapbel_80m
OCATS1=/dev/vx/rdisk/oracle/mydb_raw_oca_64m
UDDISYS_TS1=/dev/vx/rdisk/oracle/mydb_raw_uddi_64m
OLTS_ATTRSTORE1=/dev/vx/rdisk/oracle/mydb_raw_olts_attr_128m
OLTS_BATTRSTORE1=/dev/vx/rdisk/oracle/mydb_raw_olts_battr_64m
OLTS_CT_STORE1=/dev/vx/rdisk/oracle/mydb_raw_olts_ct_store_256m
OLTS_DEFAULT1=/dev/vx/rdisk/oracle/mydb_raw_olts_default_128m
OLTS_SVRMGSTORE1=/dev/vx/rdisk/oracle/mydb_raw_olts_svrmgstore_64m
```

OracleAS Metadata Repository の表領域およびスキーマのリストについては、[第 1.5.14 項「スキーマおよび表領域」](#)を参照してください。

- b. 環境変数 DBCA_RAW_CONFIG に、ファイルのフルパスを設定します。

たとえば、このファイルを /opt/oracle/repca/tablespace_map.txt として保存した場合、次のように環境変数を設定します。

```
setenv DBCA_RAW_CONFIG /opt/oracle/repca/tablespace_map.txt
```

4. OracleAS RepCA を起動します。詳細は、[第 1.7 項「OracleAS RepCA の起動」](#)を参照してください。
5. 次の各画面で指示に従います。

注意：「データベース接続情報を指定」画面上の手順は、このマニュアルに示されている手順とは異なります。このマニュアルに、正しい手順が示されています。

表 2-5 RAW デバイスを使用する Real Application Clusters データベースへの OracleAS Metadata Repository のインストール

画面	アクション
1. ようこそ	「次へ」をクリックします。
2. Oracle ホームのパスを指定	Oracle ホーム: データベースの Oracle ホーム・ディレクトリへのフルパスを指定します。データベースを実行しているコンピュータの規則 (適切なスラッシュなど) を使用してください。 ログ・ファイル・ディレクトリ: OracleAS RepCA のログ・ファイルの書き込み先ディレクトリをフルパスで指定します。このパスは、OracleAS RepCA を実行しているコンピュータ上のパスです。 いったん「次へ」をクリックして次の画面に移動すると、ログ・ファイル・ディレクトリを変更することはできません。「戻る」をクリックしてこの画面に戻っても、「ログ・ファイル・ディレクトリ」フィールドは読取り専用になります。これは、OracleAS RepCA によって異なるディレクトリのログ・ファイルに書き込みが行われないようにするためです。 「次へ」をクリックします。
3. 操作を選択	OracleAS Metadata Repository をデータベースにロードして Oracle Internet Directory には登録しない場合は、「ロード」を選択します。このオプションは、Oracle Internet Directory をインストールしていない場合に選択します。 OracleAS Metadata Repository をデータベースにロードして Oracle Internet Directory に登録する場合は、「ロードして登録」を選択します。 「次へ」をクリックします。
4. データベース接続情報を指定	既存データベースの接続情報を入力します。 SYS パスワード: SYS ユーザーのパスワードを指定します。 Real Application Clusters データベース: このオプションを選択し、その下に表示されるフィールドを指定します。 ■ ホスト名およびポート: Real Application Clusters データベースを実行する 1 台のコンピュータの名前とそのリスナーが使用するポート番号を指定します。OracleAS RepCA によってロードされるデータは、Real Application Clusters ソフトウェアによってすべてのノードに自動的にレプリケートされます。形式は、<code>host:port</code> です。 <code>hostname1:port1</code> ■ サービス名: データベースのサービス名を指定します。サービス名には、データベース・ドメイン名を含める必要があります。サービス名はクラスタ内のすべてのインスタンスで同じである必要があります。 例: <code>orcl.mydomain.com</code> 「次へ」をクリックします。
5. 記憶域オプションを指定	「RAW ファイルシステム」を選択します。
6. 表領域情報の指定	マッピング・ファイルを作成し、このファイルを指すように環境変数 <code>DBCA_RAW_CONFIG</code> を設定すると、ファイルから読み取られた値がこの画面に表示されます。詳細は、2-12 ページの手順 3 を参照してください。必要に応じて値を修正し、「次へ」をクリックします。 マッピング・ファイルを作成していない場合、または環境変数 <code>DBCA_RAW_CONFIG</code> を設定していない場合は、この画面に手動で情報を入力する必要があります。「次へ」をクリックします。
7. 警告: ディスク領域を確認してください	この警告ダイアログ・ボックスは、SYSTEM 表領域および UNDO 表領域に <code>AUTOEXTEND</code> が設定されている場合に表示されます。警告ダイアログ・ボックスに示されるとおり、SYSTEM 表領域および UNDO 表領域が含まれているファイル・システムに十分なディスク領域があることを確認してください。

表 2-5 RAW デバイスを使用する Real Application Clusters データベースへの OracleAS Metadata Repository のインストール（続き）

画面	アクション
8. Oracle Internet Directory 接続の指定	この画面と次の 2 つの画面は、前述の手順で「ロードして登録」を選択した場合のみ表示されます。 Internet Directory ホスト名 : Oracle Internet Directory を実行しているコンピュータの名前を指定します。中間層インスタンスが別のドメインにある場合は、ホスト名の後ろにそのドメイン名を追加する必要があります。 Internet Directory ポート : Oracle Internet Directory のポート番号を指定します。 登録（または登録解除）を目的として Oracle Internet Directory に接続するために SSL を使用 : 登録の際に、SSL を使用して OracleAS RepCA を Oracle Internet Directory に接続する場合に、このオプションを選択します。 「次へ」をクリックします。
9. Oracle Internet Directory へのログインの指定	Oracle Internet Directory にログインするためのユーザー名およびパスワードを入力します。ユーザーは iASAdmins グループに属している必要があります。ユーザーの単純な名前（jdoe など）またはユーザーの DN（cn=orcladmin など）を使用できます。 Oracle Internet Directory に複数のレルムが含まれる場合、指定したユーザーが含まれるレルムを入力する必要があります。 注意 : Oracle Internet Directory のスーパーユーザー（cn=orcladmin）としてログインする場合、スーパーユーザーはいずれのレルムにも属していないため、レルム値は使用されません。レルム値は、単純な名前を使用してログインする場合のみ使用されます。 「次へ」をクリックします。
10. Oracle コンテキストを指定	OracleAS Metadata Repository を登録する Oracle Internet Directory 内の場所を指定します。 ルート Oracle コンテキスト (cn=OracleContext) : ルート Oracle コンテキストに OracleAS Metadata Repository を登録する場合に選択します。 カスタム Oracle コンテキスト : Oracle Internet Directory 内の特定のレルムに OracleAS Metadata Repository を登録する場合に選択します。表示されるフィールドに、レルムの DN を指定します。 「次へ」をクリックします。
11. リポジトリをロードします	OracleAS RepCA が表領域およびスキーマを作成および移入します。
12. 成功しました	「OK」をクリックして OracleAS RepCA を終了します。

6. インストール後の手順を実行します。第 2.7 項「インストール後の手順」を参照してください。

2.4 自動ストレージ管理を使用するデータベースへのインストール

この項では、自動ストレージ管理（ASM）を使用するデータベースの既存のディスク・グループに OracleAS Metadata Repository をインストールする方法について説明します。

ASM 構成のデータベースでは、既存のディスク・グループまたは標準のファイルに OracleAS Metadata Repository をインストールできます。ディスク・グループを使用する場合、データベースには、構成されているディスク・グループが少なくとも 1 つ必要になります。

- 第 2.4.1 項「ディスク・グループへのインストール」
- 第 2.4.2 項「標準のファイルへのインストール」

2.4.1 ディスク・グループへのインストール

この項では、ASM インスタンスのディスク・グループに OracleAS Metadata Repository をインストールする方法について説明します。

ASM インスタンスに OracleAS Metadata Repository をインストールする際に、ディスク・グループではなく標準のファイルにインストールする場合は、[第 2.4.2 項「標準のファイルへのインストール」](#)を参照してください。

ASM インスタンスのディスク・グループに OracleAS Metadata Repository をインストールするには、次の手順を実行します。

1. データベースが[第 1.5 項「データベースの要件」](#)に示す要件を満たしていることを確認します。
2. OracleAS RepCA を起動します。詳細は、[第 1.7 項「OracleAS RepCA の起動」](#)を参照してください。
3. 次の各画面で指示に従います。

表 2-6 ASM インスタンスのディスク・グループへの OracleAS Metadata Repository のインストール

画面	アクション
1. ようこそ	「次へ」をクリックします。
2. Oracle ホームのパスを指定	Oracle ホーム: データベースの Oracle ホーム・ディレクトリへのフルパスを指定します。データベースを実行しているコンピュータの規則（適切なスラッシュなど）を使用してください。 ログ・ファイル・ディレクトリ: OracleAS RepCA のログ・ファイルの書き込み先ディレクトリをフルパスで指定します。このパスは、OracleAS RepCA を実行しているコンピュータ上のパスです。 いったん「次へ」をクリックして次の画面に移動すると、ログ・ファイル・ディレクトリを変更することはできません。「戻る」をクリックしてこの画面に戻っても、「ログ・ファイル・ディレクトリ」フィールドは読取り専用になります。これは、OracleAS RepCA によって異なるディレクトリのログ・ファイルに書き込みが行われないようにするためです。 「次へ」をクリックします。
3. 操作を選択	OracleAS Metadata Repository をデータベースにロードして Oracle Internet Directory には登録しない場合は、「ロード」を選択します。このオプションは、Oracle Internet Directory をインストールしていない場合に選択します。 OracleAS Metadata Repository をデータベースにロードして Oracle Internet Directory に登録する場合は、「ロードして登録」を選択します。 「次へ」をクリックします。
4. データベース接続情報を指定	既存データベースの接続情報を入力します。 SYS パスワード: SYS ユーザーのパスワードを指定します。 シングル・ノード・インスタンス: このオプションを選択し、その下に表示されるフィールドを指定します。 ■ ホスト名: データベースを実行しているコンピュータの名前を指定します。中間層インスタンスが別のドメインにある場合は、ホスト名の後ろにそのドメイン名を追加する必要があります。 ■ ポート: データベースのポート番号を指定します。 ■ サービス名: データベースのサービス名を指定します。サービス名には、データベース・ドメイン名を含める必要があります。 例: orcl.mydomain.com 「次へ」をクリックします。
5. 記憶域オプションを指定	「自動ストレージ管理 (ASM)」を選択します。

表 2-6 ASM インスタンスのディスク・グループへの OracleAS Metadata Repository のインストール (続き)

画面	アクション
6. ディスク・グループを選択	OracleAS Metadata Repository のインストール先のディスク・グループを選択します。 「次へ」をクリックします。
7. 表領域情報の指定	この画面には、OracleAS RepCA が作成する必要がある表領域が表示されます。 「サイズ」列で、表領域の適切なサイズを選択します。コンポーネントを大量に使用するアプリケーションがある場合、表領域に最大サイズを選択します。そうでない場合、最小サイズを選択します。 「次へ」をクリックします。
8. 警告: ディスク領域を確認してください	この警告ダイアログ・ボックスは、SYSTEM 表領域および UNDO 表領域に AUTOEXTEND が設定されている場合に表示されます。警告ダイアログ・ボックスに示されるとおり、SYSTEM 表領域および UNDO 表領域が含まれているファイル・システムに十分なディスク領域があることを確認してください。
9. Oracle Internet Directory 接続の指定	この画面と次の 2 つの画面は、前述の手順で「ロードして登録」を選択した場合のみ表示されます。 Internet Directory ホスト名 : Oracle Internet Directory を実行しているコンピュータの名前を指定します。中間層インスタンスが別のドメインにある場合は、ホスト名の後ろにそのドメイン名を追加する必要があります。 Internet Directory ポート : Oracle Internet Directory のポート番号を指定します。 登録 (または登録解除) を目的として Oracle Internet Directory に接続するために SSL を使用 : 登録の際に、SSL を使用して OracleAS RepCA を Oracle Internet Directory に接続する場合に、このオプションを選択します。 「次へ」をクリックします。
10. Oracle Internet Directory へのログインの指定	Oracle Internet Directory にログインするためのユーザー名およびパスワードを入力します。ユーザーは iASAdmins グループに属している必要があります。ユーザーの単純な名前 (jdoe など) またはユーザーの DN (cn=orcladmin など) を使用できます。 Oracle Internet Directory に複数のレルムが含まれる場合、指定したユーザーが含まれるレルムを入力する必要があります。 注意 : Oracle Internet Directory のスーパーユーザー (cn=orcladmin) としてログインする場合、スーパーユーザーはいずれのレルムにも属していないため、レルム値は使用されません。レルム値は、単純な名前を使用してログインする場合のみ使用されます。 「次へ」をクリックします。
11. Oracle コンテキストを指定	OracleAS Metadata Repository を登録する Oracle Internet Directory 内の場所を指定します。 ルート Oracle コンテキスト (cn=OracleContext) : ルート Oracle コンテキストに OracleAS Metadata Repository を登録する場合に選択します。 カスタム Oracle コンテキスト : Oracle Internet Directory 内の特定のレルムに OracleAS Metadata Repository を登録する場合に選択します。表示されるフィールドに、レルムの DN を指定します。 「次へ」をクリックします。
12. リポジトリをロードします	OracleAS RepCA が表領域およびスキーマを作成および移入します。
13. 成功しました	「OK」をクリックして OracleAS RepCA を終了します。

4. インストール後の手順を実行します。第 2.7 項「インストール後の手順」を参照してください。

2.4.2 標準のファイルへのインストール

ASM インスタンスの標準のファイルに OracleAS Metadata Repository をインストールする手順は、ASM 以外のデータベースの標準のファイルにインストールする手順と同様です。第 2.1 項「ファイル・システムを使用するデータベースへのインストール」を参照してください。

2.5 Oracle Managed Files を使用するデータベースへのインストール

Oracle Managed Files を使用するデータベースに OracleAS Metadata Repository をインストールするには、次の手順を実行します。

1. データベースが第 1.5 項「データベースの要件」に示す要件を満たしていることを確認します。

特に、db_create_file_dest 初期化パラメータで、OracleAS RepCA が OracleAS Metadata Repository 用のデータ・ファイルを作成するディレクトリが指定されていることを確認してください。たとえば、次のようになります。

```
prompt> sqlplus "sys/password as sysdba"
SQL> alter system set db_create_file_dest ='/u03/oradata';
```

この初期化パラメータが設定されていない場合は、エラーが発生します。

2. OracleAS RepCA を起動します。詳細は、第 1.7 項「OracleAS RepCA の起動」を参照してください。
3. 次の各画面で指示に従います。

表 2-7 Oracle Managed Files を使用するデータベースへの OracleAS Metadata Repository のインストール

画面	アクション
1. ようこそ	「次へ」をクリックします。
2. Oracle ホームのパスを指定	Oracle ホーム: データベースの Oracle ホーム・ディレクトリへのフルパスを指定します。データベースを実行しているコンピュータの規則（適切なスラッシュなど）を使用してください。 ログ・ファイル・ディレクトリ: OracleAS RepCA のログ・ファイルの書き込み先ディレクトリをフルパスで指定します。このパスは、OracleAS RepCA を実行しているコンピュータ上のパスです。 いったん「次へ」をクリックして次の画面に移動すると、ログ・ファイル・ディレクトリを変更することはできません。「戻る」をクリックしてこの画面に戻っても、「ログ・ファイル・ディレクトリ」フィールドは読取り専用になります。これは、OracleAS RepCA によって異なるディレクトリのログ・ファイルに書き込みが行われないようにするためです。 「次へ」をクリックします。
3. 操作を選択	OracleAS Metadata Repository をデータベースにロードして Oracle Internet Directory には登録しない場合は、「ロード」を選択します。このオプションは、Oracle Internet Directory をインストールしていない場合に選択します。 OracleAS Metadata Repository をデータベースにロードして Oracle Internet Directory に登録する場合は、「ロードして登録」を選択します。 「次へ」をクリックします。

表 2-7 Oracle Managed Files を使用するデータベースへの OracleAS Metadata Repository のインストール（続き）

画面	アクション
4. データベース接続情報を指定	既存データベースの接続情報を入力します。 SYS パスワード: SYS ユーザーのパスワードを指定します。 シングル・ノード・インスタンス: このオプションを選択し、その下に表示されるフィールドを指定します。 ■ ホスト名: データベースを実行しているコンピュータの名前を指定します。中間層インスタンスが別のドメインにある場合は、ホスト名の後ろにそのドメイン名を追加する必要があります。 ■ ポート: データベースのポート番号を指定します。 ■ サービス名: データベースのサービス名を指定します。サービス名には、データベース・ドメイン名を含める必要があります。 例: orcl.mydomain.com 「次へ」をクリックします。
5. 記憶域オプションを指定	「Oracle Managed Files」を選択します。
6. Oracle Managed Files のディレクトリ Directory for Oracle-Managed Files	この画面には、OracleAS RepCA が OracleAS Metadata Repository 用のデータ・ファイルを作成するディレクトリが表示されます。この値は、db_create_file_dest 初期化パラメータから読み取られます。 このパラメータが設定されていない場合は、エラー・メッセージが表示されます。 OracleAS RepCA で別のディレクトリにデータ・ファイルを作成する場合は、db_create_file_dest 初期化パラメータを編集して目的のディレクトリを指定します (SQL*Plus またはその他のデータベース管理ツールを使用)。いったん 1 つ前の画面に戻り、「次へ」をクリックして再度この画面に戻ります。新しいパラメータの値が表示されます。 「次へ」をクリックします。
7. 表領域情報の指定	この画面には、OracleAS RepCA が作成する必要がある表領域が表示されます。 「サイズ」列で、表領域の適切なサイズを選択します。コンポーネントを大量に使用するアプリケーションがある場合、表領域に最大サイズを選択します。そうでない場合、最小サイズを選択します。 「次へ」をクリックします。
8. 警告: ディスク領域を確認してください	この警告ダイアログ・ボックスは、SYSTEM 表領域および UNDO 表領域に AUTOEXTEND が設定されている場合に表示されます。警告ダイアログ・ボックスに示されるとおり、SYSTEM 表領域および UNDO 表領域が含まれているファイル・システムに十分なディスク領域があることを確認してください。
9. Oracle Internet Directory 接続の指定	この画面と次の 2 つの画面は、前述の手順で「ロードして登録」を選択した場合のみ表示されます。 Internet Directory ホスト名: Oracle Internet Directory を実行しているコンピュータの名前を指定します。中間層インスタンスが別のドメインにある場合は、ホスト名の後ろにそのドメイン名を追加する必要があります。 Internet Directory ポート: Oracle Internet Directory のポート番号を指定します。 登録 (または登録解除) を目的として Oracle Internet Directory に接続するために SSL を使用: 登録の際に、SSL を使用して OracleAS RepCA を Oracle Internet Directory に接続する場合に、このオプションを選択します。 「次へ」をクリックします。

表 2-7 Oracle Managed Files を使用するデータベースへの OracleAS Metadata Repository のインストール (続き)

画面	アクション
10. Oracle Internet Directory へのログインの指定	Oracle Internet Directory にログインするためのユーザー名およびパスワードを入力します。ユーザーは iASAdmins グループに属している必要があります。ユーザーの単純な名前 (jdoe など) またはユーザーの DN (cn=orcladmin など) を使用できます。 Oracle Internet Directory に複数のレルムが含まれる場合、指定したユーザーが含まれるレルムを入力する必要があります。 注意: Oracle Internet Directory のスーパーユーザー (cn=orcladmin) としてログインする場合、スーパーユーザーはいずれのレルムにも属していないため、レルム値は使用されません。レルム値は、単純な名前を使用してログインする場合のみ使用されます。 「次へ」をクリックします。
11. Oracle コンテキストを指定	OracleAS Metadata Repository を登録する Oracle Internet Directory 内の場所を指定します。 ルート Oracle コンテキスト (cn=OracleContext): ルート Oracle コンテキストに OracleAS Metadata Repository を登録する場合に選択します。 カスタム Oracle コンテキスト: Oracle Internet Directory 内の特定のレルムに OracleAS Metadata Repository を登録する場合に選択します。表示されるフィールドに、レルムの DN を指定します。 「次へ」をクリックします。
12. リポジトリをロードします	OracleAS RepCA が表領域およびスキーマを作成および移入します。
13. 成功しました	「OK」をクリックして OracleAS RepCA を終了します。

4. インストール後の手順を実行します。第 2.7 項「インストール後の手順」を参照してください。

2.6 ログ・ファイル内の問題のないエラー

ログ・ファイル内の次のエラーは問題ありません。無視してください。

- [第 2.6.1 項「SP2-0332 エラー」](#)
- [第 2.6.2 項「SP2-0606 エラー」](#)
- [第 2.6.3 項「Oracle Internet Directory のスキーマのロード中に発生したエラー」](#)

2.6.1 SP2-0332 エラー

ログ・ファイルに、次のように SP2-0332 エラーが表示された場合は無視してもかまいません。

```
ERROR at line 1:
ORA-04043: object OID_METRIC_TYPE does not exist
Type created.
Type created.
Package created.
Package body created.
SP2-0332: Cannot create spool file.
Procedure created.
PL/SQL procedure successfully completed.
```

また、次のように SP2-0332 エラーが表示された場合も無視してもかまいません。

```
SQL> Connected.
SQL>
PL/SQL procedure successfully completed.
SP2-0332: Cannot create spool file.
DROP USER odscommon CASCADE
ERROR at line 1:
ORA-01918: user 'ODSCOMMON' does not exist
Package body created.
SP2-0332: Cannot create spool file.
Procedure created
```

2.6.2 SP2-0606 エラー

ログ・ファイルに、次のように SP2-0606 エラーが表示された場合は無視してもかまいません。

```
ERROR at line 1:
ORA-04043: object OID_METRIC_TYPE does not exist
Type created.
Type created.
Package created.
Package body created.
SP2-0606: Cannot create SPOOL file "LOGS/oidimeta.log"
Procedure created.
PL/SQL procedure successfully completed.
```

2.6.3 Oracle Internet Directory のスキーマのロード中に発生したエラー

Oracle Internet Directory のスキーマのロード中に、次のエラーがログ・ファイルに表示された場合は無視してもかまいません。

```
ERROR at line 1:
ORA-01403: no data found
ORA-06512: at "ODS.TSPURGE", line 220
ORA-06512: at line 3
```


2.7 インストール後の手順

データベースに OracleAS Metadata Repository をインストールした後、次の手順を実行する必要があります。

- 第 2.7.1 項「[sqlnet.ora ファイルの更新](#)」
- 第 2.7.2 項「[データベースの Oracle ホームへの ldap.ora ファイルのコピー](#)」
- 第 2.7.3 項「[DCM スキーマのロック解除とパスワードの設定](#)」
- 第 2.7.4 項「[Oracle Ultra Search 用のインスタンスの作成](#)」

2.7.1 sqlnet.ora ファイルの更新

SQL*Net の設定を構成して、OracleAS Metadata Repository の ORASSO_PS スキーマと接続できるようにします。これを行うには、`NAMES.DIRECTORY_PATH` エントリに次のように LDAP を追加して、`ORACLE_HOME/network/admin/sqlnet.ora` ファイルを更新します（`ORACLE_HOME` は OracleAS Metadata Repository をインストールしたデータベース・ホーム）。

```
NAMES.DIRECTORY_PATH= (LDAP, TNSNAMES, ONAMES, HOSTNAME)
```

この構成を行わないと、OracleAS Single Sign-On 管理ポータルを使用したときに OracleAS Portal にエラーが表示されます。このエラーは、外部のアプリケーション機能を使用するために OracleAS Portal が ORASSO_PS スキーマに接続しようとして DB リンクを使用することにより起こります。この DB リンクの問題は、OracleAS Metadata Repository が存在するデータベース・ホーム内で構成された SQL*Net 設定を使用すると解決できます。

2.7.2 データベースの Oracle ホームへの ldap.ora ファイルのコピー

この手順は、OracleAS Metadata Repository をロードして Oracle Internet Directory に登録した場合にのみ実行します。OracleAS Metadata Repository のロードのみを行い、Oracle Internet Directory には登録しなかった場合、この手順はスキップします。

- データベースのリリースが、9.2.x シリーズの 9.2.0.6 以上の場合は、ファイル `Repository_Creation_Assistant_OH/network/admin/ldap.ora` を `Database_OH/network/admin/ldap.ora` にコピーします。

`Repository_Creation_Assistant_OH` は、OracleAS RepCA の Oracle ホームです。

`Database_OH` は、データベースの Oracle ホームです。

- データベースのリリースが、10.1.x シリーズの、10.1.0.4 以上の場合は、ファイル `Repository_Creation_Assistant_OH/network/admin/ldap.ora` を `Database_OH/ldap/admin/ldap.ora` にコピーします。

`Repository_Creation_Assistant_OH` は、OracleAS RepCA の Oracle ホームです。

`Database_OH` は、データベースの Oracle ホームです。

2.7.3 DCM スキーマのロック解除とパスワードの設定

dcm スキーマをロック解除し、そのパスワードを設定します。この手順が必要なのは、(1) J2EE and Web Cache 中間層インスタンスのデータベース・クラスタリングのためにのみ Metadata Repository を使用する場合、および (2) Metadata Repository を Oracle Internet Directory に登録しなかった場合のみです。

1. データベースがインストールされているディレクトリのフルパスを指すように、環境変数 ORACLE_HOME を設定します。
2. 環境変数 ORACLE_SID に、データベースの SID を設定します。
3. dcm スキーマをロック解除し、そのパスワードを SQL*Plus を使用して設定します。

次の alter user コマンドはパスワードを "welcome1" に設定していますが、任意の値に設定できます。

```
prompt> $ORACLE_HOME/bin/sqlplus "sys/password as sysdba"
SQL> alter user dcm identified by welcome1 account unlock;
```

2.7.4 Oracle Ultra Search 用のインスタンスの作成

Oracle Application Server では、データベースに付属の Oracle Ultra Search を使用します。OracleAS Metadata Repository をリリース 9.2.0.6 のデータベースにロードした場合、そのリリースのデータベースに付属の Oracle Ultra Search には、デフォルトのインスタンスが含まれていません。そのため、Oracle Ultra Search のインスタンスを作成する必要があります。インスタンスの作成方法の詳細は、『Oracle Ultra Search ユーザーズ・ガイド』の、「Oracle Ultra Search Administration ツールについて」の「インスタンスの作成」の項を参照してください。

Oracle Ultra Search インスタンスを作成しなかった場合、次の操作でエラーになります。

1. OracleAS Portal にログインします。
2. 「Oracle Ultra Search 管理」ページに移動します。次のエラーが表示されます。

```
"Error: No Ultra Search instances have been assigned to user
"ORCLADMIN" for administration. Contact the Ultra Search
administrator for your organization."
```

2.8 ロードに失敗した場合

ロードに失敗した場合は、エラーが発生する前にロードした OracleAS Metadata Repository オブジェクトを削除する必要があります。オブジェクトを削除するには、次の手順を実行します。

1. OracleAS RepCA を実行し、削除オプションを選択します。ウィザードまたはスクリプトを使用してオブジェクトを削除できます。詳細は、[第 4 章「OracleAS Metadata Repository の登録解除および削除」](#)を参照してください。
2. この手順は、OracleAS Metadata Repository をロードする前に、データベースに Oracle Internet Directory のスキーマが格納されていない場合にのみ実行します。つまり、データベース内の Oracle Internet Directory のスキーマが OracleAS Metadata Repository によってロードされた場合です。OracleAS RepCA の実行時に、データベースに Oracle Internet Directory のスキーマがすでに格納されている場合は、この手順をスキップできます。

この手順では、データベースから Oracle Internet Directory オブジェクトを削除します。OracleAS RepCA の削除操作では、データベースから Oracle Internet Directory オブジェクトが削除されないため、この手順は、個別に実行する必要があります。[第 4.1 項「削除されない Oracle Internet Directory オブジェクト」](#)を参照してください。

Oracle Internet Directory オブジェクトの削除については、[第 4.9 項「Oracle Internet Directory オブジェクトの削除」](#)を参照してください。

2.9 登録に失敗した場合

OracleAS RepCA で、OracleAS Metadata Repository を Oracle Internet Directory に登録することに失敗した場合は、登録解除の手順に従って、Oracle Internet Directory のエントリをクリーンアップします。OracleAS Metadata Repository を登録しなおすには、まず Oracle Internet Directory のエントリをクリーンアップする必要があります。

Oracle Internet Directory から OracleAS Metadata Repository を登録解除する方法については、[第 4.4 項「ウィザードを使用した OracleAS Metadata Repository の登録解除および削除」](#)を参照してください。

2.10 同じデータベースへの OracleAS Metadata Repository の再インストール

この項の説明は、リリース 9.2.x のデータベースにのみ該当します。10g データベースには該当しません。

リリース 9.2.x のデータベースから OracleAS Metadata Repository を削除して再インストールするには、次の手順を実行します。

1. OracleAS RepCA を使用して、データベースから OracleAS Metadata Repository を削除します。
2. この手順は、OracleAS Metadata Repository をロードする前に、データベースに Oracle Internet Directory のスキーマが格納されていない場合にのみ実行します。つまり、データベース内の Oracle Internet Directory のスキーマが OracleAS Metadata Repository によってロードされた場合です。OracleAS RepCA の実行時に、データベースに Oracle Internet Directory のスキーマがすでに格納されている場合は、この手順をスキップできます。

この手順では、データベースから Oracle Internet Directory オブジェクトを削除します。OracleAS RepCA の削除操作では、データベースから Oracle Internet Directory オブジェクトが削除されないため、この手順は、個別に実行する必要があります。[第 4.1 項「削除されない Oracle Internet Directory オブジェクト」](#)を参照してください。

Oracle Internet Directory オブジェクトの削除については、[第 4.9 項「Oracle Internet Directory オブジェクトの削除」](#)を参照してください。

3. データベースに OracleAS Metadata Repository を再インストールします。

再インストールした OracleAS Metadata Repository の使用

再インストールした OracleAS Metadata Repository を使用する場合は、次の点に注意してください。

- この OracleAS Metadata Repository に対して、Oracle Internet Directory をインストールすることはできません。データベースには Oracle Internet Directory が構成済みであり、Oracle Internet Directory をインストールできるのは 1 つのデータベースにつき 1 回のみであるというメッセージが、インストーラによって表示されます。
- この OracleAS Metadata Repository には、既存の Oracle Internet Directory を登録できません。
- 中間層をインストールして、この OracleAS Metadata Repository および Oracle Internet Directory を使用できます。

Oracle Internet Directory への OracleAS Metadata Repository の登録

インストール時に OracleAS Metadata Repository を Oracle Internet Directory に登録しなかった場合、登録のためにのみ OracleAS RepCA を再実行できます。データベースのスキーマや表領域は、インストールされません。

Metadata Repository が Real Application Clusters データベースにある場合、OracleAS Metadata Repository を Oracle Internet Directory に登録するために Database Configuration Assistant (DBCA) は使用できません。OracleAS RepCA を使用して登録する必要があります。

この章の構成：

- [第 3.1 項「Oracle Internet Directory への登録」](#)
- [第 3.2 項「登録後の手順」](#)
- [第 3.3 項「登録が完了する前に終了する場合、または登録が失敗した場合」](#)

3.1 Oracle Internet Directory への登録

注意：

- OracleAS Metadata Repository は、サポートされているバージョンの Oracle Internet Directory にのみ登録できます。詳細は、[第 1.6 項「Oracle Internet Directory の要件」](#)を参照してください。
- OracleAS RepCA では、リリース 2 (9.0.2) の Metadata Repository を、10g (9.0.4) の Oracle Internet Directory に登録できません。
- Oracle Internet Directory に同じサービス名がすでに登録されていることが OracleAS RepCA によって検出された場合、そのサービス名は Oracle Internet Directory に登録済であるというエラー・メッセージが表示されます。続行するには、まず、その登録を削除する必要があります。

OracleAS Metadata Repository を Oracle Internet Directory に登録する手順は、次のとおりです。

1. OracleAS RepCA を起動します。[第 1.7 項「OracleAS RepCA の起動」](#)を参照してください。
2. 次の各画面で指示に従います。

表 3-1 OracleAS Metadata Repository の Oracle Internet Directory への登録

画面	アクション
1. ようこそ	「次へ」をクリックします。
2. Oracle ホームのパスを指定	Oracle ホーム：データベースの Oracle ホーム・ディレクトリへのフルパスを指定します。データベースを実行しているコンピュータの規則（適切なスラッシュなど）を使用してください。 ログ・ファイル・ディレクトリ：OracleAS RepCA のログ・ファイルの書き込み先ディレクトリをフルパスで指定します。このパスは、OracleAS RepCA を実行しているコンピュータ上のパスです。 いったん「次へ」をクリックして次の画面に移動すると、ログ・ファイル・ディレクトリを変更することはできません。「戻る」をクリックしてこの画面に戻っても、「ログ・ファイル・ディレクトリ」フィールドは読取り専用になります。これは、OracleAS RepCA によって異なるディレクトリのログ・ファイルに書き込みが行われないようにするためです。 「次へ」をクリックします。
3. 操作を選択	「登録」を選択します。 「次へ」をクリックします。

表 3-1 OracleAS Metadata Repository の Oracle Internet Directory への登録 (続き)

画面	アクション
4. データベース接続情報を指定	データベースの接続情報を入力します。 「DBA ユーザー名」および「パスワード」: データベースにログインするためのユーザー名およびパスワードを入力します。ユーザーには DBA 権限が必要です。 データベースのタイプに応じて、「シングル・ノード・インスタンス」または「Real Application Clusters データベース」を選択し、対応するフィールドを指定します。 「シングル・ノード・インスタンス」のフィールドは、次のとおりです。 ■ ホスト名: データベースを実行しているコンピュータの名前を指定します。中間層インスタンスが別のドメインにある場合は、ホスト名の後ろにそのドメイン名を追加する必要があります。 ■ ポート: データベースのポート番号を指定します。 ■ サービス名: データベースのサービス名を指定します。サービス名には、データベース・ドメイン名を含める必要があります。 例: orcl.mydomain.com 「Real Application Clusters データベース」のフィールドは、次のとおりです。 ■ ホスト名およびポート: Real Application Clusters データベースを実行するすべてのコンピュータの名前とリスナーが使用するポート番号を指定します。形式は、<i>host:port</i> です。各 <i>host:port</i> は、次のようにカンマ文字で区切ります。 hostname1:port1,hostname2:port2,hostname3:port3, ... 中間層インスタンスが別のドメインにある場合は、ホスト名の後ろにそのドメイン名を追加する必要があります。 例 1 (同じドメイン): myhost:1521, myhost2:1521 例 2 (異なるドメイン): myhost.mydomain.com:1521, myhost2.mydomain.com:1521 ■ サービス名: データベースのサービス名を指定します。サービス名には、データベース・ドメイン名を含める必要があります。サービス名はクラスタ内のすべてのインスタンスで同じである必要があります。 例: orcl.mydomain.com 「次へ」をクリックします。
5. Oracle Internet Directory 接続の指定	Internet Directory ホスト名: Oracle Internet Directory を実行しているコンピュータの名前を指定します。中間層インスタンスが別のドメインにある場合は、ホスト名の後ろにそのドメイン名を追加する必要があります。 Internet Directory ポート: Oracle Internet Directory のポート番号を指定します。 登録 (または登録解除) を目的として Oracle Internet Directory に接続するために SSL を使用: 登録の際に、SSL を使用して OracleAS RepCA を Oracle Internet Directory に接続する場合に、このオプションを選択します。 「次へ」をクリックします。
6. Oracle Internet Directory へのログインの指定	Oracle Internet Directory にログインするためのユーザー名およびパスワードを入力します。ユーザーは iAS Admins グループに属している必要があります。ユーザーの単純な名前 (jdoe など) またはユーザーの DN (cn=orcladmin など) を使用できます。 Oracle Internet Directory に複数のレルムが含まれる場合、指定したユーザーが含まれるレルムを入力する必要があります。 注意: Oracle Internet Directory のスーパーユーザー (cn=orcladmin) としてログインする場合、スーパーユーザーはいずれのレルムにも属していないため、レルム値は使用されません。レルム値は、単純な名前を使用してログインする場合のみ使用されます。 「次へ」をクリックします。

表 3-1 OracleAS Metadata Repository の Oracle Internet Directory への登録（続き）

画面	アクション
7. Oracle コンテキストを指定	OracleAS Metadata Repository を登録する Oracle Internet Directory 内の場所を指定します。 ルート Oracle コンテキスト (cn=OracleContext): ルート Oracle コンテキストに OracleAS Metadata Repository を登録する場合に選択します。 カスタム Oracle コンテキスト: Oracle Internet Directory 内の特定のレルムに OracleAS Metadata Repository を登録する場合に選択します。表示されるフィールドに、レルムの DN を指定します。 「次へ」をクリックします。
8. 成功しました	「OK」をクリックして OracleAS RepCA を終了します。

3.2 登録後の手順

OracleAS Metadata Repository を Oracle Internet Directory に登録した後で、OracleAS RepCA ホームの `ldap.ora` ファイルを、データベースのホームにコピーする必要があります。詳細は、[第 2.7.2 項「データベースの Oracle ホームへの ldap.ora ファイルのコピー」](#) を参照してください。

3.3 登録が完了する前に終了する場合、または登録が失敗した場合

登録が完了する前に OracleAS RepCA を終了した場合、または登録が失敗した場合、再登録のために OracleAS RepCA を再実行する前に手動による次の手順を実行する必要があります。

1. Oracle Internet Directory からリポジトリ・エントリを削除します。[第 4.4 項「ウィザードを使用した OracleAS Metadata Repository の登録解除および削除」](#) を参照してください。
 2. すべてのスキーマ・パスワードをデフォルト値にリセットします。
- すべてのスキーマのリストについては、[表 1-9「スキーマおよび表領域」](#) を参照してください。

```
prompt> sqlplus "sys/password as sysdba"
SQL> alter user schema_name identified by schema_password;
```

3. すべてのスキーマ・パスワードをロックします。

```
prompt> sqlplus "sys/password as sysdba"
SQL> alter user schema_name account lock password expire;
```

この手順を実行後、OracleAS RepCA を再起動してデータベースを登録できます。

OracleAS Metadata Repository の 登録解除および削除

OracleAS RepCA を使用して、データベースから OracleAS Metadata Repository の表領域およびスキーマを削除し、Oracle Internet Directory の登録を解除することもできます。

この章の構成：

- 第 4.1 項「削除されない Oracle Internet Directory オブジェクト」
- 第 4.2 項「データベースが Oracle Internet Directory データベースの場合」
- 第 4.3 項「中間層で OracleAS Metadata Repository を使用している場合」
- 第 4.4 項「ウィザードを使用した OracleAS Metadata Repository の登録解除および削除」
- 第 4.5 項「OracleAS Metadata Repository の削除」
- 第 4.6 項「OracleAS Metadata Repository の登録解除」
- 第 4.7 項「cleanMR スクリプトを使用した OracleAS Metadata Repository の削除」
- 第 4.8 項「ログ・ファイル内の問題のないエラー」
- 第 4.9 項「Oracle Internet Directory オブジェクトの削除」
- 第 4.10 項「登録解除の操作を取り消した場合のデータベースのクリーンアップ」

以前のリリースとの非互換

今回のリリースの OracleAS RepCA を使用して、以前のリリースの OracleAS RepCA でロードまたは登録された OracleAS Metadata Repository を削除または登録解除することはできません。たとえば、リリース 9.0.4.x の OracleAS RepCA でロードおよび登録された OracleAS Metadata Repository を、今回のリリースの OracleAS RepCA を使用して削除または登録解除することはできません。リリース 9.0.4.x の OracleAS Metadata Repository を削除または登録解除するには、ロードに使用したリリースと同じリリースの OracleAS RepCA を使用します。

ウィザードまたはスクリプトの使用

ウィザードまたは cleanMR スクリプトを使用して、OracleAS Metadata Repository を登録解除および削除できます。スクリプトでは、削除のみ実行され、OracleAS Metadata Repository の登録解除は実行されないことに注意してください。

4.1 削除されない Oracle Internet Directory オブジェクト

リリース 2 (9.2.x) のデータベースから OracleAS Metadata Repository を削除する場合、OracleAS RepCA では、データベースにある Oracle Internet Directory のスキーマ (ODS) または表領域 (OLTS_ATTRSTORE、OLTS_BATTRSTORE、OLTS_CT_STORE、OLTS_DEFAULT および OLTS_SVRMGSTORE) は削除されません。

同じデータベースに OracleAS Metadata Repository を再ロードする場合は、OracleAS RepCA を正常に実行できます。Oracle Internet Directory オブジェクトが再利用されます。

4.2 データベースが Oracle Internet Directory データベースの場合

データベースが Oracle Internet Directory データベースの場合は、登録を解除できません。OracleAS RepCA によってエラーが表示され、登録解除は続行できなくなります。

Oracle Internet Directory データベースは、Oracle Internet Directory によって使用されているデータベースです。Oracle Internet Directory データベースには、たとえば次のものがあります。

- 「Oracle Identity Management + OracleAS Metadata Repository」のインストール・タイプをインストールすると、データベースは Oracle Internet Directory データベースになります。
- Oracle Internet Directory をインストールし、インストーラまたは OracleAS RepCA を使用して作成した OracleAS Metadata Repository に登録すると、データベースは Oracle Internet Directory データベースになります。

4.3 中間層で OracleAS Metadata Repository を使用している場合

データベースが Oracle Internet Directory データベースではない場合、OracleAS RepCA では、削除または登録解除する OracleAS Metadata Repository データベースを使用している中間層があるかどうかを確認されます。

そのような OracleAS Metadata Repository を使用している中間層が検出されると、警告が表示されます。登録解除または削除を続行すると、中間層は使用できなくなります。

4.4 ウィザードを使用した OracleAS Metadata Repository の登録解除および削除

この項では、ウィザードを使用して OracleAS Metadata Repository を登録解除および削除する方法について説明します。

Oracle Internet Directory から OracleAS Metadata Repository の登録解除のみを行う場合は、[第 4.6 項「OracleAS Metadata Repository の登録解除」](#)を参照してください。

OracleAS Metadata Repository の削除のみを行う場合は、[第 4.5 項「OracleAS Metadata Repository の削除」](#)を参照してください。

OracleAS Metadata Repository を登録解除および削除するには、次の手順を実行します。

1. 削除または登録解除する OracleAS Metadata Repository を使用しているすべての Oracle Application Server インスタンスを停止します。

Oracle Application Server インスタンスを停止しても、データベースに一部の OracleAS Metadata Repository スキーマがアクティブであると表示される場合があります。これは、データベースに対して次の問合せを実行することによって確認できます。

```
prompt> sqlplus "sys/password as sysdba"
SQL> select schemaname from v$session;
```

password は、SYS ユーザーのパスワードを指定します。

「schemaname」に OracleAS Metadata Repository のスキーマが表示された場合、それらのスキーマはアクティブなままです。OracleAS Metadata Repository のスキーマについては、[表 1-9](#) を参照してください。

インスタンスが停止していることを確認した後で、データベースを再起動して、セッション情報を消去します。

これを行わなかった場合、Oracle Application Server インスタンスの一部のセッションがアクティブなままであることが OracleAS RepCA によって検出され、警告が表示されます。

2. OracleAS RepCA を起動します。詳細は、[第 1.7 項「OracleAS RepCA の起動」](#) を参照してください。
3. 次の各画面で指示に従います。

表 4-1 OracleAS Metadata Repository の登録解除および削除

画面	アクション
1. ようこそ	「次へ」をクリックします。
2. Oracle ホームのパスを指定	Oracle ホーム: データベースの Oracle ホーム・ディレクトリへのフルパスを指定します。データベースを実行しているコンピュータの規則（適切なスラッシュなど）を使用してください。 ログ・ファイル・ディレクトリ: OracleAS RepCA のログ・ファイルの書き込み先ディレクトリをフルパスで指定します。このパスは、OracleAS RepCA を実行しているコンピュータ上のパスです。 いったん「次へ」をクリックして次の画面に移動すると、ログ・ファイル・ディレクトリを変更することはできません。「戻る」をクリックしてこの画面に戻っても、「ログ・ファイル・ディレクトリ」フィールドは読取り専用になります。これは、OracleAS RepCA によって異なるディレクトリのログ・ファイルに書き込みが行われないようにするためです。 「次へ」をクリックします。
3. 操作を選択	「削除」を選択します。 「次へ」をクリックします。
4. 削除オプションを選択	登録解除して削除: OracleAS Metadata Repository の表領域およびスキーマをデータベースから削除し、Oracle Internet Directory から登録解除する場合に、このオプションを選択します。 「次へ」をクリックします。

表 4-1 OracleAS Metadata Repository の登録解除および削除（続き）

画面	アクション
5. データベース接続情報を指定	既存データベースの接続情報を入力します。 SYS パスワード: SYS ユーザーのパスワードを指定します。 データベースのタイプに応じて、「シングル・ノード・インスタンス」または「Real Application Clusters データベース」を選択し、対応するフィールドを指定します。 「シングル・ノード・インスタンス」のフィールドは、次のとおりです。 ■ ホスト名: データベースを実行しているコンピュータの名前を指定します。中間層インスタンスが別のドメインにある場合は、ホスト名の後ろにそのドメイン名を追加する必要があります。 ■ ポート: データベースのポート番号を指定します。 ■ サービス名: データベースのサービス名を指定します。サービス名には、データベース・ドメイン名を含める必要があります。 例: orcl.mydomain.com 「Real Application Clusters データベース」のフィールドは、次のとおりです。 ■ ホスト名およびポート: Real Application Clusters データベースを実行するすべてのコンピュータの名前とリスナーが使用するポート番号を指定します。形式は、<i>host:port</i> です。各 <i>host:port</i> は、次のようにカンマ文字で区切ります。 hostname1:port1,hostname2:port2,hostname3:port3, ... 中間層インスタンスが別のドメインにある場合は、ホスト名の後ろにそのドメイン名を追加する必要があります。 例 1 (同じドメイン): myhost:1521, myhost2:1521 例 2 (異なるドメイン): myhost.mydomain.com:1521, myhost2.mydomain.com:1521 ■ サービス名: データベースのサービス名を指定します。サービス名には、データベース・ドメイン名を含める必要があります。サービス名はクラスタ内のすべてのインスタンスで同じである必要があります。 例: orcl.mydomain.com 「次へ」をクリックします。
6. Oracle Internet Directory 接続の指定	OracleAS Metadata Repository を登録解除する Oracle Internet Directory の接続情報を指定します。 Internet Directory ホスト名: Oracle Internet Directory を実行しているコンピュータの名前を指定します。中間層インスタンスが別のドメインにある場合は、ホスト名の後ろにそのドメイン名を追加する必要があります。 Internet Directory ポート: Oracle Internet Directory のポート番号を指定します。 登録 (または登録解除) を目的として Oracle Internet Directory に接続するために SSL を使用: 登録解除の際に、SSL を使用して OracleAS RepCA を Oracle Internet Directory に接続する場合に、このオプションを選択します。 「次へ」をクリックします。
7. Oracle Internet Directory へのログインの指定	Oracle Internet Directory にログインするためのユーザー名およびパスワードを入力します。ユーザーは iAS Admins グループに属している必要があります。ユーザーの単純な名前 (jdoe など) またはユーザーの DN (cn=orcladmin など) を使用できます。 Oracle Internet Directory に複数のレルムが含まれる場合、指定したユーザーが含まれるレルムを入力する必要があります。 注意: Oracle Internet Directory のスーパーユーザー (cn=orcladmin) としてログインする場合、スーパーユーザーはいずれのレルムにも属していないため、レルム値は使用されません。レルム値は、単純な名前を使用してログインする場合のみ使用されます。 「次へ」をクリックします。

表 4-1 OracleAS Metadata Repository の登録解除および削除（続き）

画面	アクション
8. Oracle コンテキストを指定	OracleAS Metadata Repository を登録解除する Oracle Internet Directory 内の場所を指定します。 ルート Oracle コンテキスト (cn=OracleContext): ルート Oracle コンテキストから OracleAS Metadata Repository を登録解除する場合に選択します。 カスタム Oracle コンテキスト: Oracle Internet Directory 内の特定のレルムから OracleAS Metadata Repository を登録解除する場合に選択します。表示されるフィールドに、レルムの DN を指定します。 注意: この画面で、いったん「次へ」をクリックしたら、その操作は取り消さないでください。操作が完了する前に取消しを行うと、データベースの登録も登録解除もできなくなります。この操作を取り消すには、取消しを行う前にいくつかの手順を手動で実行し、データベースをクリーンアップする必要があります。第 4.10 項「登録解除の操作を取り消した場合のデータベースのクリーンアップ」を参照してください。 「次へ」をクリックします。
9. 成功しました	「OK」をクリックして OracleAS RepCA を終了します。

4.5 OracleAS Metadata Repository の削除

この項では、ウィザードを使用して OracleAS Metadata Repository を削除する方法について説明します。

Oracle Internet Directory から OracleAS Metadata Repository の登録解除のみを行う場合は、第 4.6 項「OracleAS Metadata Repository の登録解除」を参照してください。

OracleAS Metadata Repository の登録解除および削除を行う場合は、第 4.4 項「ウィザードを使用した OracleAS Metadata Repository の登録解除および削除」を参照してください。

OracleAS Metadata Repository を削除するには、次の手順を実行します。

1. 削除する OracleAS Metadata Repository を使用しているすべての Oracle Application Server インスタンスを停止します。

Oracle Application Server インスタンスを停止しても、データベースに一部の OracleAS Metadata Repository スキーマがアクティブであると表示される場合があります。これは、データベースに対して次の問合せを実行することによって確認できます。

```
prompt> sqlplus "sys/password as sysdba"
SQL> select schemaname from v$session;
```

password は、SYS ユーザーのパスワードを指定します。

「schemaname」に OracleAS Metadata Repository のスキーマが表示された場合、それらのスキーマはアクティブなままです。OracleAS Metadata Repository のスキーマについては、表 1-9 を参照してください。

インスタンスが停止していることを確認した後で、データベースを再起動して、セッション情報を消去します。

これを行わなかった場合、Oracle Application Server インスタンスの一部のセッションがアクティブなままであることが OracleAS RepCA によって検出され、警告が表示されません。

2. OracleAS RepCA を起動します。詳細は、第 1.7 項「OracleAS RepCA の起動」を参照してください。
3. 次の各画面で指示に従います。

表 4-2 OracleAS Metadata Repository の削除

画面	アクション
1. ようこそ	「次へ」をクリックします。
2. Oracle ホームのパスを指定	Oracle ホーム: データベースの Oracle ホーム・ディレクトリへのフルパスを指定します。データベースを実行しているコンピュータの規則（適切なスラッシュなど）を使用してください。 ログ・ファイル・ディレクトリ: OracleAS RepCA のログ・ファイルの書き込み先ディレクトリをフルパスで指定します。このパスは、OracleAS RepCA を実行しているコンピュータ上のパスです。 いったん「次へ」をクリックして次の画面に移動すると、ログ・ファイル・ディレクトリを変更することはできません。「戻る」をクリックしてこの画面に戻っても、「ログ・ファイル・ディレクトリ」フィールドは読取り専用になります。これは、OracleAS RepCA によって異なるディレクトリのログ・ファイルに書き込みが行われないようにするためです。 「次へ」をクリックします。
3. 操作を選択	「削除」を選択します。 「次へ」をクリックします。
4. 削除オプションを選択	削除: OracleAS Metadata Repository の表領域およびスキーマをデータベースから削除する場合に、このオプションを選択します。 「次へ」をクリックします。
5. データベース接続情報を指定	既存データベースの接続情報を入力します。 SYS パスワード: SYS ユーザーのパスワードを指定します。 データベースのタイプに応じて、「シングル・ノード・インスタンス」または「Real Application Clusters データベース」を選択し、対応するフィールドを指定します。 「シングル・ノード・インスタンス」のフィールドは、次のとおりです。 ■ ホスト名: データベースを実行しているコンピュータの名前を指定します。中間層インスタンスが別のドメインにある場合は、ホスト名の後ろにそのドメイン名を追加する必要があります。 ■ ポート: データベースのポート番号を指定します。 ■ サービス名: データベースのサービス名を指定します。サービス名には、データベース・ドメイン名を含める必要があります。 例: orcl.mydomain.com 「Real Application Clusters データベース」のフィールドは、次のとおりです。 ■ ホスト名およびポート: Real Application Clusters データベースを実行するすべてのコンピュータの名前とリスナーが使用するポート番号を指定します。形式は、<i>host:port</i> です。各 <i>host:port</i> は、次のようにカンマ文字で区切ります。 hostname1:port1,hostname2:port2,hostname3:port3, ... 中間層インスタンスが別のドメインにある場合は、ホスト名の後ろにそのドメイン名を追加する必要があります。 例 1 (同じドメイン): myhost:1521, myhost2:1521 例 2 (異なるドメイン): myhost.mydomain.com:1521, myhost2.mydomain.com:1521 ■ サービス名: データベースのサービス名を指定します。サービス名には、データベース・ドメイン名を含める必要があります。サービス名はクラスタ内のすべてのインスタンスで同じである必要があります。 例: orcl.mydomain.com 「次へ」をクリックします。
6. 成功しました	「OK」をクリックして OracleAS RepCA を終了します。

4.6 OracleAS Metadata Repository の登録解除

この項では、ウィザードを使用して OracleAS Metadata Repository を Oracle Internet Directory から登録解除する方法について説明します。データベースの OracleAS Metadata Repository オブジェクトは削除されません。

データベースが Oracle Internet Directory データベースの場合は、登録解除できません。詳細は、[第 4.2 項「データベースが Oracle Internet Directory データベースの場合」](#)を参照してください。

OracleAS Metadata Repository の削除のみを行う場合は、[第 4.5 項「OracleAS Metadata Repository の削除」](#)を参照してください。

OracleAS Metadata Repository の登録解除および削除を行う場合は、[第 4.4 項「ウィザードを使用した OracleAS Metadata Repository の登録解除および削除」](#)を参照してください。

1. 登録解除する OracleAS Metadata Repository を使用しているすべての Oracle Application Server インスタンスを停止します。

Oracle Application Server インスタンスを停止しても、データベースに一部の OracleAS Metadata Repository スキーマがアクティブである则表示される場合があります。これは、データベースに対して次の問合せを実行することによって確認できます。

```
prompt> sqlplus "sys/password as sysdba"
SQL> select schemaname from v$session;
```

password は、SYS ユーザーのパスワードを指定します。

「schemaname」に OracleAS Metadata Repository のスキーマが表示された場合、それらのスキーマはアクティブなままです。OracleAS Metadata Repository のスキーマについては、[表 1-9](#)を参照してください。

インスタンスが停止していることを確認した後で、データベースを再起動して、セッション情報を消去します。

これを行わなかった場合、Oracle Application Server インスタンスの一部のセッションがアクティブなままであることが OracleAS RepCA によって検出され、警告が表示されます。

2. OracleAS RepCA を起動します。詳細は、[第 1.7 項「OracleAS RepCA の起動」](#)を参照してください。
3. 次の各画面で指示に従います。

表 4-3 OracleAS Metadata Repository の登録解除

画面	アクション
1. ようこそ	「次へ」をクリックします。
2. Oracle ホームのパスを指定	Oracle ホーム : データベースの Oracle ホーム・ディレクトリへのフルパスを指定します。データベースを実行しているコンピュータの規則（適切なスラッシュなど）を使用してください。 ログ・ファイル・ディレクトリ : OracleAS RepCA のログ・ファイルの書き込み先ディレクトリをフルパスで指定します。このパスは、OracleAS RepCA を実行しているコンピュータ上のパスです。 いったん「次へ」をクリックして次の画面に移動すると、ログ・ファイル・ディレクトリを変更することはできません。「戻る」をクリックしてこの画面に戻っても、「ログ・ファイル・ディレクトリ」フィールドは読取り専用になります。これは、OracleAS RepCA によって異なるディレクトリのログ・ファイルに書き込みが行われないようにするためです。 「次へ」をクリックします。
3. 操作を選択	「削除」を選択します。 「次へ」をクリックします。

表 4-3 OracleAS Metadata Repository の登録解除（続き）

画面	アクション
4. 削除オプションを選択	「登録解除」を選択します。 「次へ」をクリックします。
5. データベース接続情報を指定	既存データベースの接続情報を入力します。 「DBA ユーザー名」および「パスワード」: データベースにログインするためのユーザー名およびパスワードを入力します。ユーザーには DBA 権限が必要です。 データベースのタイプに応じて、「シングル・ノード・インスタンス」または「Real Application Clusters データベース」を選択し、対応するフィールドを指定します。 「シングル・ノード・インスタンス」のフィールドは、次のとおりです。 ■ ホスト名: データベースを実行しているコンピュータの名前を指定します。中間層インスタンスが別のドメインにある場合は、ホスト名の後ろにそのドメイン名を追加する必要があります。 ■ ポート: データベースのポート番号を指定します。 ■ サービス名: データベースのサービス名を指定します。サービス名には、データベース・ドメイン名を含める必要があります。 例: orcl.mydomain.com 「Real Application Clusters データベース」のフィールドは、次のとおりです。 ■ ホスト名およびポート: Real Application Clusters データベースを実行するすべてのコンピュータの名前とリスナーが使用するポート番号を指定します。形式は、<i>host:port</i> です。各 <i>host:port</i> は、次のようにカンマ文字で区切ります。 hostname1:port1,hostname2:port2,hostname3:port3, ... 中間層インスタンスが別のドメインにある場合は、ホスト名の後ろにそのドメイン名を追加する必要があります。 例 1 (同じドメイン): myhost:1521, myhost2:1521 例 2 (異なるドメイン): myhost.mydomain.com:1521, myhost2.mydomain.com:1521 ■ サービス名: データベースのサービス名を指定します。サービス名には、データベース・ドメイン名を含める必要があります。サービス名はクラスタ内のすべてのインスタンスで同じである必要があります。 例: orcl.mydomain.com 「次へ」をクリックします。
6. Oracle Internet Directory 接続の指定	Internet Directory ホスト名: Oracle Internet Directory を実行しているコンピュータの名前を指定します。中間層インスタンスが別のドメインにある場合は、ホスト名の後ろにそのドメイン名を追加する必要があります。 Internet Directory ポート: Oracle Internet Directory のポート番号を指定します。 登録（または登録解除）を目的として Oracle Internet Directory に接続するために SSL を使用: 登録解除の際に、SSL を使用して OracleAS RepCA を Oracle Internet Directory に接続する場合に、このオプションを選択します。 「次へ」をクリックします。

表 4-3 OracleAS Metadata Repository の登録解除（続き）

画面	アクション
7. Oracle Internet Directory へのログインの指定	Oracle Internet Directory にログインするためのユーザー名およびパスワードを入力します。ユーザーは iAS Admins グループに属している必要があります。ユーザーの単純な名前（jdoe など）またはユーザーの DN（cn=orcladmin など）を使用できます。 Oracle Internet Directory に複数のレルムが含まれる場合、指定したユーザーが含まれるレルムを入力する必要があります。 注意：Oracle Internet Directory のスーパーユーザー（cn=orcladmin）としてログインする場合、スーパーユーザーはいずれのレルムにも属していないため、レルム値は使用されません。レルム値は、単純な名前を使用してログインする場合のみ使用されます。 「次へ」をクリックします。
8. Oracle コンテキストを指定	OracleAS Metadata Repository を登録解除する Oracle Internet Directory 内の場所を指定します。 ルート Oracle コンテキスト (cn=OracleContext): ルート Oracle コンテキストから OracleAS Metadata Repository を登録解除する場合に選択します。 カスタム Oracle コンテキスト: Oracle Internet Directory 内の特定のレルムから OracleAS Metadata Repository を登録解除する場合に選択します。表示されるフィールドに、レルムの DN を指定します。 注意：この画面で、いったん「次へ」をクリックしたら、その操作は取り消さないでください。操作が完了する前に取消を行うと、データベースの登録も登録解除もできなくなります。この操作を取り消すには、取消を行う前にいくつかの手順を手動で実行し、データベースをクリーンアップする必要があります。第 4.10 項「登録解除の操作を取り消した場合のデータベースのクリーンアップ」を参照してください。 「次へ」をクリックします。
9. 成功しました	「OK」をクリックして OracleAS RepCA を終了します。

登録解除後にロックされるスキーマおよび期限切れになるパスワード

OracleAS Metadata Repository の登録解除のみを実行する（OracleAS Metadata Repository オブジェクトを削除しない）と、OracleAS RepCA によってスキーマがロックされ、スキーマのパスワードが期限切れになります。このため、スキーマを再利用するには、次の手順を実行する必要があります。

- スキーマをロック解除します。これは、SQL 文 alter user を使用して実行できます。たとえば、次のようになります。

```
prompt> sqlplus "sys/password as sysdba"
SQL> alter user PORTAL account unlock;
```

- スキーマのパスワードを変更します。これも、SQL 文 alter user を使用して実行できます。たとえば、次のようになります。

```
prompt> sqlplus "sys/password as sysdba"
SQL> alter user PORTAL identified by new_password;
```

スキーマのリストについては、[表 1-9](#) を参照してください。

4.7 cleanMR スクリプトを使用した OracleAS Metadata Repository の削除

注意： このスクリプトでは、OracleAS Metadata Repository の削除のみが実行されます。OracleAS Metadata Repository の登録解除は実行されません。OracleAS Metadata Repository を登録解除するには、ウィザードを使用する必要があります。

cleanMR スクリプトは、`ORACLE_HOME/repca/clean` ディレクトリに格納されています。`ORACLE_HOME` は、OracleAS RepCA のインストール先ディレクトリです。

データベースが実行されているコンピュータで、cleanMR を実行する必要があります。

Real Application Clusters データベースに対して cleanMR を実行する場合は、1 つのノードに対して実行する必要があります。

スクリプト実行前のすべての Oracle Application Server インスタンスの停止

スクリプトを実行する前に、削除する OracleAS Metadata Repository を使用しているすべての Oracle Application Server インスタンスを停止します。

Oracle Application Server インスタンスを停止しても、データベースに一部の OracleAS Metadata Repository スキーマがアクティブであると表示される場合があります。これは、データベースに対して次の問合せを実行することによって確認できます。

```
prompt> sqlplus "sys/password as sysdba"
SQL> select schemaname from v$session;
```

`password` は、SYS ユーザーのパスワードを指定します。

「`schemaname`」に OracleAS Metadata Repository のスキーマが表示された場合、それらのスキーマはアクティブなままです。OracleAS Metadata Repository のスキーマについては、[表 1-9](#)を参照してください。

インスタンスが停止していることを確認した後で、データベースを再起動して、セッション情報を消去します。

これを行わなかった場合、現在データベースに接続しているユーザーを削除しようとしているというエラーが表示される場合があります。

cleanMR の構文

```
prompt> cleanMR -HOST db_host -PORT db_port -SERVICE_NAME service_name
[-DBUSER dbuser] -DBPASSWD password [-DBROLE dbrole]
```

表 4-4 cleanMR のパラメータ

パラメータ	オプションまたは必須	説明
-HOST <i>db_host</i>	必須	データベースを実行しているコンピュータの名前を指定します。
-PORT <i>db_port</i>	必須	データベース・リスナーがリスニングしているポート番号を指定します。
-SERVICE_NAME <i>service_name</i>	必須	データベースのサービス名を指定します。
-DBUSER <i>dbuser</i>	オプション	データベースに接続するためにスクリプトで使用するデータベース・ユーザーを指定します。指定しない場合のデフォルト・ユーザーは "SYS" です。
-DBPASSWD <i>password</i>	必須	DBUSER のパスワードを指定します。

表 4-4 cleanMR のパラメータ (続き)

パラメータ	オプションまたは必須	説明
-DBROLE dbrole	オプション	データベース・ユーザー・ロールを指定します。指定しない場合のデフォルト・ロールは "SYSDBA" です。

例：

```
cleanMR -HOST myhost -PORT 1521 -SERVICE_NAME orcl -DBPASSWD topsecret
```

注意

- このスクリプトは、ODS スキーマ、および OLTS_ATTRSTORE、OLTS_BATTRSTORE、OLTS_CT_STORE、OLTS_DEFAULT、OLTS_SVRMGSTORE 表領域を削除しません。これらのオブジェクトは、Oracle Internet Directory に関係します。
これらのオブジェクトを削除するには、第 4.9 項「[Oracle Internet Directory オブジェクトの削除](#)」を参照してください。
- このスクリプトは、データ・ファイルを削除しません。

ORA-2000 エラー、ORU-10027 エラーが表示される場合

cleanMR スクリプトによって次のエラーが表示される場合があります。

```
ORA-20000: ORU-10027: buffer overflow, limit of 2000 bytes
ORA-06512: at "SYS.DBMS_OUTPUT", line 35
ORA-06512: at "SYS.DBMS_OUTPUT", line 198
ORA-06512: at "SYS.DBMS_OUTPUT", line 139
ORA-06512: at line 201
```

この場合、スクリプトを再実行し、最初の操作で削除されなかった残りのオブジェクトを削除する必要があります。

4.8 ログ・ファイル内の問題のないエラー

データベースに OracleAS Metadata Repository が存在しない場合にこれを削除しようとする
と、ログ・ファイルに次のエラーが表示される場合があります。このエラーは無視してかまいません。

```
ERROR - SQLFilterAction perform failed
java.sql.SQLException: ORA-00942: table or view does not exist
at oracle.jdbc.dbaccess.DBError.throwSQLException(DBError.java:134)
...
```

4.9 Oracle Internet Directory オブジェクトの削除

repca_cleanOID.sql スクリプトを実行する前に、Oracle Internet Directory オブジェクトを削除する必要があります。OracleAS Metadata Repository をロードする前にデータベースに Oracle Internet Directory オブジェクトが格納されていた場合は、必要な Oracle Internet Directory でこれらのオブジェクトが使用されていないことを確認します。

Oracle Internet Directory オブジェクトは、次のとおりです。

- スキーマ: ODS
- 表領域: OLTS_ATTRSTORE
- 表領域: OLTS_BATTRSTORE
- 表領域: OLTS_CT_STORE
- 表領域: OLTS_DEFAULT
- 表領域: OLTS_SVRMGSTORE

次のように入力して、スクリプトを実行します (ORACLE_HOME には OracleAS RepCA のインストール先ディレクトリを指定します)。

```
prompt> cd ORACLE_HOME/repca/clean
prompt> sqlplus "sys/password as sysdba"
SQL> @repca_cleanOID.sql
```

4.10 登録解除の操作を取り消した場合のデータベースのクリーンアップ

登録解除の操作が完了する前に取消しを行うと、データベースの登録も登録解除もできなくなります。次のクリーンアップ手順を実行する必要があります。

1. データベースの登録エントリを Oracle Internet Directory から手動で削除します。詳細は、[第 C.5 項「手動の手順: 失敗した登録のクリーンアップまたは OracleAS Metadata Repository の登録解除」](#)を参照してください。
2. SQL*Plus で次の文を実行して、データベースの登録エントリを編集します。

```
prompt> sqlplus "sys/password as sysdba"
SQL> execute dbms_ias_version.set_component_loading (
      component_id=>'MRC',
      component_name=>'Oracle Application Server Metadata Repository Version',
      schema_name=>'SYS' );
SQL> execute dbms_ias_version.set_component_valid( component_id=>'MRC' );
```

OracleAS RepCA の削除

OracleAS RepCA が不要になった場合は、ここで説明する手順を使用して削除できます。

OracleAS Metadata Repository を削除または登録解除する場合は、OracleAS RepCA が必要であることを注意してください。

1. OracleAS Metadata Repository に接続して実行中の Oracle Application Server インスタンスをすべて停止します。
2. OracleAS RepCA をインストールしたオペレーティング・システム・ユーザーとしてログインします。
3. インストーラを起動します。

```
prompt> $ORACLE_HOME/oui/bin/runInstaller
```

ORACLE_HOME は、OracleAS RepCA のインストール先ディレクトリです。

4. インストーラで、次の手順を実行します。
 - a. 「ようこそ」画面：「**製品の削除**」をクリックします。
 - b. 「インベントリ」画面：削除する OracleAS RepCA インストールを選択し、「**削除**」をクリックします。
 - c. 「確認」画面：削除するために選択したコンポーネントを確認します。「**はい**」をクリックして続行します。
 - d. 「削除の処理中です。」画面：削除の進捗を監視します。
 - e. 削除が完了したら、インストーラを終了します。
5. Oracle ホーム・ディレクトリ内の残りのファイルを削除します。

```
prompt> rm -rf $ORACLE_HOME
```

サイレント・インストール

この付録では、OracleAS Metadata Repository をサイレント・モードでインストールする方法について説明します。この付録では、次の項について説明します。

- 第 B.1 項「サイレント・インストール」
- 第 B.2 項「レスポンス・ファイルとマップ・ファイルの作成」
- 第 B.3 項「インストールの開始」
- 第 B.4 項「インストール後」
- 第 B.5 項「サイレント・インストールのセキュリティに関するヒント」

B.1 サイレント・インストール

サイレント・インストールを使用すると、ユーザーに対して画面が表示されたり、ユーザーが入力をする必要がないため、OracleAS RepCA を監視する必要がありません。

OracleAS Metadata Repository のサイレント・インストールは、レスポンス・ファイルを指定して `runRepca` コマンドを実行することで実現されます。レスポンス・ファイルは、インストーラのプロンプトに対して入力する変数とパラメータ値が格納されたテキスト・ファイルです。

複数のコンピュータ上に同じようなインストールがあるときは、OracleAS Metadata Repository のサイレント・インストールを使用します。また、OracleAS Metadata Repository のインストールをリモートからコマンドラインを使用して実行するときも、サイレント・インストールを使用します。

B.2 レスポンス・ファイルとマップ・ファイルの作成

サイレント・インストールを実行する前に、レスポンス・ファイルに各自のインストールに固有の情報を指定する必要があります。正しく構成されていないレスポンス・ファイルを使用してインストールを実行した場合は、インストールに失敗します。OracleAS Metadata Repository をロードする場合は、表領域情報を指定するマップ・ファイルも提供する必要があります。レスポンス・ファイルとマップ・ファイルは、テキスト・エディタで作成および編集可能なテキスト・ファイルです。

B.2.1 テンプレートからのレスポンス・ファイルとマップ・ファイルの作成

レスポンス・ファイルとマップ・ファイルのテンプレートは、`ORACLE_HOME/repca/config` ディレクトリにあります。このディレクトリには、次のテンプレートが用意されています。

表 B-1 ORACLE_HOME/repca/config ディレクトリにあるテンプレート

ファイル・タイプ	ファイル名
OracleAS RepCA 用のレスポンス・ファイル	repca.rsp
ファイル・システムを使用するデータベース用のマップ・ファイル	file_tablespace.map
RAW デバイスを使用するデータベース用のマップ・ファイル	raw_tablespace.map
Oracle Managed Files または自動ストレージ管理を使用するデータベース用のマップ・ファイル	omf_asm_tablespace.map

ファイル内のパラメータの詳細は、テンプレート・ファイルを参照してください。

注意： ブール型パラメータの場合は、`true` または `false` を指定します。

B.2.2 レスポンス・ファイルの例

この後の項では、OracleAS Metadata Repository の次の各インストール・タイプに対応するレスポンス・ファイルの例を示します。

- 第 B.2.2.1 項「ファイル・システムを使用するデータベースに OracleAS Metadata Repository をロードする場合のファイルの例」
- 第 B.2.2.2 項「Oracle Internet Directory に登録する場合のレスポンス・ファイルの例」

注意： 提供されているサンプル・ファイルにある各 `parameter=value` の説明を熟読し、各自の環境に合わせて `value` を編集してください。

B.2.2.1 ファイル・システムを使用するデータベースに OracleAS Metadata Repository をロードする場合のファイルの例

次に、第 2.1 項「ファイル・システムを使用するデータベースへのインストール」の説明と同様の手順で、ファイルベースのデータベースに OracleAS Metadata Repository をサイレント・インストールする場合のレスポンス・ファイルとマップ・ファイルの例を示します。

B.2.2.1.1 ファイル・システムを使用するデータベースに OracleAS Metadata Repository をロードする場合のレスポンス・ファイルの例

次に、サイレント・インストールに使用するレスポンス・ファイルの例を示します。ロード操作の場合は、[GENERAL]、[INSTALL_TYPE]、[ORACLE_HOME]、[DATABASE_CONNECT] および [STORAGE_MECHANISM] セクションに対して値を指定する必要があります。また、ファイル・システムを使用するデータベースにインストールするため、[STORAGE_MECHANISM_FILE] セクションにも値の指定が必要です。オプションとして、[ADVANCED] セクションにも値を指定できます。他のセクションについては、記述は必要ですが、それらの情報は無視されます。

```
[GENERAL]
RESPONSEFILE_VERSION=10.1.2.0.1

[INSTALL_TYPE]
OPERATION=LOAD

[ORACLE_HOME]
DATABASE_ORACLE_HOME="/private2/oracle/repcadb"
LOG_DIRECTORY="/private1/oracle/log"

[DATABASE_CONNECT]
DATABASE_TYPE=SINGLE
DATABASE_HOST_PORT = dbhost.oracle.com:1521
DATABASE_SERVICE_NAME = orcl
DATABASE_USER = SYS
DATABASE_PASSWORD = welcome1

[STORAGE_MECHANISM]
STORAGE_TYPE=FILE

[STORAGE_MECHANISM_FILE]
SAME_DIRECTORY_FOR_ALL = false
TABLESPACE_LOCATION = "/private1/oradata/orcl"
TABLESPACE_LOCATION_FILE_SPEC_FILE = "/private1/file_tablespace.map"

[STORAGE_MECHANISM_OMF]
TABLESPACE_LOCATION_OMF_SPEC_FILE = "default"

[STORAGE_MECHANISM_ASM]
DISK_GROUP = "datadisk1"
TABLESPACE_LOCATION_ASM_SPEC_FILE = "default"

[STORAGE_MECHANISM_RAW]
TABLESPACE_LOCATION_RAW_SPEC_FILE = "default"

[ORACLE_INTERNET_DIRECTORY]
ORACLE_INTERNET_DIRECTORY_HOST = "default"
ORACLE_INTERNET_DIRECTORY_PORT = 389
ORACLE_INTERNET_DIRECTORY_SSL = false
ORACLE_INTERNET_DIRECTORY_USER = "cn=orcladmin"
ORACLE_INTERNET_DIRECTORY_PASSWORD=default
ORACLE_INTERNET_DIRECTORY_REALM = "default"
ORACLE_INTERNET_DIRECTORY_CONTEXT = "cn=OracleContext"

[ADVANCED]
PROCEED_ON_KNOWLEDGEBASE_FAILURE=false
```

```
DROP_CONFLICTING_SCHEMAS =false
SYSTEM_UNDO_TABLESPACE_REQUIREMENT_MET =true
```

B.2.2.1.2 ファイルベースのデータベース用のマップ・ファイル

次に、レスポンス・ファイルの行 `TABLESPACE_LOCATION_FILE_SPEC_FILE` `="/private1/file_tablespace.map"` で指定された表領域ファイルの例を示します。

```
PORTAL=HEAVY:/private/oradata/portal
PORTAL_DOC=HEAVY:/private/oradata/portal
PORTAL_IDX=HEAVY:/private/oradata/portal
PORTAL_LOG=HEAVY:/private/oradata/portal
IAS_META=MEDIUM:/private/oradata/iasmeta
DISCO_PTM5_META=MEDIUM:/private/oradata/disco1
DISCO_PTM5_CACHE=MEDIUM:/private/oradata/disco2
DCM=MEDIUM:/private/oradata/dcm
DSGATEWAY_TAB=MEDIUM:/private/oradata/dsgateway
WCRSYS_TS=MEDIUM:/private/oradata/wcrsys
B2B_RT=MEDIUM:/private/oradata/b2b_rt
B2B_DT=MEDIUM:/private/oradata/b2b_dt
B2B_IDX=MEDIUM:/private/oradata/b2b_idx
B2B_LOB=MEDIUM:/private/oradata/b2b_lob
BAM=MEDIUM:/private/oradata/bam
ORABPEL=MEDIUM:/private/oradata/orabpel
OCATS=SMALL:/private/oradata/oca
UDDISYS_TS=SMALL:/private/oradata/uddisys
OLTS_ATTRSTORE=SMALL:/private/oradata/oid1
OLTS_BATTRSTORE=SMALL:/private/oradata/oid2
OLTS_CT_STORE=SMALL:/private/oradata/oid3
OLTS_DEFAULT=SMALL:/private/oradata/oid4
OLTS_SVRMGSTORE=SMALL:/private/oradata/oid4
```

B.2.2.2 Oracle Internet Directory に登録する場合のレスポンス・ファイルの例

次に、[第 3.1 項「Oracle Internet Directory への登録」](#)の説明と同様の手順で、OracleAS Metadata Repository を Oracle Internet Directory にサイレント登録する場合のレスポンス・ファイルの例を示します。

登録操作の場合は、`[GENERAL]`、`[INSTALL_TYPE]`、`[ORACLE_HOME]`、`[DATABASE_CONNECT]` および `[ORACLE_INTERNET_DIRECTORY]` セクションに対して値を指定する必要があります。オプションとして、`[ADVANCED]` セクションにも値を指定できます。他のセクションについては、記述は必要ですが、それらの情報は無視されます。

```
[GENERAL]
RESPONSEFILE_VERSION=10.1.2.0.1

[INSTALL_TYPE]
OPERATION=REGISTER

[ORACLE_HOME]
DATABASE_ORACLE_HOME="/private2/oracle/repadb"
LOG_DIRECTORY="/private1/oracle/log"

[DATABASE_CONNECT]
DATABASE_TYPE=SINGLE
DATABASE_HOST_PORT = dbhost.oracle.com:1521
DATABASE_SERVICE_NAME = orcl
DATABASE_USER = SYS
DATABASE_PASSWORD = welcome1

[STORAGE_MECHANISM]
STORAGE_TYPE=FILE
```

```

[STORAGE_Mechanism_File]
SAME_DIRECTORY_FOR_ALL = false
TABLESPACE_LOCATION = "default"
TABLESPACE_LOCATION_FILE_SPEC_FILE = "default"

[STORAGE_Mechanism_OMF]
TABLESPACE_LOCATION_OMF_SPEC_FILE = "default"

[STORAGE_Mechanism_ASM]
DISK_GROUP = "datadisk1"
TABLESPACE_LOCATION_ASM_SPEC_FILE = "default"

[STORAGE_Mechanism_RAW]
TABLESPACE_LOCATION_RAW_SPEC_FILE = "default"

[ORACLE_INTERNET_DIRECTORY]
ORACLE_INTERNET_DIRECTORY_HOST = "foo.acme.com"
ORACLE_INTERNET_DIRECTORY_PORT = 389
ORACLE_INTERNET_DIRECTORY_SSL = false
ORACLE_INTERNET_DIRECTORY_USER = "cn=orcladmin"
ORACLE_INTERNET_DIRECTORY_PASSWORD=welcome123
ORACLE_INTERNET_DIRECTORY_REALM = "foobar"
ORACLE_INTERNET_DIRECTORY_CONTEXT = "cn=OracleContext"

[ADVANCED]
PROCEED_ON_KNOWLEDGEBASE_FAILURE=false
DROP_CONFLICTING_SCHEMAS =false
SYSTEM_UNDO_TABLESPACE_REQUIREMENT_MET =true

```

B.3 インストールの開始

インストーラに対してレスポンス・ファイルの使用を指示するには、`-SILENT` オプションを使用して `runRepca` コマンドを実行するときに、パラメータとして使用するレスポンス・ファイルの場所を指定します。

サイレント・インストールを実行するには、次のコマンドを実行します。

```
prompt> ORACLE_HOME/runRepca -SILENT -RESPONSEFILE absolute_path_and_filename
```

注意： `runRepca` コマンドのオプションでは、大文字と小文字が区別されません。

B.4 インストール後

サイレント・インストールの成功または失敗は、`repca_<time_stamp>.log` ファイルに記録されます。このログ・ファイルは、レスポンス・ファイルの `LOG_DIRECTORY` パラメータで指定したディレクトリに作成されます。

B.5 サイレント・インストールのセキュリティに関するヒント

レスポンス・ファイルには、データベースのパスワードと Oracle Internet Directory のパスワードが含まれます。パスワードの情報はクリア・テキストです。

レスポンス・ファイルに含まれるパスワードのセキュリティ上の問題を最小限に抑えるには、次のガイドラインに従います。

- サイレント・インストールを実行するオペレーティング・システムのユーザーのみがレスポンス・ファイルを読み取ることができるように、レスポンス・ファイルのアクセス権を設定します。
- 可能な場合は、サイレント・インストールの完了後に、システムからレスポンス・ファイルを削除します。

OracleAS RepCA のトラブルシューティング

この付録では、OracleAS RepCA の実行時に発生する可能性のある一般的な問題を解決する方法について説明します。次の項について説明します。

- 第 C.1 項「データベースに接続できない」
- 第 C.2 項「sys ユーザーで接続できない」
- 第 C.3 項「領域不足」
- 第 C.4 項「複数ノードの指定後、Real Application Clusters データベースでロードが失敗する」
- 第 C.5 項「手動の手順: 失敗した登録のクリーンアップまたは OracleAS Metadata Repository の登録解除」
- 第 C.6 項「ORA-01403: データが見つかりません。」
- 第 C.7 項「ORA-06510: PL/SQL: ユーザー定義の例外が発生しましたが、処理されませんでした」
- 第 C.8 項「ORA-01031: 権限の不足」
- 第 C.9 項「OracleAS Metadata Repository のロード後に、DSGATEWAY スキーマに無効なオブジェクトが作成される」
- 第 C.10 項「その他の情報」

C.1 データベースに接続できない

問題

OracleAS RepCA がデータベースに接続できない。

解決策

次の項目を確認します。

- 正しいサービス名 (*SID* または *SID.domainname*) を使用していること
- データベースが起動していること
- リスナーが起動していること
- データベースへのネットワーク接続性があること
- ORACLE_HOME/sqlplus/admin ディレクトリにある glogin.sql ファイルまたは login.sql ファイルを確認します。次のようなユーザー・プロンプト行を含めないでください。

```
column db_name new_value db_name noprint
select user || ' on ' || name "db_name" from v$database ;
set sqlprompt "&db_name> "
```

いずれかのファイルにこのユーザー・プロンプト行が含まれている場合は、次の手順を実行します。

- a. ファイルの名前を他の名前に変更します。
- b. OracleAS RepCA を終了します。
- c. OracleAS RepCA を再起動します。
- d. 接続を再試行します。
- e. OracleAS RepCA が実行されたら、ファイルの名前を元に戻します。

C.2 sys ユーザーで接続できない

問題

OracleAS RepCA を実行すると次のメッセージが表示される。

```
RepCA unable to connect as sys. Error message:
*** Specify Database Connect ***
ERROR -SQLException on getting SID and SYSTEMNAME
informationjava.sql.SQLException:
@ ORA-01017 : invalid username/password; logon denied
```

解決策

次の操作を試行します。

- sys ユーザーのパスワードが正しく入力されていることを確認します。
- sys ユーザーのパスワードを再設定し、再試行します。パスワードは、ORACLE_HOME/bin/orapwd コマンドを使用して再設定できます。詳細は、[第 1.5.13 項「パスワード・ファイル認証」](#)の手順 1 (1-17 ページ) を参照してください。
- ORACLE_HOME/sqlplus/admin ディレクトリにある glogin.sql ファイルまたは login.sql ファイルを確認します。次のようなユーザー・プロンプト行を含めないでください。

```
column db_name new_value db_name noprint
select user || ' on ' || name "db_name" from v$database ;
set sqlprompt "&db_name> "
```

いずれかのファイルにこれらの行が含まれている場合は、次の手順を実行します。

- a. ファイルの名前を他の名前に変更します。
- b. OracleAS RepCA を終了します。
- c. OracleAS RepCA を再起動します。
- d. 接続を再試行します。
- e. OracleAS RepCA が実行されたら、ファイルの名前を元に戻します。

C.3 領域不足

問題

既存の Real Application Clusters データベースに OracleAS RepCA をロードするとエラーが表示される。

解決策

データベースで RAW デバイスを使用している場合は、次の手順を実行します。

1. OracleAS RepCA を終了します。
2. 別の RAW デバイスをデータベースに追加します。
3. OracleAS RepCA を再起動します。

データベースでファイル・システムを使用している場合は、次の手順を実行します。

1. ファイル・システムに十分なディスク領域があることを確認します。
2. 表領域を AUTOEXTEND に設定します。

C.4 複数ノードの指定後、Real Application Clusters データベースでロードが失敗する

問題

既存の Real Application Clusters データベースに OracleAS RepCA をロードするとエラーが表示される（「データベース接続情報を指定」画面で、Real Application Clusters データベースのノードを複数指定した場合）。

解決策

「データベース接続情報を指定」画面で Real Application Clusters データベースのノードを入力するとき、指定するデータベースのノードは 1 つだけにします。OracleAS RepCA によってロードされるデータは、Real Application Clusters ソフトウェアによってすべてのノードに自動的にレプリケートされます。

C.5 手動の手順：失敗した登録のクリーンアップまたは OracleAS Metadata Repository の登録解除

この項では、OracleAS RepCA を使用せずに Oracle Internet Directory 内の登録エントリをクリーンアップする方法について説明します。

1. Oracle Directory Manager を使用して、Oracle Internet Directory に接続します。
 - a. Oracle Directory Manager を起動します。

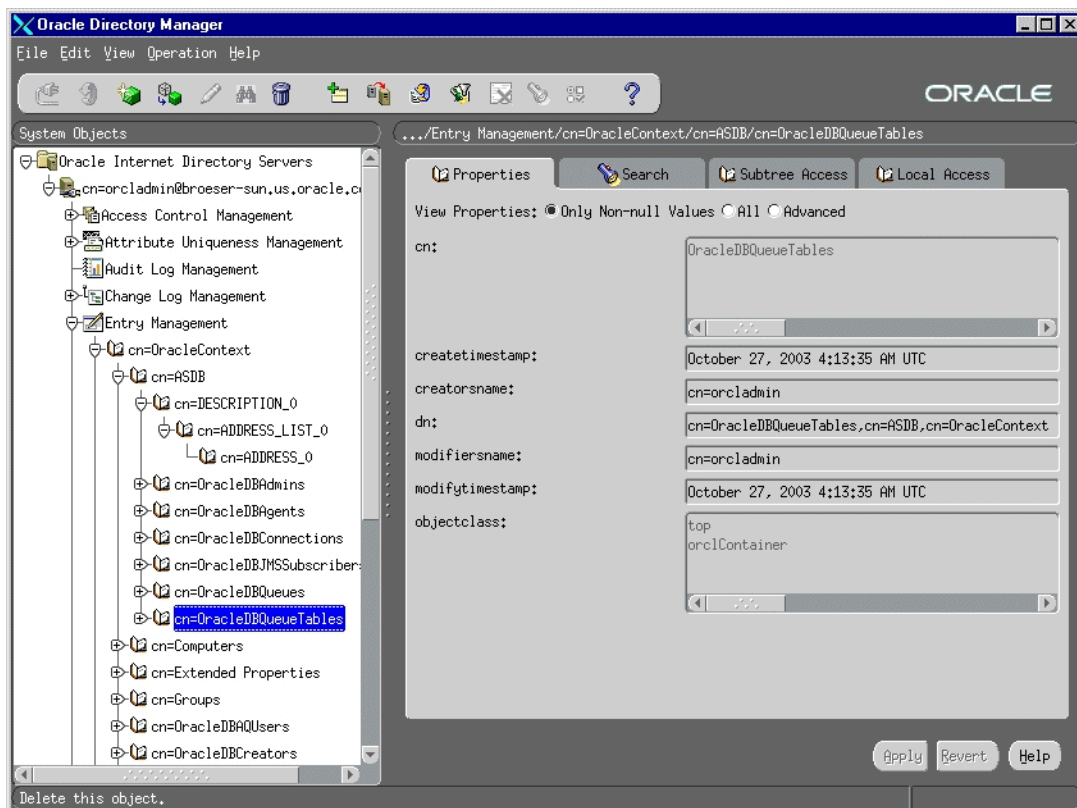
```
prompt> $ORACLE_HOME/bin/oidadmin
```

- b. 「接続」画面で、接続情報を入力します。Oracle Internet Directory スーパーユーザー (cn=orcladmin) としてログインします。
2. Oracle Internet Directory のデータベース登録エントリをクリーンアップします。
 - a. 次のようにエントリを開きます (図 C-1 を参照)。
「エントリ管理」→「cn=OracleContext」→「cn=your_database_name」
 - b. 「cn=your_database_name」下のすべての子エントリを、最下部の子エントリから削除します。

「cn=DESCRIPTION_0」エントリを削除する場合、まず最後の子までエントリを開きます。その後、最も深い階層の子から削除していきます。

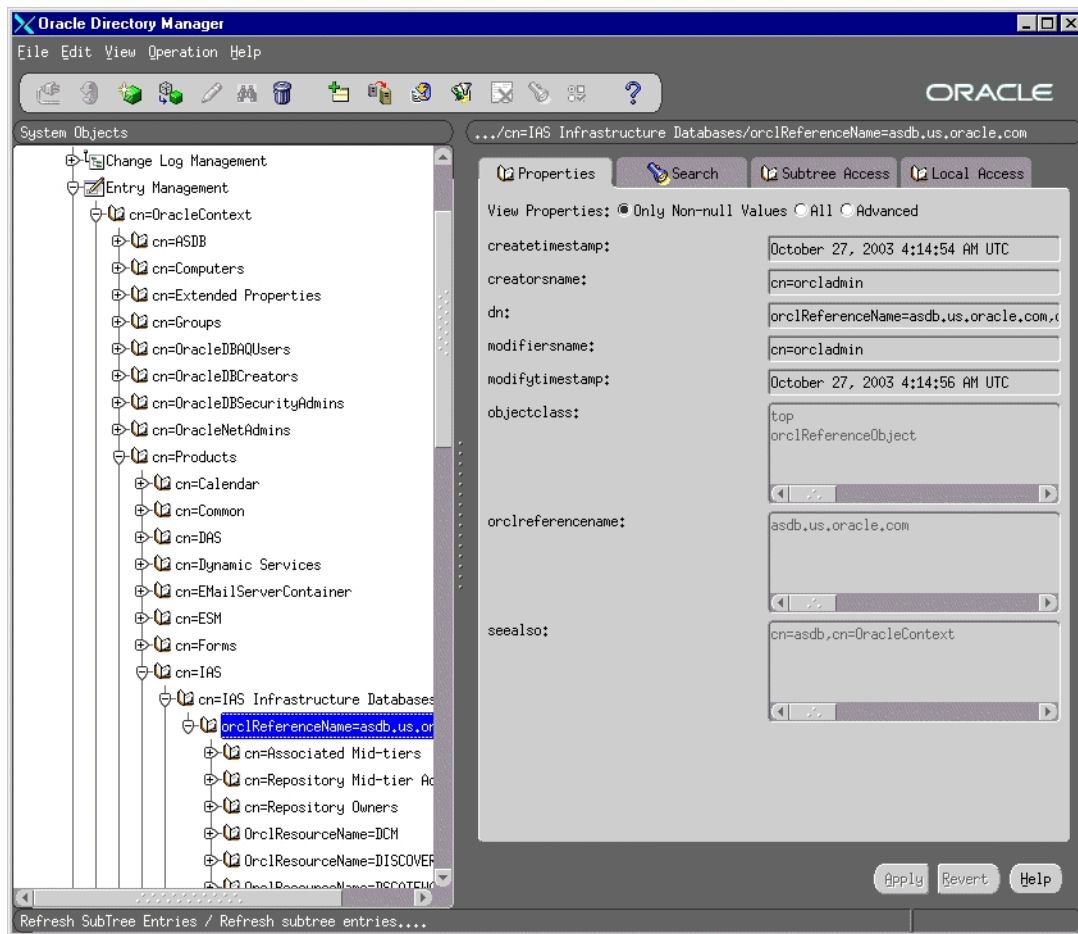
エントリを削除するには、それぞれの子エントリを右クリックし、ポップアップ・メニューから「削除」を選択します。「確認」ダイアログで「はい」をクリックします。子エントリを削除していると、エラー・メッセージが表示されることがあります。そのエラー・メッセージは無視できます。
 - c. 「cn=your_database_name」を右クリックし、削除します。

図 C-1 データベース登録エントリのクリーンアップ



3. Oracle Internet Directory のメタデータ・リポジトリ登録エントリをクリーンアップします。
 - a. 次のようにエントリを開きます (図 C-2 を参照)。
「エントリ管理」→「cn=OracleContext」→「cn=Products」→「cn=IAS」→「cn=IAS Infrastructure Databases」→「orclReferenceName= your_database_name」
 - b. 「orclReferenceName=your_database_name」下のそれぞれの子エントリを削除します。
 - c. 「orclReferenceName=your_database_name」エントリを削除します。

図 C-2 メタデータ・リポジトリ登録エントリのクリーンアップ



C.6 ORA-01403: データが見つかりません。

問題

OracleAS RepCA で Workflow スキーマをロードすると、PL/SQL エラーの「ORA-01403: データが見つかりません。」が返される。

解決策

環境変数 `NLS_LANG` に、英語以外のロケールが設定されています。OracleAS RepCA を実行する前に、環境変数 `NLS_LANG` を設定解除するか、または `american_america.us7ascii` に設定します。

```
prompt> unsetenv NLS_LANG
- or -
prompt> setenv NLS_LANG american_america.us7ascii
```

環境変数 `NLS_LANG` の設定は、OracleAS RepCA を実行した後で、元の値に戻すことができます。

C.7 ORA-06510: PL/SQL: ユーザー定義の例外が発生しましたが、処理されませんでした

OracleAS RepCA のロード後に、エラー「ORA-06510: PL/SQL: ユーザー定義の例外が発生しましたが、処理されませんでした」がログ・ファイルに出力されます。

このエラーは、DSGATEWAY スキーマ用のロード・スクリプトが実行されると発生します。これらのスクリプトは OracleAS Syndication 製品に属しますが、この製品は廃止されています。DSGATEWAY スキーマは、下位互換性のために作成されています。

C.8 ORA-01031: 権限の不足

問題

OracleAS RepCA のロード後、ログ・ファイルに「ORA-01031: 権限の不足」エラーが記録される。

解決策

このエラーは、OracleAS Syndication 製品のロード中に発生します。OracleAS Syndication 製品は廃止されており、互換性を保つためにロードされます。このエラー・メッセージは無視してかまいません。

C.9 OracleAS Metadata Repository のロード後に、DSGATEWAY スキーマに無効なオブジェクトが作成される

問題

Oracle Database 10g に OracleAS Metadata Repository をロードすると、DSGATEWAY スキーマに無効なオブジェクトが作成される。

解決策

Oracle Application Server 10g (10.1.4.0.1) では、DSGATEWAY スキーマは使用されなくなりました。これは、下位互換性のためにのみ提供されています。この無効なオブジェクトは無視してかまいません。

C.10 その他の情報

この付録で、発生した問題を解決できない場合は、次に示すドキュメントも参照してください。

- Oracle Technology Network
(<http://www.oracle.com/technology/documentation>) で入手可能な Oracle Application Server のリリース・ノート。
- Oracle MetaLink (<http://metalink.oracle.com>)

問題の解決方法が見つからない場合は、サービス・リクエストを行ってください。

索引

数字

9.2.0.7 パッチ・セットの catpatch.sql, 1-7

A

ASM インスタンスのディスク・グループ, 2-15
ASM を使用するデータベースに対して実行, 2-14

C

cleanMR スクリプト, 4-10
エラー, 4-11

D

db_create_file_dest 初期化パラメータ, 2-17
DBMS_LDAP パッケージ, 1-13
DBPrereqChecker ツール, 1-5
DCM スキーマ、インストール後のロック解除, 2-22

I

installActions.log, B-5

L

ldap.ora ファイル、インストール後のコピー, 2-21

O

ORA-01403
データが見つかりません, C-5
ORA-06510
PL/SQL
ユーザー定義の例外が発生しましたが、処理されませんでした, C-6
ORA-2000 エラー, 4-11
Oracle Database 10g, 1-6
Oracle Internet Directory
OracleAS Metadata Repository の登録, 3-1
OracleAS Metadata Repository の登録解除, C-3
オブジェクトの削除, 4-12
サポートされるリリース, 1-24
登録の確認, 1-23
Oracle Internet Directory オブジェクトの削除, 4-12
Oracle Internet Directory への登録の確認, 1-23
Oracle Managed Files

OracleAS Metadata Repository に使用, 2-17
Oracle Managed Files を使用するデータベースに対して
実行, 2-17
Oracle Ultra Search、インスタンスの作成, 2-22
Oracle9i リリース 2 (9.2.x) データベース, 1-7
OracleAS Metadata Repository
ASM を使用するデータベースへのインストール
, 2-14
Oracle Internet Directory への登録, 3-1
Oracle Managed Files へのインストール, 2-17
RAW デバイスを使用するデータベースへのイン
ストール, 2-4
Real Application Clusters データベースへのイン
ストール, 2-7, 2-9
既存のデータベースへのロード, 2-1
再インストール, 2-23
削除, 4-1, 4-10
スキーマ, 1-18
登録解除, 4-1, 4-7, C-3
表領域, 1-18
ファイル・システムを使用するデータベースへのイン
ストール, 2-2
OracleAS Metadata Repository Creation Assistant
インストール, 1-3
概要, 1-2
起動, 1-24
削除, A-1
実行するための要件, 1-3
トラブルシューティング, C-1
OracleAS Metadata Repository Creation Assistant のイン
ストール, 1-3
OracleAS Metadata Repository Creation Assistant の起動
, 1-24
OracleAS Metadata Repository Creation Assistant の削除
, A-1
OracleAS Metadata Repository Creation Assistant を実行
するためのオペレーティング・システム, 1-3
OracleAS Metadata Repository Creation Assistant を実行
するための仮想メモリ要件, 1-3
OracleAS Metadata Repository Creation Assistant を実行
するためのディスプレイ要件, 1-3
OracleAS Metadata Repository Creation Assistant を実行
するためのメモリ要件, 1-3
OracleAS Metadata Repository の Oracle Internet
Directory への登録, 3-1, 3-2
Oracle Internet Directory の確認, 1-23
完了前に終了, 3-4
失敗した登録のクリーンアップ, C-3

登録解除, 4-1, C-3
登録後の手順, 3-4
登録の失敗, 2-23, 3-4
OracleAS Metadata Repository の再インストール, 2-23
OracleAS Metadata Repository の削除, 4-1
 cleanMR スクリプトの使用, 4-10
 ウィザードの使用, 4-5
OracleAS Metadata Repository の登録解除, 4-1, 4-7, C-3
 ウィザードの使用, 4-2
 取消し, 4-12
ORU-10027 エラー, 4-11

R

RAW デバイス
 Real Application Clusters データベース以外での使用, 2-4
 Real Application Clusters データベースでの使用, 2-11
 既存データベースの最小サイズ, 1-22
Real Application Clusters データベース
 Oracle AS Metadata Repository に使用, 2-7, 2-9
 RAW デバイス, 2-11
 インストールの概要, 2-8
 クラスタ・ファイル・システム, 2-9
 ボリューム・マネージャ, 2-9
Real Application Clusters データベースに対して実行, 2-7
runRepca コマンド, 1-24

S

silentInstall.log, B-5
sqlnet.ora ファイル、インストール後の更新, 2-21
Standard Edition データベース, 1-8
SYSTEM 表領域 (必要なディスク領域), 1-8

U

UNDO 表領域 (必要なディスク領域), 1-8

あ

インストール後の手順, 2-21
 ldap.ora ファイルのコピー, 2-21
 sqlnet.ora ファイルの更新, 2-21
 サイレントまたは非対話型インストール, B-5

か

環境変数 DBCA_RAW_CONFIG, 2-5
既存のデータベース、OracleAS Metadata Repository のロード, 2-1
クラスタ・ファイル・システム, 2-9

さ

サイレント・インストール, B-2
 インストール後の手順, B-5
 セキュリティに関するヒント, B-6
 レスポンス・ファイルの作成, B-2
サイレントおよび非対話型インストールのセキュリティ

 に関するヒント, B-6
サポートされる記憶域の種類, 1-2
失敗した登録、クリーンアップ, C-3
自動ストレージ管理 (ASM) インスタンス
 OracleAS Metadata Repository に使用, 2-14
 ディスク・グループの使用, 2-15
 標準のファイルの使用, 2-17
スキーマ, 1-18
 cleanMR による削除, 4-10
 OracleAS Metadata Repository, 1-18
スワップ領域の要件
 OracleAS Metadata Repository Creation Assistant を実行, 1-8
前提条件チェック・ツール, 1-5

た

ディスク領域の要件
 OracleAS Metadata Repository Creation Assistant を実行, 1-3
 SYSTEM 表領域および UNDO 表領域, 1-8
 表領域, 1-8
データベース
 Oracle Managed Files, 2-17
 RAW デバイススペースのデータベースの使用, 2-4
 Real Application Clusters データベースの使用, 2-7
 Standard Edition, 1-8
 SYS で接続できない, C-2
 既存のデータベースの使用, 1-4
 サポートされる記憶域の種類, 1-2
 サポートされるリリース, 1-6
 自動ストレージ管理, 2-14
 接続できない, C-2
 必要なオプション, 1-12
 ファイル・システムベースのデータベースの使用, 2-2
 要件, 1-4
 ローカルおよびリモートのサポート, 1-2
登録後の手順, 3-4
トラブルシューティング, C-1
 登録の失敗, 2-23
 ロードの失敗, 2-22

な

ナレッジ・ベースの要件, 1-15

は

パスワード・ファイル認証, 1-17
非対話型インストール, B-1
 インストール後の手順, B-5
 セキュリティに関するヒント, B-6
 ログ・ファイル, B-5
必要な PL/SQL パッケージ, 1-13
必要な初期化パラメータ, 1-9
表領域, 1-18
 AUTOEXTEND, 1-21
 cleanMR による削除, 4-10
 OracleAS Metadata Repository, 1-18
 サイズ, 1-21
ボリューム・マネージャ, 2-9

ま

問題のないエラー (ログ・ファイル) , 2-20

や

要件 (OracleAS Metadata Repository Creation Assistant
を実行する) , 1-3

オペレーティング・システム , 1-3

仮想メモリー , 1-3

ディスク領域 , 1-3

ディスプレイ , 1-3

メモリー , 1-3

要件 (データベース) , 1-4

DBMS_LDAP パッケージ , 1-13

PL/SQL パッケージ , 1-13

初期化パラメータ , 1-9

スキーマ , 1-18

スワップ領域 , 1-8

前提条件チェック・ツールの実行 , 1-5

ディスク領域 , 1-8

データベース・オプション , 1-12

データベースのリリース , 1-6

ナレッジ・ベース , 1-15

パスワード・ファイル認証 , 1-17

表領域 , 1-18

ら

リモート・データベースのサポート , 1-2

レスポンス・ファイル , B-2

コマンドラインでの指定 , B-5

作成 , B-2

テンプレート , B-2

例 , B-2

ローカル・データベースのサポート , 1-2

ロードの失敗 , 2-22

ログ・ファイル

非対話型インストーラ , B-5

ログ・ファイル、問題のないエラー , 2-20

